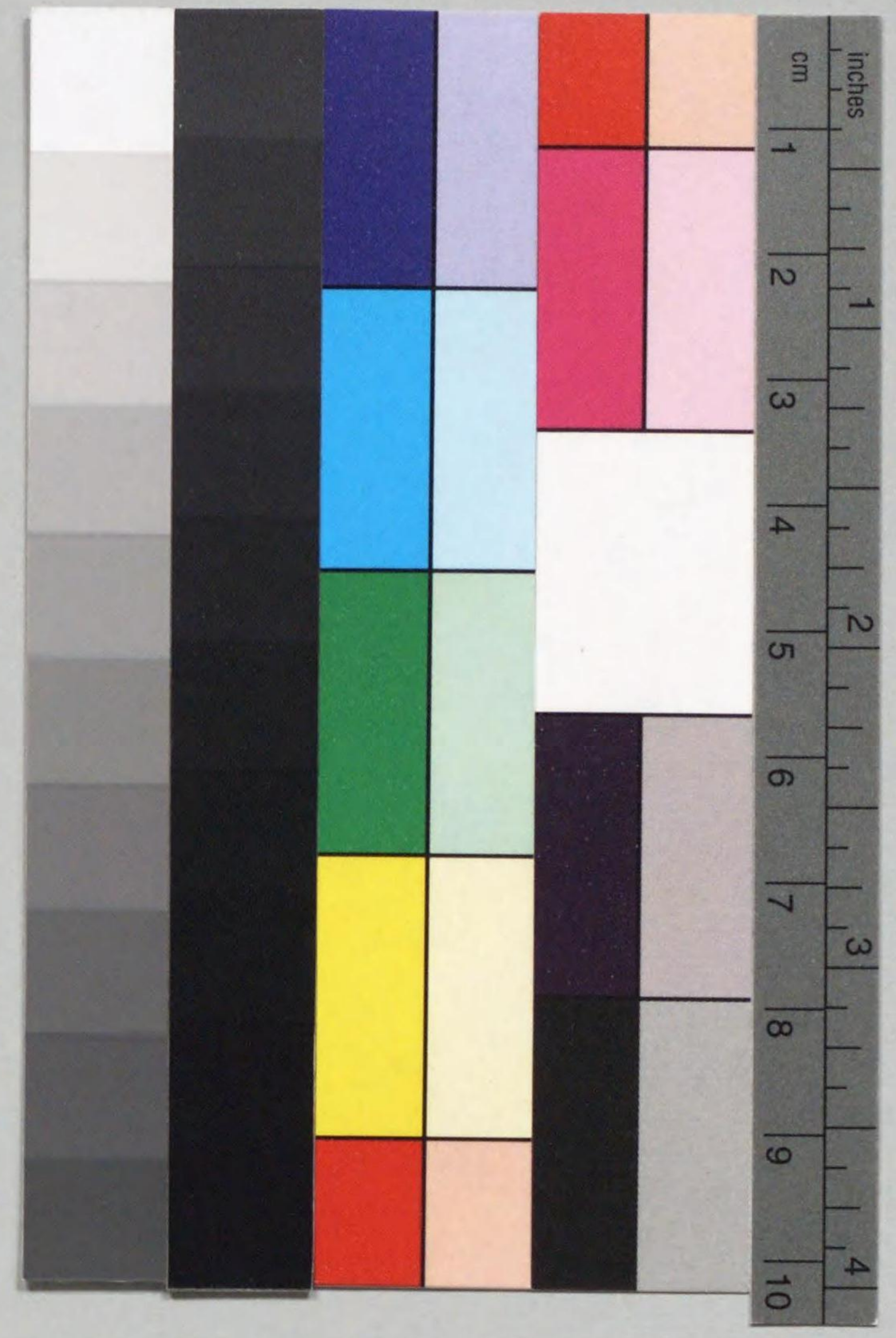
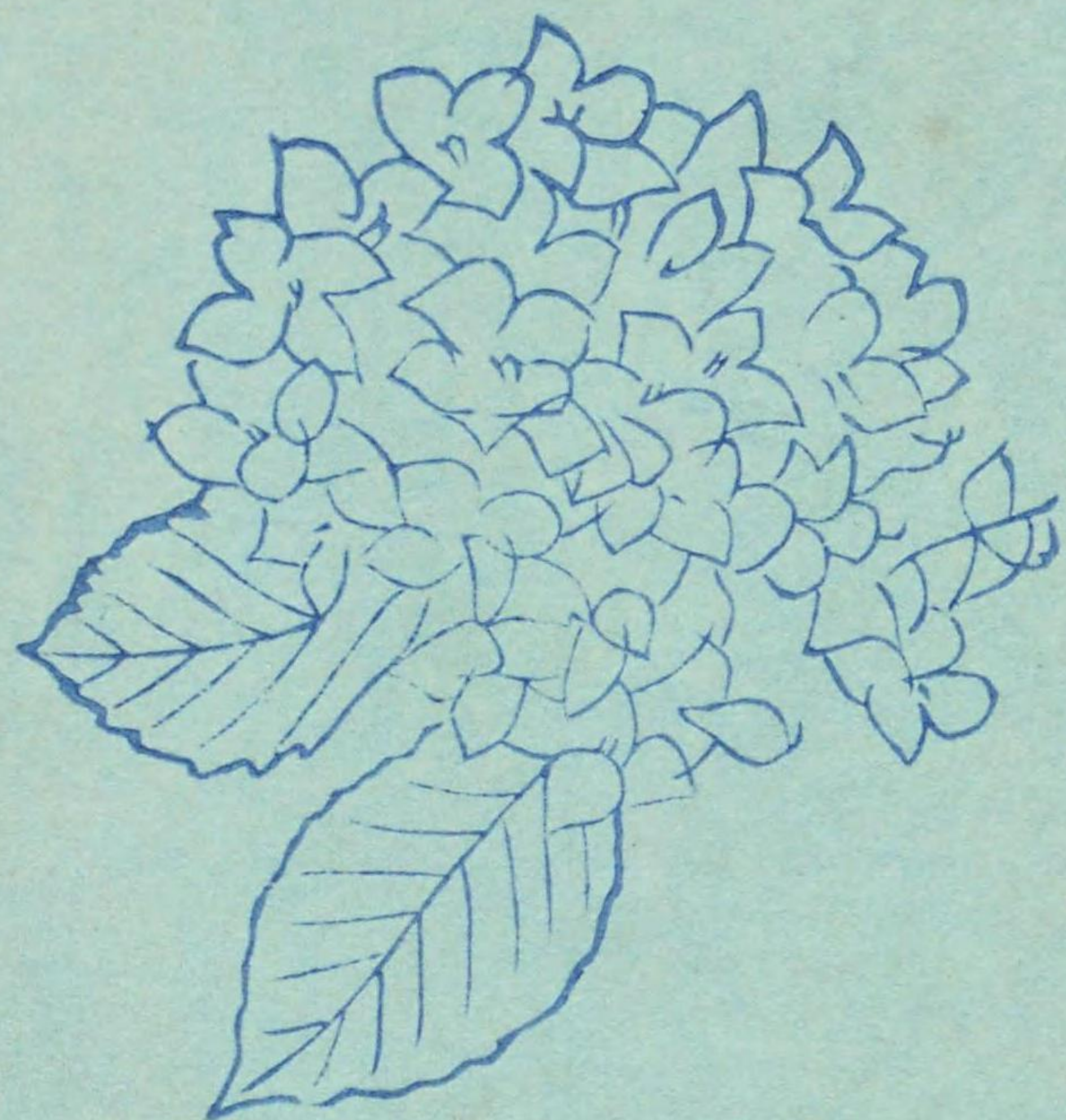


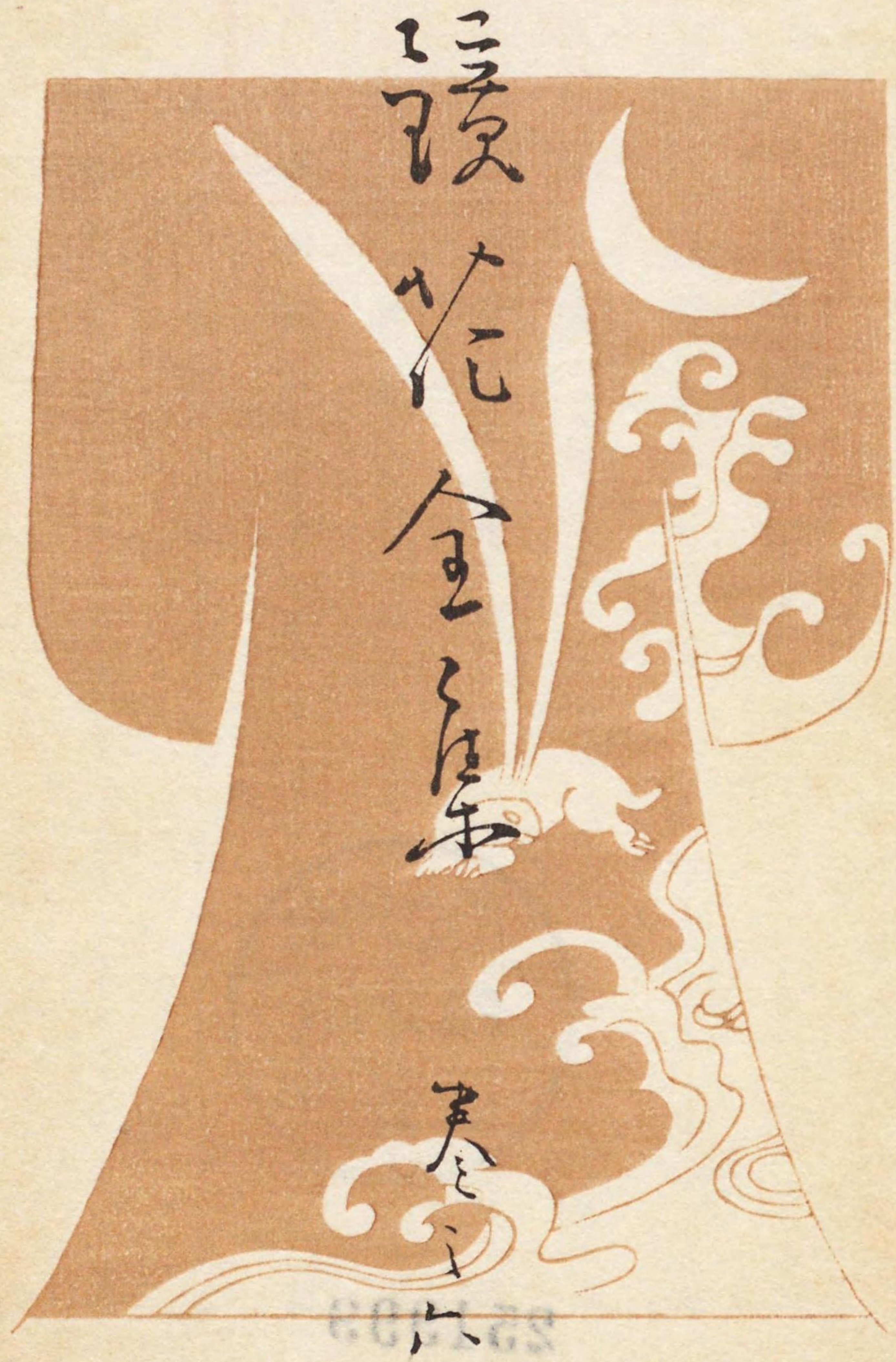
918.6
1989k



00251999







後

花

金

卷

二七〇〇



国立国会
26.11.24
図書館

251999

目次

月 下 園 (明治三十三年六月).....	一
ゆき松の露 (明治三十三年六月).....	三五
うしろ髪 (明治三十三年七月).....	三
長屋刃傷 (明治三十三年八月).....	五
三枚續 (明治三十三年八月).....	五七
式部小路 (明治三十九年一月).....	一九
女 肩衣 (明治三十三年十月).....	三七
葛飾砂子 (明治三十三年十一月).....	三七

裸蠟燭	(明治三十三年十一月).....	四三三
政談十二社	(明治三十三年十一月).....	四四一
處方祕箋	(明治三十四年一月).....	四九一
斧の舞	(明治三十四年一月).....	五〇七
雪の翼	(明治三十四年一月).....	五二七
風流後妻打	(明治三十四年一月).....	五三一
水鶏の里	(明治三十四年三月).....	五四九
註文帳	(明治三十四年四月).....	五七一
蠅を憎む記	(明治三十四年六月).....	六五一

月下園



此の邊は未だ盛に鶯の聲がする、根岸も上野寄りの唯有る横町、曲角は廣小路邊の去る料理茶屋の寮で、小路の右側は、其の板塀の新しいのが眞直に續いて居る、當面に一軒古びた冠木門の戸を閉切つたのが在つて、屋根には草が生えて居るだけでも、内の荒涼たる状を想ふに足る。是は四季折々の花を殊に卯花を以つて聞えた月下園と、知る人ぞ知る女優市川満壽美が獨棲の隠家である。今こそ大審院の檢事と云ふ身分に成つて、相談づくで切れて了つては居るが、舊は其名の達と云ふのを、假名に和くたつさんと浮名を流した時分、満壽美が大得意の是見よがしに、男の能書を猶嬉しく徒書を爲してもらつた

野暮の者入る可からず

と有る制札を當時の形見に、庭の入口に立置いて、然も何人の入るをも拒まず縦覽させて、氣に合へば敷物も出し、茶も出して、主が躬ら待すと云ふ、一風變つた所を人が喜んで、杖を曳く者も絶えぬのであつたが、満壽美が礎と此の木戸を鎖して、飄然として行方を知らせず出て行つ

てから、今は早や三年越。

地體家業柄なり、特に派手好の負ける嫌で、稍氣骨の稜々たる者有るが爲に、悪くは爲てくれぬ人の曳く袖を幾度となく振拂つて、世の中を氣儘三昧に送るだけ、それだけ都合が儘にならぬ習、いつか云といふ程積つた借財の、其山を挾んで北海道筋を出稼に暫く影を潜めたのである。留守には一箇の婆さんが居るばかりであるから、おのづと音づる、者は無くなる、それに、手は無し、掃除は届かず、雨は降る、風は吹く、草は延びる、垣は壞れる、釘付に爲たやうな門の扉は、合せ目に貼然と蜘蛛が巢を懸けて、滿庭の青葉は晝尙昏く沈々として、哀に物の儂き風が戦ぐのである。

園下月

右側の板塀の内は鉄を入れた庭木の梢が形好く立並んで居るが、片側は森の下蔭の草深く、晝でも爪頭の濡れさうな、細い小路の三分一は件の寮の持分である證には、現金に其だけは車前子の根も見えず、綺麗に手入が届いて、日向の土は涎々と光つて居る。月下園の門際の山吹の葉で埋つた垣の中から、矢を射る如く顯れた赤犬は、草の尖で腹を擦つて駈來ると、又一匹追かけて出た黒斑は、露地の中程で赤の背中を前向へ高く跳り越えた。上になり下になり、二三度吠合つて引組んだが、斑は忽ち隙を得て鐵道線路の方へ逃行くのを、赤は驀地に續いた。

恰も爾時麟々と勢の好い車の音がして、寮の前あたりに乗り付けた氣勢であつたが、間有ると

此の翠滴るばかりの小路に得ならぬ芳芬を散して婀娜な姿が顯れた。着付は薄紅かけの薄落し染にした縮緬の單衣、藍鼠地に白上りの水と、葉を墨仕上にした紫紺の姫百合の模様。帯は御納戸縹子に銀の泥描の雪景山水。齡は廿五六よと見えて、形の小造な、所謂柳腰の、後姿の好い、小意氣な細面の、口許の緊つた、背の凛とした、ふつさり有る髪を樂屋銀杏と云ふのに結んで、白粉も傅けずに。深張の傘と手鞆とを一つに提げて、汗ばんだ頸許に被る後毛を搔上げながら、無雜作に蹠躑と歩いて月下園の門まで着いたが、何思ひけむ急に立住つて四邊の光景を一邊熟と胸した。扉の蜘蛛の巣と、屋根の草と、庭の眞闇に成つたのには、些と驚いたらしく惘然として居たが、旋て耳門を放けて翻然と入つた。

折しも洗濯盥を据ゑて精々と水を汲んで居た留守居の婆さんは、顔を振向けると與に、覺えず出たと云ふやうな怪しからぬ大聲で、

「おや〜！おや、まあ、お歸り遊ばせ、お師匠さん、まあ貴方。」

「媼さん、御機嫌好う。」

「まあお師匠さん、貴方もお變も御座いませんで。まあ〜大相お長かつたぢや御座いませんか、それに一向お便も御座いませんものでしたから、甚麼にお案じ申して居りましたらう。而して如何で御座いましたえ、那地のお景氣は。」

「まあ何方かと謂へば好い方でね、」

「そりや何より結構で御座いましたね。」

「まあ喜んでおくんない、些は儲けて来たんだよ。」

「好い鹽梅で御座いましたね。何爲ろ、貴方、お召替でもなさいますして、直にお風呂を沸しますで御座います。未だどうもお掃除も致しませんですから、取散かつちや居りますが。」

と禪を脱しながら急いで水口から上つた。満壽美は存分に荒果てたる園内の景色を眺めつつ、徐に駒下駄を鳴して、飛石傳ひに小座敷の前に出て、其處の障子を啓けるなり、どつかりと腰を掛けた、而して奈何か我家ならぬ餘所にでも来たやうな氣色で、杏脱に足を揃へて、片手を後に挂いたまゝ、恍然と庭を見入つて居るのであつた。其處へ出て来た婆さんは、

「ほんに、まあ今日お歸来にならうとは夢にも存じませんでした。お師匠さん、貴方何を那樣に見惚れてお在でなさるんで御座いますえ。お久しぶりでお宅がお珍しいので御座いますかい。」

満壽美は些と見返つたばかりで、然うでもあり、然うでもないと言つたやうな笑を含んだ、が極めて氣の無い、寂しい、何等の意味か別に有りさうな。

「まあ、お上り遊ばしませんかね、え、お師匠さん。」

「此で些と休ませて下さい。」

「然やうならお莫盆でも持つて参りませう。」

「但しお茶代は出ませんよ。」

仇口を利く傍から直に歎息を呷いて項を垂るゝのである。

嗟呼、慙して歸つて来て見れば、やつぱり自分の家ほど好い處は無、何と無く嬉しいものだ。とは謂ふものの親は無、兄弟は無、逢ひたい人は此には居ず、三年越稼いで歸つて来た、少しは持つて歸つて来たと言ふのに、然うか、好く歸つて来たと言ふでくれる人は無、え、張合の無い事だ！

女傭には花が咲くと云ふが、嘘だね、大嘘だ。自分なんぞの花の咲かない事は夥しい。好いと一所に居る事なら、三度の物を二度食べて、其の一度はお芋のお粥でも厭はないね、樂みなものさ。那の人が能く然うお言ひだつて、女は三界に家無し、夫を以つて家と爲だつて、那の病身の弱い家にも困らせられたが、全くだね、夫を以つて家と爲に違無いの、今ぢや其家が無いのだから、まづ私は宿無しの状態、難有い譯さ。那の人が居たら、慙でもなからう、那でもなからうと思ふ事は始終だ。而して何を爲るにも充らないが先に立つて、衆が己の事を以前のやうな元氣が無いの、未だ老込むには早からうのと言ふけれど、自分ながら餘程腑が抜けたと思ふくらる憤然して居るよ。其通りだから雨に就け、風に就け、那の人の事は懐ひ出すのだけれど、今日と

云ふ今日ばかりは怵へ切れないほど……噫、一目で可いから此で顔が見たい。「お、歸つて来たか。してな事を言つて、蜷斗の看板見たやうなパイプを啣へて、私の大嫌な臭の苜を燻しながら、那の離座敷から見上げるやうな身材で從容出てお在なさるのだ。「大變長くなりましたして濟みませんでした、然ぞ御不自由で御座いましたらう。」か何か云ふと、「然う自惚れんものだ、お前が居らん方が却つて靜で可い。」なんて、他の顔さへ見れば憎まれ口だ。それだから喧嘩も爲たし、焼餅も焼いたし、譴られも爲た、泣きも爲た、撲れも爲れば咬付いた事も有つたつが、何と言つたつても面白かつたのは那の時分だ。而も二人で氣儘暮しを爲て樂んだのは此家ぢやないか。家は其時のまゝで慙して残つて居るに就けても、變るは人の身の上で、那の人は立派な出世、此方は本尊様の無い堂守をして、這麼空店見たやうな處に燻つて居るとは、餘程意氣地無いのだね。

噫、もう女はお退だ。女ぐらゐる割の悪い、充らない者はありはしない、今度の世には立派な男に生れる事だ。那まで散々苦勞をして、棄てられたと云ふ次第ぢやないが、切れないやならな義理になつて、切れたからには那の人の事を斷然忘れて了ふのなら、未だ始末も可いのだけれど、其が忘れられないばかりに、誰も頼みも爲ないのに、今の若さに後家を立てて、高慢な顔をして居るだけ猶慘憺だ。此間も達さんが或人に私の事を話して、「俺は濟まん。」と言つて涙を零して下すつたと聞いた時の其の嬉しさ、何有、濟むも濟まないも有りはしない、添はれないのも

猶且縁だ。然う断念めちや居るものの、心細い時、寂しい時には、心底惚れた男の事だもの戀しくなくて何爲るものか!

端無くも思迫つた満壽美は其の涼しげな目に溢る、涙を推拭つたハンカチーフを其處へ敲き付けた。時に婆さんの蹺音が爲るので、遽に園内を見渡したが、満目の縁を破つて咲遅れた卯花の白妙が、消えなむとする雪の覺束なげに三處ばかりに残るのを、其色と謂ひ其姿と謂ひ、奈何見ても儂い花の咲様、と熟く感じて居る間に、自と其の儂さが染つたやうな氣がして、急に物悲しく胸が塞つて、其花は己、己は即ち其花であるが如く思做されて、夢とも現ともなく自失して了つたのである。

二

婆さんが来て何やら聲を掛けた時、満壽美は我に復ると等しく、更に又目に着く物が有つた。離座敷の縁の際に七絲緞の鼻緒と縮天友染のと、いづれも眞新しい男女の駒下駄が並んで居るのである。

「媼さん、那は奈何したの。」

「お師匠さん何で御座います。」

「大相色氣の有る履物が有るぢやないか、那處にさ。」

「へい、那。……」

「お客でも有るのかい。」

「へい那は、あの、何で御座います、實は早速お師匠さんに然う申上げなけりやならないんで御座いましたが、お歸り早々で御座いましたもんですから、つい未だお話も致しませんで、甚だ相濟みませんで御座いますが、ねえ、貴方、實は箇様な譯なんで御座いますよ。」

お師匠さんのお留守中に私が一存で取計ひましたやうで、誠に申譯は御座いませんですが、私單身でもつて寂しくは御座いますし、ねえ、貴方、恚してお座敷も空いて居りますもんで御座いますから、ねえ、貴方。」

婆さんは頗る言淀むのであつた。満壽美は聞かぬ先から少しく痛癢に障つた鹽梅で、横目に熟と彼の顔……と云ふよりは、寧ろ其の唇の異しげに翫るのを打目成つて居た。此に於て婆さんの唇は愈よ翫るを沮むのである。

「誰かに貸したんですか。」

「へい、あの何で御座いますよ、手前の姪の主人筋で御座いまして、是非と申しまして、もう姪が手を合すやうにして頼むんで御座います、別にお座敷を汚しますやうなお方ぢや御座いませず、

歴とした御身分のお方ぢやあり致しますんで、然云ふ譯ならばお師匠さんはお留守の事だから、ほんの内證で私がお貸し申すんだから、どうか其の積でと先様へも好くお断を申しまして、ねえ、貴方、實は此の春から、何で御座います、あの離座敷へ、ねえ、貴方。」

「御夫婦かい。」

「い、え、未だ表立つて御夫婦と申すんでは御座いませぬけれど、是非其の御夫婦に成りたいと有仰つて、當分隠れてお出なので御座いますがね、」

「それぢや色事だ。」

「まあ、然やうなんで御座いますよ。」

「まあな事が有るものか、立派に然やうなんでさあね。ぢや、若いんでせうね。」

「十八に廿四だと有仰いました。」

「素人なんですな。」

「え、く、素人も素人もお嬢さまの方は外神田の柵屋と云ふ鐵物屋さんのお娘御で、對手のお方はお出入のお醫者様の代脈さんださうで御座いますがね、いつか、まあ出來たのを、親御様は御存じ無かつたので、いよく餘所へ御縁談が出來ると、其の始末で、お定りの騒動が持上つたんで御座います。ところがお袋様が粹で、密とお二人を逃して、其内に何とか話を付けようから、

當分忍んで居るが可い、と萬々呑込んで被在るんで、お手元からお見繼になるんで御座いますから、遠方では便利が悪し、係合の有る家ぢや直に嗅付けられるからと、手前の姪が舊御奉公を致して居りました縁で、今だにお出入を致すもんで御座いますから、是へお話が有りまして、何處か無からうかと色々御心配なすつてお在なんで、此方様のお噂を致しました所が、ねえ貴方、助けると思つて是非其を奈何ともしてくれるやうに、と懇々も御頼になるもんで御座いますから、姪も俱共に御心配申して、私へ參りましたんで御座いますよ。」

お師匠さんのお吩咐も御座います事ですから、私も切て斷つたんで御座いますけれど、それぢやお師匠さんがお歸りに成つたら、改めて御挨拶も爲ようし、婆やに迷惑は掛けないから、と先様が然やう有仰るものを、それでもとは私も申し切れませんで、到頭離座敷を一問お貸し申したんで御座います。

どうか、まあお師匠さん、私も然云ふ次第で餘儀無く何致したんで御座いますから、何分まあ御勘辨あそばして。」

「あ、然やうですか。若い時には有内とか云ふんでせう。鐵物屋のお嬢さんにお醫者さんのお弟子ですつて？」

「然やうなんで御座いますよ。」

満壽美は目を翳せて何やら思案して居たが、

「こりや止したが可いにね。」

「はい？」

「末が案じられると申す事さ。而して奈何して居るの、大相静ぢやないか。」

「未だ夜中なんで御座いますよ、貴方。」

「常談ぢやないよ、何時だと思つて居るんだ。」

帯の間を搜つて襟から細い金鎖を繋げた兩蓋の金時計を出して、ぱちりと啓けた。

「ちよいと十時廻つて居るぢやないか。」

「おや、まあ。」

「色事だつて心掛が要るわね。些とは所帯持の稽古でも爲るが可いちやないか。」

彼は稍不興の體であつた。

三

旋て手鞆から取出したのが、古代紫の鹽瀬の貫入、銀延の細いので一服吸付けて、
「十八だつて？別品かい。」

「お美しいんで御座いますよ、而して極の初でねえ、貴方。那麼御様子で居ながら何爲て、まあ
那云ふ事を作つたらうかと、私は不思議でならないんで御座います。」

満壽美は唯笑つて居る。

「それに又眞鍋さんと有仰る方も極溫和な、品の善い方で御座いましてね、お二人がお二人とも
揃つた、甚麼に好い御夫婦で御座いませう。本當にお目に掛けたう御座います。」

「眞平ですよ。此方は獨者だ、お静に願ひたいね。」

「ほ、ほ、ほ、お静と有仰れば一日お静でないんで御座いましてね、それはお二人とも暢氣なも
ので、玩具を持つてお遊びなさらないばかり、其の騒と云つたらお話にも何にも成りは致しま
せん。」

「阿母さんの後見附の色事ぢや那樣ものでせうよ。」

彼は襟の爪楊枝を抜いて、充らなさうに雁首を搦つた。

「お可羨しいお身の上だつちやありや致しません、まあ是が尋常ならば、奈何しても此が一苦勞
なさる處なんで御座いますわ、ねえ、貴方。其が大差で、宛で保養でも作つて被在るやうな鹽梅
で、唯もう面白可笑く暮してお在なんぢや御座いませんか。」

本當に芝居で致す通、縮緬の袢を襪にして臺所へ出てお在なすつて、お香々を切せてくれと有

仰るから、其の様に爲て上げると、茄子の蒂と一所に指をお切なすつたと云ふ騷、大變だと云ふもんで、眞鍋さんが直に藥を入れた靴か何かを提げて臺所へ出張なさる、然う爲ると貴方、靴の鍵が掛つて了つて、頻に遣るけれど開かない、其中に血が止つて了つたと云ふ、大笑が有るんで御座います。

それから、先達の事でしたけれど、今日はお天氣が好いから洗濯物を爲て見たいから盥を出してくれと有仰るんです。まあ、何を爲さる事かと思つて出して上げますと、水は眞鍋さんが汲むから可いと有仰つて、お二人で井戸端へ出てお在ななしてしたが、日が映るからつて、眞鍋さんが傍に附切で、片方には御自分の蝙蝠傘を翳して、片方でお嬢様の深張を翳掛けて、些とじやぶじやぶと遣つちや顔を見たり、又じやぶ〜と遣つちや話を爲したり、二時間の餘も掛つてすう〜言つて入つてお在なさるから、奈何なすつたのかと思ひましたら、這處に成つて了つたと有仰つて、見ますと、お手の平が兩方とも眞赤に腫れて了つたんで御座いますよ。まあ怖いもんで、不斷作り付けない事を遊ばすと然うなんで御座います。お育柄とは云ひながら、お洗濯を作つてお手が腫れるとは大したものだ、と私も思ひましてね、何をお洗ひなすつたのか、と行つて見ましたんで御座います。然う致すと、那の大盥に一杯の水が石鹸で眞白に成つて、棹に干して有るのは手巾が三枚限なんで御座いませう。是は的然盜まれたに違無いと思ひましたから、直に其事を

申しますと、やつぱり手巾を三枚しかお洗ひなすつたんぢやないと云ふんで、

「常談ぢやない、お米は兩に六升五合だよ。」

「其の始末で御座いますから、御飯の時の騷なんでもは有りや致しません、一口づ、お茶碗の替事を爲さる、お茶を挾んで食べさせ合ふ、此のお暑いのに小鍋立をなさいますね、蚊帳を釣つて、其中でお茶の湯が始まる。然うかと思ふと、眞鍋さんに御本を教はつて、是はまあ眞面目で大相御勉強な事だと感心して居りますと、何有ね、直にお仕舞に成つて、今度はお嬢様が眞鍋さんに針仕事をお教へなさる、餘り馬鹿々々しくても居られないぢや御座いませんか。」

「聞いても居られないね。」

愈よ苦り切つて、眼は正面の卯花に移りながら、彼は兩箇が分を知らざる戲謔を熟く傍痛く思ふと與に、決して那樣ものではなかつた達さんとの昔を薙々と胸に浮べるのである。

其の時分己は十九で、親の恩を負ふ叔母が一人有つた。其人を立過しに爲て居ながら、達さんを引取つて勉強させるから身始末から、皆己の細腕一本で左なり右なり遣つて却けるのであつたから、辛い、苦しいのと云つて、一通りや二通りではなかつた。又那の人にしても、國元は歴史とした大家で、田地、田畠、山だ、林だと、何不足無い身に生れながら、繼母に憎れて、後には親類一門まで皆敵に成り、廢嫡されて故郷を逐れ、東京へ出て人の玄關に食客と成つて、學問し

たいにも紙一枚思ふやうに買ねぬ身の上で居たのゆゑ、此方の世話に成るのを仇や疎かには爲まいと、ほんに傍で見居るのも氣の傷むほど、始終机に倚懸つて勉強を爲すに爲てお在なすつたのだ。

世間ぢや聒しく噂を立てて、色だ、浮氣だ、意氣事だと、面白さうに云囉したのだが、それは好いた同士の寄合だから、色には違無かつたけれど、眞摯の夫婦中よりもづいと神妙な、何と謂つたら可からうか、所帯氣な者だつた。私の逆上やうが劇しかつたのと、世間の評判が大袈裟だつたので、到頭世話に成つて居た人の耳に入り、其男を一生守る覺悟なら、綺麗に手を切つて添せて遣らうと粹な辭に、此外の浮氣はおろか、是非那人を立派な人間に仕上げて見たいと廣言を吐いて、此の別荘まで祝つて戴いたのだ。それから那人を此へ入れて勉強させる事になつたのだが、旦那に向つて云つた口上が有るから、適れ一廉の人に爲なけりや顔が立たないので、そりや那人も一生懸命ぢやあつたが、附いて居る此方も氣が氣ぢやない、もう然うなると、色事なんぞは其方退で、私は外で稼ぐ、那人は内で學問を勵む、一所に居たからとて、なか／＼取付いたり、引付いたり爲る所ぢやなかつた。そりや樂でないとは謂はないが、他で思ふやうな者ぢやない、惚合つた同士が夫婦に成つたと云ふやうな意氣な世界ぢやないのだつた。

其に引易へて、離座敷に居る兩箇の態は何事だらう。仕合と謂ふのか、鈍智機と謂ふのか、何の事は無い、遊び旁に色事を爲て居るのだ。愚物と鼻洩垂と寄集つて、何の眞似を爲て居るのだか、自分で自分の爲る事も解らずに、朝から晩までべた／＼密着合つて居さへすりや、高がそれで氣が霽れると謂ふだけの事だらう。それは色ぢやない、姪樂と謂ふのだ。凡そ色事と謂ふものは眞面目が五分で苦勞が四分、樂と謂つては一分有るか無し、命を捨てる覺悟でお互に思合ふのが身の上なのだから、生死の境の處で樂むのだ。

如何に世間不見同士だからつて、餘り馬鹿にして居るぢやないか、少しは人間の冥理と云ふ事も考へるものだ。那樣了簡方で愚にも付かない悪作劇を爲て居て、それで惚れたの、好いたのも凄じい、極樂蜻蛉の一雙々！ 第一に親の罰、世の罰、人の罰、此の家主様の満壽美の罰の當るのを知らないか。那麼に散々苦勞を爲ながら、命を懸けた人に添へない例も有るのだ。お前さんが其で添はうとは些と蟲が善過ぎるよ、添れるものなら添つてお見な。逆も苦勞の峠を踰えて、其の又奥の奥迄踏込んで、未始終添はうと云ふ、那樣罪の深い御所存も無いのだらう。そんなら早く退になさるがお身の爲さ。濱の眞砂は盡きるとも世に馬鹿者の種は盡きないのだね。

満壽美は獨で鬱勃腹を立てて、對手も有らば喧嘩の爲て見たいほど慣れ切つて居た。弗と振向く途端に婆さんと顔を突合せたが、其處の機が悪かつたので、
「困り者ぢやないかねえ。」

と少し斜に成つて伸を爲た。

四

「でも、お師匠さん貴方、其は無理も御座いませんですよ、お年は行かず、から無垢のお嬢様育ちでお在なさんるんですもの、謂はば是から苦勞もお覺えなさるんで御座いませう。今の内の那の襪兒のやうな處が究竟身上なんで、私は却つて高慢ちやくれた、利いた風なのよりは、仇氣無い方がお嬢様らしくて、甚麽に善いか知れない、と然う思ひますんで御座います。」

連に喋り立てるのを、満壽美は聞くでもなければ聞かぬでもなく、耳に入るでもなければ、入らぬでもなく、何方でも可い事にして半は自分と其人との事を猶考へて居たのであるが、

「然う、此間の那のお扮装！」

と婆さんが急に憶出した拍子の高聲に、はつと満壽美は氣が着いて、忙々しく其を喫ふのであつた。

「お師匠さん貴方は然う有仰いますけれど那のお嬢様の子柄の好い、そりや可愛らしい處を御覽なすつたら、屹と貴方は涎で御座いますよ。私は今だに目に着いて居ますのは、此間でした、紹明石を召したんで御座います、透模様とか申します、襲に成つて居まして、上と下と模様が別々で、其が透いて見えますの。」

満壽美は眉を擡めた。

「今頃細なんぞを何だつて着たのさ。又風でも引いて、其の人の診察が受けたいと云つたやうな洒落ぢやないのかい。」

「洒落は洒落なんぢや御座いますけれど、其が餘程愛嬌が有るんで、貴方、恚なんで御座いますよ。其の二三日前かにお袋様から内々御便が有りましたんで、其時次手だから届けるつて、夏のお召が大きなのに二柵來たんで御座います。すると、貴方、それをお二人さんで引覆して、是が似合ふの、那が適るのと、帯だ、長襦袢だ、帷子だ——それは奈何も驚絶しい、金目の物ばかりで、ねえ、貴方——お座敷中一杯に散かして、『兜あらため』見たやうな事が始つて了つたんですが、這様に着物が來たからつて、今の身の上ぢや之を着て何處へ出掛けられようぢやなし、寶の持腐れで誠に充らない、と恚う、まあお嬢様が有仰つたもんです。然う致すと、眞鍋さんは又惚れた目ですから、一つ隆と着飾らせて、格別美しい處を見たいんで御座いませう、ですから、些と着てお見なと云ふ譯で、ぢや、何でも貴方のお氣に入つたのを着ますから有仰いと言ふと、御好か今の紹明石の透模様で、表の地が薄淺葱の落し染で御座います、其に點々と朱葉が散つて居ますんで、襲は白地に秋の七草が御納戸で出て居るんで御座います。其の貴方、鮮な秀抜した

工合と申したら無いんで御座いますよ。それから、帯が鹽瀬の友染で、珍らしい模様ぢや御座い
ませんか、瀬切の男浪が恠う有りまして、直と藍の暈し上に成つて、其へ金銀(泥描)でもつて女
浪が出て居るんで、是非之をと云ふ御註文なんで、それからお化粧が始まる、私がお髪を撫付け
る、全で何地へかお出掛になるやうな騒で、やうくお召更が出来ました。其の、まあ、お美し
かつた事と申したら、繪に描きましたからつて那は参るもんぢや御座いません。地體姿が好くて
お在なさんるんですから、絹を召したところの肩狀から、此の腰の邊の極つた鹽梅なんでものは謂
へませんの。

さあ、それですから、眞鍋さんは、貴方、有卦に入つて了つて、家の中を彼地此地へ歩かせた
り、坐らせたり、摩違つて見たり、振返らせたり、手を牽けたり、追掛けたり、散々ばら色々な
眞似をして好い玩弄に作つて、それで御用は濟んだ所が、今度は御自分が外へ出て見たいと有仰
るんで、那のお庭のお稻荷様へ御参と云ふ御慰が始つたんぢや御座いませんか、貴方。

新しいお履物をお下しなすつて、お傘も餘所行ので、眞直に行つちや餘り近過るからでんで、
木戸の處から七草の花壇へ出て、あれから藤棚の下を通つて、匠匠と蓮池を廻つて、お宮の後へ
出ようと、お路順が極つたんで、さあ其からお庭の中を御遼で御座います。

少し行つたかと思ふと、奄々云つて歸つてお在なすつて、藤棚の處が可厭に薄暗くて、那の手
前の隈笹の生えて居る邊へ行くと木が覆被つて居て、全で此方が見えないから、山の中へ入つた
やうで氣味が悪いから、眞鍋さんに一所に来てくれと有仰るので、到頭お二人連で御参をなさ
ましたつけが、丁と貴方お賽錢まで上げてお出で、私はお土産まで戴いたんで御座いますよ。

那して、まあ御不自由が無いから、他愛無い事をして遊んで被在るんで御座いますけれど、御
仲の好いのは、見て居りましても樂のやうな心持が致すんで御座いますよ。お師匠さんなどは
其の御器量ですから、幾多でも、ねえ、何とか有仰る方がお有なさんるんで御座いますよのに、然
うして何日までもお獨身で被在るのは、本當に勿體ないやうに、ねえ、貴方、私は毎も然う思ひ
ますんですよ。」

「おや難有いのね。」

満壽美は苦笑して、衝と身を起した。

五

彼は遣る方無き胸の鬱結を解かむが爲か、或は三年見ざりし庭の面影を可懐むのか、飛石傳ひ
に歩を緩くして入口の方へ行くのであつた。行つて立住つたのは盧橘の花の散りて跡無き緑の蔭、
則ち彼の(野暮の者入る可からず)の制札の前である。満壽美は其の雨に風に日に露に曝れて半

は消えたる筆の蹟を打眺めて、其の十字が彼の目には長い、長い文言と成つて、讀めども、讀めども盡きざるが如く、いつまでも、いつまでも、佇むのである。然るに、彼の面は次第に悽然たる色を帯びて、此上を見るに忍びず成つたか、乍ち首を低れて、制札の前に往きつ復りつした。

彼の鶏鐘の聞えぬ里の隱家の人は、今漸く起き出たか、離座敷の戸を繰る音が爲たので、屹と顔を擧げて見遣つた満壽美の目は、曇つて文色も分かぬほど涙が盈ちて居た。

離座敷の戸は纔に外の明を容るゝほど開いたばかりで、人の影は見えぬのであつた。

満壽美は又制札の前に立つた時のやうに身動も爲す其方を瞞めたのである。

制札の主と己とが那の座敷に住つた頃は甚麼であつたか。勉強中は色でない、と那の人が那裏へ入つて机に向つたら、背後から羽織を着せ掛けても、振返つた事さへ無く、まして冗談口一つ利かず、漫と傍へ寄る事も出来なかつた、ものの鹽磨に爲たより清淨の學問所。其處へ眞晝間になるまで蚊帳を釣り散かして、那の態は何だ。日の目が見えないのつべらばうの化物め、野暮さへ入れない月下園の此の立札が、と満壽美は腹立紛れの力任せにぐいと引抜いて、

「媼さん媼さん！」

と痾癩聲を振立てながら、制札を杖にして従々と復つて来る。

婆さんは何事かと奥から驅出る、離座敷でも何事かと兩箇が巽然顔を出した。其の正面へ制札

を丁と挫いた満壽美は、

「さあ、離座敷の客に今直立つて貰ふんだよ。」

兩箇は又巽然引込んで、婆さんが獨り立竦んだ。

早く逐立てて了へ、那の化物どもの退散する迄、餘所へ之を預けに行くと、満壽美は制札を持つて、其場から出て行つた。

ゆみ
きち
松
の
露

番町の土手を二人連、職工か、仕事師か威勢の可い、一人は、あゝあゝと、酔醒の欠伸なり、一人は中音で一寸そゝる、唄に曰く、

君に別れて松原行けば、

松の露やら涙やら。

「何うする〜」と囁す。

「何うするもんか、此の勢で繰込むんだ。」

「牛込見附で汽車に乗はつした處なんざ、餘り此の勢でもあるめえぜ。」

「そこが風流だよ。」

「何處が風流だよ。」

「あゝ、朧月夜にしくものぞなき。」と高慢にいつて歩行しながら空を。

「見ねえ此の工合の佳さといつたらねえぜ、未だ餘寒相去り申さすだけれど、ブツと春めいて来ましたね、照りもせず曇りも果てぬ春の夜のだ。市ヶ谷の杜から一面に霞ぢやねえか。」

斜に向う岸をすかして及腰になり、

「ちやうど坂の上の温泉のあたりだらう、ちら〜と灯が點れて居るのは、あの又霞の中にぼんやりしてるのが可いぢやあないか。」

「汝ぢやあるめえし、何のぼんやりが可いものか、其よりか、ね、おい、揚場の柳の方を見ねえ、はつきり晴れて居て格別だぜ。」

「だつてアノぼんやりした處も可いぢやあねえか。」

「うんや、判然が可い。」

「だがよ、まあさ。」

「うんや、判然が可い。」

「此男は詰らねえ、妙なことに意地張るもんだ。」

「うんや判然が可い。」といひかけて笑ひ出した、他もまた笑つて、

「それぢやあまた、お耳うるさうございませうが、それ照りもせず曇りも果てぬさ、可いかい、

それで和睦。」

「可い、可い、然うものが分つたら些と急がうぜ。」

「それ、松の露だ、それ〜、と立停まる。」

「何、露なものか、こりや何うにかして濡れてるんだネ。」

「二三日お天氣だものを、他に、だつて心當りはねえやうだ。」

「それだつたつて此頃露が下りるものかい。」

「いや、こりや何本目の松だか知らねえが土手の中でも目立つて枝振が可いや、そして大きうはあるし、古さうだ、往來へ枝がおつかぶさつてぼんやり月が、おい、また氣にするなよ、ぼんやり月がかゝつてる工合てえなねえからね、すべてもの千年を経れば靈ありで、露がしたゝらないとも限るまいて。」

「道理で人魂位大きさのある露だ、大袈裟にわどつて薄暗くなつてるぢやあねえか。」

「そりやかわいた地へ浸むからよ、葉末ぢやアあるまいし、此男は露といや玉になつて轉がつてばかり居ると思つてるさうだ。」といひながら、ものすきにも、うつむいてじつと透して見たが、俄にあらたまつて、

「おや、」といつて立直り駒下駄のさきでチヨイと突つくと、引つかゝつてむかうへころろと行つた。

「おきやあがれ。」

「様あ見やがれ、はゝゝはゝ。」

「此奴が、知つて居てとぼけたな。」

「知れたこつたな、凡そ道一町が間は是れがまつゝさ。」

一人はつくゝと歎息して、

「あいつが涙も此位なものだらう。宿にやあ馬糞がつきものだ、ひどくばかされたい。」

「其處が風流だらう。」

「朧月夜に如くものぞなき。」

「おきやあがれ。」

うしろ髪

「御免なさい。」

格子戸の外に媚めかしい聲がした。

夏の午過ぎのこと彼は四時間近といふ頃である。

麻布飯倉邊の、唯ある路地の棟割長屋のはづれの家で、冬は相應に凌ぎ可いが、いかに蒸暑くつても葭簀に入替へようといふ所帯ではなし、はづして了へば、夜食の菜も外から見透かされるから不得止、たてたまゝで置く障子の蔭の、此の上口の三疊に引出つきの杉の机を控へて、川邊句作といふ青年、家に遠縁のもので此處に寄宿をして居るが、都合あつて今日は食べないで歸つた、朝々持參で區役所で開く筈の腰辨當を、お八ツがはりの退屈凌ぎにやつて、正に一口頬張つた處で應ともいはず。音信れたものは答も待たないで、がらりと開けた格子戸を閉めもせず、早や框を上つて入つたのでぼんやり顔を向けると目の前に二十ばかりの婦人。水色縮緬の扱帯で細腰を縊るばかり幅廣に引緊めたが、引掛けに結んだ縹子の帯は少しすり下つて居る、薄お納戸の

地に紺で琴柱を染めた中形の浴衣、際立つて目の涼しいのが、銀杏返にさした簪の耳を一寸おさへ、

「御免なさいまし、おかみさんは、」とそはくする。

「宅であります。」とものゝしく、句作は膝に手を置いて、じつと打守ると、婦人は涼しい目を奥の方へそらして、

「お宅？おかみさん、一寸おかみさん、」と呼びながら、次の六疊をつか／＼と斜に切つて、一段高くなつた長四疊へ飛ぶが如くに上つた。こゝに長火鉢が置いてある、傍に蠅取瓶、柱掛に團扇四五本あり、横に蠅帳と並べた箆笥の上に小さな招猫、お定まりの縁起棚、下の六疊で待たして此處で髪を結ふのであるから、脊の高い鏡臺、たゞう紙、廣めのために頼まれた、花の露、月の雫、音羽菊などといふ類の小瓶をならべ、茶道具を置いた火鉢の際の壁へ棹を渡して、襪、前垂、手拭がかゝつて居る。

今此の中へ衝と立つた婦人の姿を逸早く認めて、

「おや、お新さん。」

といひさま勝手から出て来たのは、女主人でお光といふ髮結、いつも午過から花主廻をするのだけれども、差當つた鬘と島田をあくる日に延ばして、今日はどんたくを遣つたが、暑さが烈し

く、おちく／＼晝寐も出来ないので、少々日影のある臺所へ出て、板の間へ足を揃へてすとと投出し、水口を開けても押被さるやうな大屋様の土蔵の白壁を、まんじり下の方から段々影になる日脚を瞪めて居たのが、目の覚める美しさをいそ／＼と迎へたのである。

「おかみさん、」と美しいのはお光の肩へ立ちながら手をかけて、ひつたりと差寄つて、

「あのね、」

「入らつしやい。」とお光は急込む女客の顔を見ながら落着いて澄していふ。

「いゝえ、さあ、」と少しじれる。

「何うしたの。」

「耳をお貸しなさいな。」

「唯、」と大きく。

「厭ですよ。」といつたが片手で其の肩をおさへたまゝ、例の簪の耳を一す。

「来たわ。」

お光は耳を貸したまゝ、二ツばかり頷いた。

「むゝ／＼。」

二

「何うしよう。一寸、」

「何うしようつてまあ此方へお入れ申すのさ。」

「はあ、」

とばかりお新はうつかりな顔で居る。

「其のつもりになつてるんぢやあないか、何をセツせいづてるのさ、何うしたの、そして、……」

お新は

「お新は吻といふ呼吸をついて、やゝ衣紋の亂れたのを、袂の尖ではた／＼と煽いで黙然。

お光は手を伸して柱なる其の團扇を取らうとして、

「まあ、お坐んなさいよ、何をそは／＼して居るんだね、お前さんは。」

「おゝ、暑い。」

煽いで居た袂の端を口に啣へ、雪のやうな頸脚を伸べて俯向いて軽く後毛を搔上げながら、お

新は微笑んで嬉しさうなり。其顔色を正面に熟と視て、

「可い加減になさい。」と磔と胸を突かうとする、掌をよげさまに膝を丁とついて、お新は平つた

く坐つた。

「何うかしてよ、此人は。」

「だつておかみさん駈出して来たんですもの、一體来やうが早いよ。私や日が暮れてからのつもりだつたのに今頃何うでせう、ばら／＼人通のある中を眞個に極が悪いつたらありませんでしたよ。」

と未だ忙しいいきをつくののである。

お光は長火鉢のむかうへ中腰になつて、

「へい、それぢやあ此の日中また手を引き合つておいでなすつたかい。」

「あれ、然うぢやあ無いんですが、だつて、来やうが疾いんぢやアありませんか、私や日が暮れてからのつもりだつたのに。」

とお新は更にかことがましい。

これが爲に髪結も眞面目になり、

「可いぢやあないかね、私ん處は朝ツからでも構はないんだから。然して何うしたの、其人は。」

「其處まで来て居ませうよ、私は先へ駈出して来たんですから、」

「まあ、」

「おかみさん、濟みませんが一寸、見て下さいな。」

「私に、と重々しく、故と眞顔になられてお新は簪の耳をおさへて、少し顔を斜めにして極の悪

さうに、

「はあ、後生だわ。」

「唯、唯、唯。」といつて、衝と立つと前掛の下へぐいと手を入れて下メを締め上げながら、ばた

ばたと臺所の板の間を鳴して水口から路地へ廻つた。

お新は見送つて意味もなく氣拔けがしたやうに莞爾する。

背後から大跨につか／＼と遣つて来て無手と長火鉢の向う、お新の前へ膝を分けて踏つた。

旬作の長い顔が目前へ出るとお新は身を交すが如くに座を開いて、づつと立つて、表の間へ下

りて路地に面する格子から簾越しに外を覗いた、後姿は一寸小腰を屈めたのである。

其時夏帽子の小形なのを左手に取り、白の手中を持った手を胸に置き、紺紵に縮緬の帯、素足

に駒下駄を穿いた二十二三なのが、恥ぢたる姿、内端に路地の溝板を渡つてお新が覗いてる簾の

ついで外。

「あゝ、もし其處でございます。」と向うでお光の呼ぶのが聞える。

お新は我知らず顔を赤めた。

男は振り返つて會釋をしたが、やがて開けたまゝの門口をすつと。

三

「お、」

男は玄關へ入るが否や、其時まで簾に顔を押しつけたまゝで居る後姿に向つて懐しげに呼懸けたが、お新が振向いたのと顔を合せて、

「驚いた、何うも弱つたよ。」と打解けた中と見える。

「入らうと思つても何だか勝手が、」と何か言はうとして口をつぐんだ男は、長火鉢の前に食後の湯を飲んで居る句作の長い顔を見たのである。

知らぬ顔をして面を背け、お新と少し離れながら背中合せになつて、所在なげに天井を瞞めて立つたまゝ、手なる帽子を下にも置かず。

句作は無頓着に、仰向けに湯をがぶりぐりと飲む。

「御遠慮なさらなければ可うございますのに、」

まづ聲が聞えて勝手から静かに出て、句作の背後へ立つたのは髪結である、突かけ穿の後齒の下駄は水口の土間で脱いで來た。

「お新さん、彼處に立つて在らつしやつたよ。」

お新は何方ともつかず唯、

「濟みませんね、」と小聲なり。

句作はぬいと立つたが、廣くはない六疊敷の片隅に居る男に擦合ふばかりにして、又元の玄關に歸つて机の前に圖抜けた大きな足を廣げて胡坐を掻いた。

「さあ、何うぞ、こんな處でございますから、お氣味が悪うございせうが、まあ、これをお敷きなすつて、」と座蒲團を二ツ左右へひらりと捌く。

「おかみさん何うぞもう、」と膝を支いてお新は風采さへ物越まで尋常に片づける。

「さあ、お召ものが汚れますから。」

「否、」といつたが、其の座蒲團に坐つた、男は膝の下へ兩手をさげて、

「お邪魔をいたします。」と極つた挨拶、優しく頭を下げる。

「おや、勿體ないあなた、」と驚いたやうに謂ひながら、引返して向うへ立つ。

お新は人知れず男の顔をぬすみ見て目でものを謂はせたのである。要するに髪結如きに其の頭を下させた之も誰ゆゑといふ仕打。

男は黙つて摺つた手巾を別の手に持替へる。

此の間に、お光は長火鉢の火を煙草盆に活けて灰をくるくると火箸で廻して、團扇を二本、兩手に兩方を持つて再びそれへ。

「もし、お使いなさいまし。」

これも又男の前と氣を着けて、故とお新に綺麗言葉、裏梅を紫と浅葱とで描いた方を一本お新に差向け、

「お暑うございませうこと、もう晩方でございませうのに、些とも風がございませぬね。」

と話は女にして男を煽ぐ、自分が持ったは繪團扇で、此奴を横煽ぎに些と大手にこなす。

「一雨かゝりますと可いんですが、」とお新もうしろの方から見ないやうにしてそつと男を煽いで遣る。

この深切な風の中に彼方此方、彼方此方、件の手巾の頻に動くのが眞白なので涼しさう。

玄關の暑さは又格別である。旬作は飯を食つたり、湯を呑んだり、だくくくと沸く額の汗を握拳で横に撫でた。此の間纏に敷居一個、柱ありて、隔をなすのみ、障子なく襖もあらず。

四

「まあお緩りなさいまし、こんなですが、蚊は其割に居ないんでございませうよ、ねえ川邊さん。」

唐突に聲を懸けられたので、旬作は何事とも辨へず、

「はあ、」

「眞個に蚊にや樂ですなえ。」

「はあ、居ますですな。」と調子はづれ。餘り膠のないことを謂はれたので、此方の三人申合せたやうに齊しく玄關の方を見向いた。

髪結は苦笑ひ、

「お前さん無性で蚊帳を釣らない癖に、ねえお新さん、いくら居ないたつて夜中には出ようぢやありませんか。そして暑いぢやあ身體へ霧を吹いて寝るんですもの、蚊が附着いたら放れっこはありませんやね。」

客を煽ぐ手を忙しくして早口に喋舌りかけたが、不圖心づくつと、お新が何時の間にか團扇の手をかへして、自分の方を煽いで居るので、大業に座を開いて、

「おや、飛んでもない、私といふものも可い氣なもんだ。どれ些と働きませう。」と身を退りさまに又長火鉢の向うへ行つて、茶棚から盆を下すのを、お新は手を留めて見て居たが、

「おかみさん、何うぞ、あの私がありますから、」ふいと男の傍を離れて素通に立つて行つて、簪の耳を押へながら二ツ三ツ囁いたと思ふと、髪結は頷いて笑を含んだ。

「ぢやあなさいまし。私は臺所の用が少し、其に洋燈掃除もあるし、精々働くんですよ。」と命ずるが如くに謂つて、懸棹の襷を取る手も早く腕を潜らして、勝手の方。

お新は後へ入交つて、きらりとするぶりツきの茶入の罐を片膝立てて斜に取る、四邊へ黄昏の色が迫つた。臺所でかたくと柄杓の音。

旬作は次の間へ首を伸して、そつとお新の方を見ると、お新も丁ど其の様子を窺つたので、期せずしてひよつと面を合せた。旬作の頭は叩かれたやうに机の上へ引込んで、渠は頬杖をついて、前なる破障子を見たのである。

お新はいやな顔をしながらおなじく横を向いて、鐵瓶を重いもののやうに取扱つたが、黙つて茶盆を持つて来て、男に並んで、黙つて手をついて、黙つて茶をうつして、黙つて茶臺に乗せてそつと出すのを、男は黙つて手に取つたが、目で玄關の方を知らせて、顔で差圖をみると、お新は頭を掉つた。屹と見て睨むが如く、押しして其の意を得させたので、お新は眉を顰めたが、又一つ茶臺に乗せて男の背後から玄關へ持つて行き、

「いかにです。」と切口上、突込むやうにいはれたから旬作は呼吸を引いて、
「はッ、」

「あなた御勉強でございますね。」

「何なまけて居るですよ。」

「いゝえ、御勉強なすつて在らつしやるよ。晝間そんなになさいましても、晩方からすゞみにお出掛けなすつちやあ御近所の娘を迷はしちやあ不可ません。」

「些とも迷ひませんな。」

「あら、嘘ばツかり。」

「はゝゝゝはゝゝゝ」と唐突にはめをはづした高笑、旬作は天窓をかゝへて、仰向けさまに片隅なる葛籠の上へ寝倒れた。お新は吃驚して興覺顔、呆氣に取られて座に戻ると、別に一個茶碗が臺にのせて据ゑてあつた。

「おや、」と嬉しさう。

男は澄して、

「お前にもやるよ。」

五

「さあ、出かけよう。」と髪結は手拭に包んだ石鹼の箱を持つて、勝手から、戸外に稍遠く簾越に薄暗い彼の長火鉢の向うへ顯れて、

「川邊さん、お前さん湯へ行かないの。」と悟れよがしなことを謂ふ。

句作はむツくと起きて横すわりになつたが、

「今日は留めぢや。」

「何故さ。」

「直ぐ汗になるから詰らん。」

「何も然うしみつたれることはありませんやね。一寸異な驕りツといふのがあるんだから。」

「ふむ。」

「おかみさんが鰻をおこりますとさ。」お新も浮かすやうに追出をかける。句作は克明に考へて、

「いや鰻は腹に持つて可かんですよ。」

「ぢやあ軍鶏、ね、軍鶏にしませう。」

「然うか、」と引張つて生ぬるい返事をする。

「然うかツて奴があるものかね。」

「軍鶏なら、うむ、軍鶏なら何ぢやが、僕は未だ腹がくちいでなあ。」

「ぜいたくなことをおいひでないよ。」

「だつて時刻が早いや。」

「だから一風呂浴びてさ、薩張して、濡手拭を提げて、お前さんと吉野屋の葎簀戸の入つた二階で對向にならうといふ粹な年増が居るんだあね。」

「然うか。」

「然うかは困つたね、さあお出掛けなさいよ。」

「だが、何も一所に出んでも可いでないか。」

「だからお前さんは其處からおいでなさい、私や勝手口から、可いかい、兩花道の出とやつつけよう。」

「然うか。」

「一寸串戯ぢやあない、然うかは弱りましたね。よう、川邊さん、其れから中仕切をトン／＼、番臺で顔を見合せて、兩方の戸をがったり、淺くとも清き流の杜若とか何とかいふので出てさ、吉野屋で櫻色になつて、あとで寄席へ行きませう。」

「寄席も詰らんなあ。」

「あなた、そんなおつき合の悪いことをいふもんぢやありませんよ。」とお新は遺瀨がない。

「ぢやあまあ先へ行くさ、僕は最う些と經つてから。」

「そんなに長湯ぢやアありません。」

「然うぢやあないか、まあゆつくりで可からう。」といひながら、次の間の男女をぬすみ目でじろり、じろり。

「否さ、じれつたいねえ。」と髪結も餘のことに口をつぐむ。

「お新、私はもう歸らう。」と男は屹となつて居住居を直した。

「まあ、」と顔を見た目がうるんで、お新は怨めしげに、

「罪になりますよ。」とそつといつて、詮方なさうに笑顔を造る。

「さあ、川邊さん。」

髪結も堪りかねたか、ぐつと甲高になつて、

「粹事の眞似をするんだといふのに、分らない人だねえ！」

「あ、あ、それぢやあ出ようかな、何だか氣が重いで。」

「あなた家にばツかり在らつしやると蟲がつかますよ。」とお新は口惜しさうにいふ。

「何、適宜に運動をしとるですよ。」

渠は葛籠の蓋を開けて、疊んだめりやすの襦袢を引出し、古足袋と汚い靴下とを五ツ六ツ居まはりへ引き散かして。

「はてな、靴にしようかな。」と獨言をいふ、區役所の旦那澄したもの也矣。

六

扱て手織木綿堅縞の單衣、前申上げためりやすの襦袢、唐縮緬大幅の帯を胸高にぐる／＼と巻いて、手拭を疊んで懐中に入れて、茶色の靴下を穿いた、之にて身支度調ひますれば、太夫川邊句作さつさと出掛けるかと思ふと、否、なか／＼然うでない。

取散した古足袋靴下の類を一々丁寧にまた納めて、引抱へるやうにして、葛籠の蓋、舊あつた場所を一寸も違へず、置直して押着けて、素直に姿勢を正して立つと、衣紋を直し袖口を引張つて、最う出るかと思へば又帯を解いて引張つて皺をのした。

お新は泣出しさうになつて獨りで焦れ込んだが、身悶をする男の膝なる手巾をいきなり引たくる。片端を放さず、向うへ引く、此方で引く、二三度引張り合ふ内、他愛もなく莞爾してお新は其の手巾の上に袖を冠せた。

句作儀は漸々帯を締め直し、紙にくるんだ折釘へかけてある古い山高帽を取つてソツと指のさきで頂邊を弾いて頭に戴き、赤新聞に包んだ靴を出してふツ／＼と吹いて、揃へて、ぼかんと土間へ置くと自分は框に腰をかけた、これから靴を穿くのである。

お新の勇みやう一方ならず、

「お出かけですか、」と衝と立つて、後手に、(占めた)と我知らず男の背を叩いて、玄關に出て旬作の背後に立つた。

「何をしてるのさ。」

路地から高聲で格子戸をのぞいたのは、一足さきへ勝手から出て待つて居たお光である。餘り待遠さに引返して来たが、旬作が此の装に一驚を吃して、

「へッえ、靴を穿いて来るの、お前さん湯へ行くのに。」

「しかし湯から直ぐに軍鶏屋へ行くんぢやあないのか。」とけろりとして説破一番。

お光はなるほどといふ思入れで、

「それから寄席へ参りますかね。ぢやあ直ぐいらつしやいよ、さきへ行きますから、早くね。」と念を入れる。

「たんと待たしておやんなさいまし、おかみさんは床急ぎだよ。」とお新は捨世辭をいつた。

「似てさ、姉さんに。」

「おや、」

「御機嫌よう。」と謂ひすててお光は最う大丈夫と見て取つたので、手拭包を手に据ゑて、少しく身を反らした、お轉變な後齒の下駄、からくと溝板を渡つて行く。

此時いまだ、靴の其の片足をだに穿ち果さず、旬作は丁寧に一ツ一ツ編上の紐をかつて居た。「大層面倒なんでございますこと。」

「はあ、無茶にやると此の紐がよれるですな。」

聞くと齊しくお新は活潑に土間へ下りて、いきなり旬作のつまさきへ屈んで、帯の引ずるのも構はず、一寸棲さきを膝ではさみ、

「お手傳ひ申しませうね。」と右の靴につかまつて、互ひ違ひに、手早く紐を組み上げる、両手の指はちらりと白く、恰も卯の花の溢るゝ風情。

「これは、」といつたが旬作は動きも得せず、帽を脱いで、今一方を穿ち果て、あいたので両手で据ゑて眞四角に控へて居る。

「さ、あなた。」

「やあ、失敬でありました。」

「お楽しみ。」と威勢よく門口を出かゝる旬作の背を一ツくらはしたたが、何の所爲かこれは自分にも分らなかつた。路地を突當つて後姿が見えなくなるまで、お新は格子から横顔を出して覗いて居た。

「何だらうまあ、お光さんも氣が利かないぢやあないかね、親類か不知、大抵分つた人の癖に今

目あたりは何處かへ逐出して置けば可いのに、飛んだも、んぢいぢやあないか。」

「一寸さしがあるよ。」と不意に聲をかけたのは男である。

「氣樂だねえ、」とうつちやるやうにいつたが、急に慌しく、

「お忘れもの！」

「可かつた、」といふは句作の聲、小戻して突立つたのが、路地の中ほどでぐるりと向交つて行く。あはれ此人後に女一人殺したさうな。

長屋刃傷

後から聞くと、種々複雑な事がある。盛夏三伏、暑さも今を頂上といふ午後一時半、奥でうとうとして居ると、何か同一番地の長屋内で、物騒しい音がする、と思つた。

一寸々々と、けたましく兄妹が呼ぶから、飛起きて表の三疊の窓から見ると、筋向ひの植木屋で、二三人取組み合つて居る、中に肴屋の女房といふのが押殺されたやうな疲れた聲で、大變だよ。

大變だよ。

大變ですなえ、と慌て切つて却つて落着いたやうに應ずるのは、砲兵工廠の職工の家の留守居の年増で。それに一人の色の蒼褪めた少い男の、この暑いのに襦袢を着て久留米の紺緋の古びて黄んだのを片膚脱になつて、小刀を閃めかして居る奴の胸倉を取つて戸へ壓へ着ける。肴屋のは背後から腰を抱いて揉んでるので、自分が覗いたトタンに三人入亂れてどた／＼と後へ雪崩れたと思ふと、斬つた！といふ聲。腰へ掴つたのが尻居に倒れた。同時に開放した自分の家の縁側へ、庭からむつくりと飛上つたのは、裸體の婆さんで、吃驚して振向く時、跣足で六疊の室を衝々と驅けて来て、自分達が立つた表の室の襖へびつたり、丁ど佛壇がある處へ、灸の痕だらけの干

からびた背を見せて附着いて、助けて下さいまし、助けて下さいまし。婆さんお前は？と、屹と聲を懸ける、暫時お秘しなすつて、と目も据らずきよろ／＼して震へて居た。

謂ふまでもない。對手は之と見て取つたが、此處ぢや不可い、と言つて、がた／＼腰に應のない、難物の手を取つて、引張つて勝手へ入つた。……處は閉切つてある、明窓も引かないで、北向、隠れるには暗くて可からう、と押入れると、又きよろ／＼向した。

何と思つたか、土間へ下りて、口を開けた炭俵の陰へ入つて、塵取に湯具を敷いて畏つて自分を拜んだ。其ま、舊の處へ引返すと、何時の間にか早や四五人、小兒交りに窓の前へ集つて、がやがや騒々しい。

何うした、といつて聞いた、格子戸にもべつたり、乾いて日の光りが射返すやうな眩い地の上也朱の滴つた痕があつたが、取押人が怪我をしたのではない。肴屋のも職工のも無事なので、小刀を振つた男が、自ら其の手の指を過失したが、發奮んで血の色を見ると眞蒼になり、流れるやうな指の血を塗りつけた、格子戸のは其である。

それから兇行者は、向うの角の駄菓子屋の裏口から、九尺二間を横切つて店を跨いで、大塚の通へ抜けたが、突切る時足許の六疊に寝かしてあつた、其の駄菓子屋の小兒の浴衣で、又指の血を拭つたさうな。其なり、覺えて居る、と一纏めに九軒の長屋の屋根を睨めつけて、よろけなが

ら、巢鴨の方へ見えなくなつたとのことである。

などと口々に言ひ罵る處へ、彼の婆さんの悴の嫁で、二十二三な美しいのが髪を散し衣紋を亂し、落こちるやうな、左孕だから喘ぎ、血色もまだ顔へ返らず、灰のやうに變りながら、絞りの浴衣を小脇に抱へて、一群の前へ來た。背後からついて來るのは、南京邸の共同妾、晩方から枕を入れた風呂敷包を片手にちよこ、褌取りの、しやならで路地を驅けて出て、先方では一晚押入の中で寢て、明方に戻る、と井戸端で取沙汰する長屋隨一の美人のお袋、後家で四十餘りのでつぷりと肥つたの。唧楊枝で毎朝井戸端で顔を洗ふと、やがて朝飯を食べて、其手で、長煙管と地切の一寸蒼臭い荒刻の煙草の箱とを持つて、片手を懐にしたま、軒別に油を賣つて歩行くのが、鐵漿をつけた四角な口を歪めながら、まあ、危ない、すんでの事でね、この嫁が殺られる處さ。いえ、お婆さんを突殺さうとするものだから、夢中になつて留めたは可いが、たゞの身體ぢやありますまい。

身重な處へ、顛倒したもんだ、何うして、いきなり仰向けに倒れた上へお前様、野郎め、ひいつてえ聲だから、命がけで私が驅着けた時は、小刀の尖が(手眞似で見せて)これんばかり、どうやら斯うやら、引外して戸外へ突出したのさ。え、お婆さんかい、お婆さんは、と自分が立つてるのを見て、會釋して、此方のお臺所……ぢや然うおしな、と極りの惡るさうに俯向いて居

る身持の嫁を顧みつつ、兎も角も遁すが可いやね、さあ、と押すが如くにして、連れて勝手口へ行つた。

少時ごとくして居たが、やがて彼の婆は、嫁が持つて行つた、其の絞の浴衣を着て早急の場合、穿物は忘れたと見える。内の上草履を穿いて、井戸に近い處から、こつそりと顯れると、まあお婆さんくと、窓の前に居た連中、どつと其へ集り真中に婆を取巻いて、ぞろぞろと路地を出たが、一同木戸口に立つて巢鴨の方を見遣る中から、婆は、身を挺いて衝と通へ出ると、矢の如く、傳通院の方へ走るのが見えた。

扱て、お喧しうござりましたと、例の肥つたお袋は、後刻出直して庭口から這入つて來て、何ね、彼の婆さんと來た日にや、顔色でも知れませう、一條繩でいくのぢやあございませんや。お長屋に居ります植木屋さんの妹で、彼の婆さんの娘にね、旅で藝者を稼がしてありましたとさ。植木屋さんは彼の通おとなしうございますけれども、妹の方が婆さんに肖てした、か者で、彼の男の家藏を嘗めたんですと。女房持で兒もあるんですつて、其で食ふや食はずになつて女房にまで棄てられた頃を、ちやんと見切つて其ツ切、藝者殿姿を隠したんですとね。お袋とはぐるだらう、怨も何にも言はないから、居所を教へてくれ、死ぬ前に唯だ一目逢ひたいからつて、昨夜から來て動かないで居りましたつけ。婆さんはふてくしくしらを切つて居たんですが、壁一重で

ございますから、私どもへは能く聞えます。思詰めて居るらしい、いまに騒ぎが始まるだらうと、
やきもき思つてたら案の定、いゝえ暗い處があるですから、交番へは届けられないのでございま
すよ。あいよ、いま行くよ、と小兒が呼ぶのに返事をしながら、件の長煙管で持參の煙草を悠々
と吹かした。

三枚續

表紙の畫の撫子に取添へたる清書草紙、未だ
手習兒の作なりとて拙きをすて給はず此ぬ
しとある處に、御名を記させたまへところ。

明治三十五年寅正月

鏡花

一

續枚三

「何うも相済みません、昨日もおいで下さいましたさうで毎度恐入ります。」
と慇懃にいひながら、ばりかんを持つて椅子なる客の後へ廻つたのは、日本橋人形町通の、
茂つた葉柳の下に、おかめ煎餅と見事な看板を出した小さな角店を曲つて、突當の煉瓦の私立學
校と背合せになつて居る紋床の親方、名を紋三郎といつて大の怠惰者、若い女房があり、嬰兒も
出來たし、母親もあるのに、東西南北、其の日其の日、風の吹く方にぶら／＼と遊びに出て、思
ひ出すまでは家に歸らず、大切な客を斷るのに母親は愚痴に成り、女房は泣聲になる始末。
又かい、と苦笑をして、客の方が却つて氣の毒になる位、別段腹も立てなければ愛想も盡かさ
ず、唯前町の呉服屋の若旦那が、婚禮といふので、いでや豫ての男振、玉も洗つてます／＼麗か
に、雫の垂る處で一番綿帽子と向合はうといふ註文で、三日前からの申込を心得て置きながら、
其の間際に人の悪い紋床、畜生め、か何かで新道へ引外したために、たうとう髭だらけで杯をし
たとあつて、戀の敵のやうに今も憤つて居る其ばかり。町内の若い者、頭分、藝妓家待合、料理

屋の亭主連、伊勢屋の隠居が法然頭に至るまで、此床の持分となると傍へは行かない。目下文明の世の中にも、特に其の姿見に於て、其の香水に於て、椅子に於て、ばりかんに於て、最も文明の代表者たる床屋の中に、此の床ツ附ばかりは其の汚さといつたらないから、振の客は一人も入らぬのであるが、昨日は一日仕事をしたから、御覽なさい此の界限に一寸氣の利いた野郎達は残らず綺麗になりましたぜ、お庇様を持ちまして、女の子は撫切だと、呵々と笑ふ大氣焰。

尤も小僧の時から庄司が店で叩込んで、腕は利く、手は早し、其で仕事は丁寧なり、殊に剃刀は稀代の名人、撫でるやうにそつと當つて然も布を裂くやうな刃鳴がする、と譽め稱へて、いづれも紋床々と我儘を承知で最良にする親方、渾名を稻荷といふが、之は化かすといふ意味ではない、油揚にも關係しない、藝妓が拜むといふでもないが、つい近所の明治座最寄に、同一名の紋三郎といふお稻荷様があるからである。

「お前何處かで又酒かい。」と客は笑ひながら、

「珍しくは無いが能く怠惰けるなあ。」

「何、今度ばかりや仲間の寄でさ、少々其の苦情事なんでして、」

「喧嘩か。」

「否、組合の外に新床が出来たんで、何うの彼うのつて、何でも可いぢやあがせんか、お客様

は御勝手な處へ入らつしやるんだ。一軒殖えりや其奴が食つて行くだけ、皆が一杯づゝお飯の食分が減るやうに周章てやあがつて、時々なんです、いさくさは絶えやせん。」

「それぢやあ口でも利かされたのかね。」

「ならば大名の方なんでさ。」

「其に何も二日かゝることはないぢやないか。」

「すつかり御存じだ。」と莞爾する。

「だつておい四度素歸をしたぜ、串戯ぢやあない。ほんたうに中洲からお運び遊ばすんぢやあ、

間に橋一個、お大抵ではございませんですよ。」

「おや、母親がいつた通り。」

「貴客、全く然う申すんでございますよ。」と長火鉢の端が見えて、母親の聲がする。

二

「はゝゝはゝ、旨くやりましたね、(ほんたうに中洲からお運び遊ばすんぢやあ間に橋一個、お大抵ではございませんですよ)ツさ、え、旦那、先刻親方が歸りました時に内のお婆さんが其通りいひました。ねえ、親方、何うですお婆さん、寸分違はねえ、同一こツたい、此奴あ面白えや。」と少し

かすれた聲、顔をしかめながら嬉しさに笑つたのは、愛吉といつて、頬に角のある、鼻の隆い、目の鋭い、眉の迫つた、額の狭い、色の浅黒い、宛然悪黨の面だけれども、口許ばかりは其の仇氣なさ、乳首を含ましたら今でもすやくと寐さうに見えて、之がために不思議に愛々しい、年の頃二十三四の小造で瘡ぎすなのが、中形の浴衣の汗になつた、垢染みた、左の腕あたりに大きな焼穴のあるのを一枚引掛けて、三尺の帯を尻下りに結び、前のめりの下駄の、板のやうになつたのに拇指で蝮を拵へたが、三下といふ風なり。實は渡り者の下職人、左の手を懐に、右を頤にあてて傾きながら、ばりかんを使ふ紋床の手を其の鋭い眼で睨むやうにして見て居るのであつた。客は向うへ足を伸して、

「然うだらう、人情は誰も同一だから言ふことも違はないんだよ。」

「ぢやあ何だ、内の母親も矢張同一やうなことを言つてませう、ふん、と頤を支へたまゝ、頷くが如くに言つて笑を洩らす。

紋床は顔を斜に、ばりかんに頬をつけて、一寸撓めて、

「馬鹿をいひねえ、お前と同一にされて耐るもんか、人情は異らないでも遣り方が違つてらあな、おい、恠う見えても母親にや未だ米の値を知らせねえんだが、何うだ。」

「あれ、あんなことをいふよ、喃お榎」と母親は傍なる女房に言葉を渡したらしい。

「ほゝ、ほゝ」と、氣の無ささうに若い女が笑つた、と思ふと嬰兒がおぎやあと泣く。

紋床はばりかんの齒を透して、フツと吹き、

「おつと先づ黙つてあとを聞くことさ。然様米の値は知らせねえが、其かはり、高で言譯をさせますか。」

「違えねえね。」

「黙れ！手前が何だ、まあお聞きなさいまし、先生。」

客は此の近邊の場所には餘り似合はぬ學生風、何でも中洲に住んでるとより外悉しくは知らないが、久しい間の花主で紋床は唯背後の私立學校で一科目預つて居る人物と心得て、先生、先生と謂ふが、然にあらず、府下銀座通なる某新聞の記者で、遠山金之助といふのである。

「何うでございます、此の私に意見をしてくれろつて、涙を流して頼みましたぜ、此の愛的の母親が、凡そ江戸市中廣しといへども、私が口から小可愧くもなく意見が出来ようといふなあ、其の役介者ばかりでさ、昔だと賭場の上へ裸でひっくり返らうといふ奴なんで、

「何を、詰らねえ、」

「否、賭博は遣りません、賭博は感心に遣りませんが、其も何幾千かありや屹度はじめるんです。其に女にかゝらずね、尤もまあ、かゝり合をつけようたつて、先様が取合はねえんですから其の

方も心配はありませんが、飲むんです。此年紀で何と三升酒を被りませぬ、可恐しい。さうしちやあ管を巻いて往來でひっくり返りませぬ、病だね。愛、手前その病氣だけは治さないと不可えせと、私あこれでも偶にやあ親身になつていふんです、すると何と、殺されても恨まないから五合買つとくんない、と恚うでせう、言種が癩に障るぢやありませんか。」

三

愛吉は何にもいはず、腕を拱いて目を外して、苦言一針することに、内々恐縮の頸を窘める。紋床は構はず棚下、

「活きるか死ぬかといふ之が情婦だつたつて、其ぢや愛想を盡しませう、おまけに此が行く先は、何處だつて目上の親方ばかりでさ、大概神妙にして居たつて、得て難癖が附かうてえ處で其の身持ちやあ、三日と置く氣遣はありやしません。尤も三日なんて置かうものなら、はじめの日は朝寝をして、次の夜は内をあけて、三晩目には持遁をしようといふもんだ。」

「ま、か」といつて客の金之助は仰向けに目を瞑る。

愛は小指のさきで耳朶を一寸搔いて、

「酷いなあ、親方。」

「まあ然ういつた形よ、人情は同一だから、」

「何が人情、」

「然うぢやないか、だつてお前眞似をするにも好いことはしたがらねえだらう、此間もね、先生、お聞きなさいまし。然ういふ風だから山手も下町も、千住の床屋でまで追出されやあがつて、王子へ行きますとね、一體さきく渡がついてるだけに此方人等の稼業はつきあひが難かしうがす、其だのにしばらく仕事をさして貰はうといふ其の初対面の許で、宿の中ほどの硝子戸をあけると、突然、私あ忙しい身體でござえて……と恚うさ。」

何うです言種は、前かど博徒の人殺兇状持の挨拶といふもんです。其でなくつてさい此の風體なんですもの、懐手でぬツと入りや、眞晝中でもねえ先生、氣の弱い田舎なんざ、一人勝手から抜出して總鎮守の角の交番へ届けに行かうといふんでせう。

此頃は閑だからと、早速がりを食つて奴さん行處なし、飲んだ揚句なり、其晩はたうとうお宮の縁の下に寝ましたツさ。此眞似も又宜しく無えてね。

仕方が無えんで舞戻つて例の如く親方濟みませぬ、が呆れたもんです。而して私が忙しい體でござえて、と恚ういふ鹽梅に遣ツつけました。目を圓くして驚きやあがつて、可笑うがしたぜ、飛んだ面白えやと、其を嬉しがつて居やあがる、始末におへねえぢやアありませんか。其が又似

合ふんです、一寸こんな風」と紋床も好事也、ばりかんを持つたまゝで仕事の最中。

「成程」といつて金之助も故とらしく振返つた。

愛は極悪げに、

「親方澤山だ、何も身振までするこたアありません。」と愛くるしい件の口許で、べそを掻くやうな(へ)の字形。

「私にや素直だから可愛いんですがね。何うだ、何うだ、改つて言はれちやあ餘り見ツとも好いこつちやあるめえ、些と氣をつけるが可いぜ、え、愛的。」

「可いやさ、罷違へばといふ覺があるから世の中を何とも思はんだらう、中々可い腕があるんだつていふぢやあないか。片腕ツていふ處だが、紋床の役介者は親方の兩腕だ、身に染みて遣りや餘所行の天窓を頼まれるツて言つて居たものがあるよ、何うだい。」

「へ、……何ういたして、何うなると思ふ極が悪い」と面を背けて、たじくになつた罪の無さ。

「此處等で發起をするこつた、又三晩ばかりあけたといふぢやあないか。あのこゝな」といふのが些と假聲に成りかけたので、此の場合吃驚し、紋床は聲を呑んでくすりと笑ふ。

「ですがね親方、今度ばかりや」と愛吉は屹と眞面目。

四

「何うした。」

「え、何ね、少し面白くねえ、馬鹿に癪なことがあつて、腹が立つて、私あ腹が立つてならねえんで」と愛はいふ内にも其の迫つた眉を動かすのであつた。

紋床は、屢々あつて、珍しからぬ、愛吉が怒る様子に馴れて、いふことを何とも思はず、

「妙だな、お前また腹が立つて爲様がないから、そこで身體を寝かして居たらう。」

「親方、茶かさずにさ、全くだね、私あ何だ、演劇です敵ツてもものは丁度こんなものだらうと思ひますぜ、ほんたうに親の敵。」

「可い氣なことを言つてらあ、お前母親は死んでやしねえぢやないか、父爺の敵なら中氣だらう、それとも母親なら、愛的、お前が其の當の敵だい。」

「何だつてね。」

「苦勞をさせるからよ。」

「氣が早いや親方、誰も權太左衛門に母親が斬られたとは言やしません、私あ親の敵と思ふ位、小癪に障る奴が出来たツていふんです。」

「はてな。」

「其でね、出来るものならふん捕へて畜生撲殺して遣らうと思つて、慥う胸ツくそが悪くツて、じつとして居られねえんで、眞個でさ、ふら／＼して歩いたんで。」

「待ちねえ、おい、お前感心だな、は、あ解つたい、然うするとお前は大望のある身體だ、其の敵討をしようといふ。」

「然うですよ。」と眞顔でいつた。

「然うですよもねえもんだ、何だな、其がために浮身を糞し、茶屋場の由良さんといった形で酔潰れて他愛々々よ。月が出て時鳥が啼くのを機掛に、蒲鉾小屋を刎上げて、其の浴衣で出ようと

いふもんだな、は、は、は。」

「ようがすよ、もう澤山だ、何もそんなに改つて今日といふ今日、脂を取んなさることあねえ、食潰しの極道にやあ生れついて来たんだもの、天道様だつて數の知れねえ人形を拵へるんだ、削屑も出まさあね、と正直なだけに怒りッぽい、これでも未だ若いんだから、愛吉は拗ね氣味で横を向く。

「ほい、氣に障つたら堪忍しねえ、言つたつて治らねえ位のこたあ知つてるんだい、言葉の機よ、己だつて未だ人に意見を言ふ親仁形は役不足だ、可いや、喧嘩なら加勢をしよう、對手は何だ。」

「そ、其がね親方、」と忽ち嬉しさうな顔色で、

「些と組合違ひの人間でさ。」

「否。」

「馬士か。」

「詰らねえ。」

「まさか乳母どんぢやあるめえな。」

「親方、眞面目に聞いておくんないといふに。聞くだけで可いんだから、私あ又話すだけでも些少あ胸が透くだらうと思ふんで。へい、此處の處へ込上げて來やあがつて。」と手を懐にしたまま擴げた胸に斜にかゝつてる守の紐の下あたりを、はた／＼と叩いて見せる。

「可しく、私が聞かう、何うしたんだ。」

「先生、聞いておくんないさるかい、難有え、こりや先生だと猶わかりが早い、對手はね、先生なんぞ御存ぢやありませんか、歌の師匠ですよ。」

紋床は口を挟んで、

「あ、中洲の清元の。なるほど此奴あ大望だ、親の敵より大事に違えねえ、しかし飛んだ氣に

なつたぜ、愛、お前ありやあ不可えや、まるで組合が違つてらあ。」

「何がえ、親方。」

「お津賀さんのことだらう。」

「ありや、師匠ぢやありませんか。」

「唄の師匠よ。」

「何を、私なあ味噌一漉てえ奴なんです。」

「味噌一漉？あ、三十一文字か。」

「其の野郎だ。」と、愛吉は胸を張つた。

五

「歌の先生、三十一文字の野郎で、其が敵、へい、」とばかりで紋床も變に思ひ、金之助も其の意を得ない様子である。

愛吉は熱心面に顯れ、

「先生、貴客知つて被在つしやりやしませんか、其の三十一文字の野郎てえのを、」

「何といふね、而して何處の、」

「居る處は根岸なんで、」

「根岸か、」

「へい、根岸の加茂川互つてんです。」

「加茂川互。」と金之助は口の裡で其の名を言つた。

紋床は背後へ廻つて、

「神主様見てえだな。」

金之助は更めて打領き、

「有名な先生だ、歌の、然うく。書も能くお書きになるぜ。」

「知つてますよ、手習師匠兼業の奴なんで、媽々が西洋の音楽とやらを教へて、其の婆が又、小笠原禮法躰方、活花、茶の湯を商ふ、何でもこたゝ、娘子の好きな者を商法にするッていひます。」

「は、あ何でも屋だな、場末の荒物屋にやあ傘まで商つてら、行届いたものだ。虱でも買ひに行つて捻つてやれ、癖にならあ、何うせ碌な者は賣るんぢやあねえ。」と紋床は話が實で、ものになりさうな卵だとして見て取ると、面白しで大に煽る。

金之助は驚いて、

「馬鹿なことを言へ、罰の當つた、根岸の加茂川と來た日にやあ、歌の先生でも皆が御前々々と

言ふ位なもんだ。宴會のあつた時、出て居た藝妓が加茂川さん一寸と言つたら、賣女風情が御前を捉へて加茂川さん、朋友でも呼ぶやうに失禮だ、と言つて、其の儘座敷を構はれた位な勢よ。高位高官の貴夫人令嬢方、解らなけりや、上ツ方の奥様姫様方、大勢お弟子があるツさ、場末の荒物屋と一所にされて耐るもんか、途方もない。」

「何でも、馬車だの腕車だのが門に込合つてゐるツて謂ひますね。」

「然うだらうとも。」

「何だか知らねえが癩に障るツたら無いんです。」

と愛吉は然も口惜しさうである。

「おい、其の方が敵かい。」

「お前又妙な敵を持つたもんだな、金と女なら私だつて殺してえほど怨があらあ、先の中洲の清元の師匠の口だと、私も片棒擔ぐんだが、困つたな歌の先生ぢやあ。お前何うした、狙つたか、」

「二晩ばかりつけました、上野の山ね、鶯谷ね、杖でも持ちやあがつて散歩とでも出掛けて見る、手前活しちやあ歸さねえつもりで、彼處等を張りましたけれど、出ませんや。弱つちまひました、親方の前だけれども。髮結床の下職なんぞするもんぢやアありませんね、せめて字でも讀めりや何とか言つて近づくんですが、一の字は引張つて、十文字は組違へ、打交へは鷹の羽だと、呑込

んで居るんぢやあ爲方ありません、私あもう詰らねえ。」と力なささうに投首をする。

「あ、お互に不便なもんだ。」

「親方本當でございますね、酒の値は上りまさ、食る物は麵麩の附焼、鰻の天窓さ、申戯口でも利かうてえ奴あ子守兒かお三どんだ、愛ぢやんなんてふざけやあがつて、よかゝの飴屋が尻と間違へてやあがる、へ、お忝。」といつて、愛吉はフンと棄鉢の鼻息。

「あいや、敵討のお武家、些とお話が反れましたやうですが、加茂川が何か君に恥辱でも與へたといふのかい。」

「然うです、恥を搔かしやがつたんで、對手は女ですよ。」

「何、女に恥辱を、待て、質の好くない奴だ。」

丁度洗ひませうといふ處、金之助は膝を叩き、四邊を拂つて、ついと立つた。

「や、先生も味方らしい、此奴あ、難有えぞ〜。」

六

戴いたのは新しい夏帽子、着たのは中形の浴衣であるが、屹と改まつた様子で、五ツ紋の黒緞の羽織、白足袋、表打の駒下駄、蝙蝠傘を持ったのが、根岸御院殿寄の唯ある横町に入つて、五

ツ目の冠木門の前に立つた。

「其處です」と、背後から聲を懸けたのは、二度目を配る夕景の牛乳屋の若者で、言ひ棄てると共に一軒置いて隣邸へ入つた。惟ふに此の横町へ曲らうといふ邊で、處を聞いたものらしい。加茂川の邸へはじめての客と見える、件の五ツ紋の青年は、立停つて前後を眊して猶豫つて居たのであるが、今牛乳屋に教へられたので振向いて、

「は」と、頷くと齊しく門を開けて透して見る、と取着が白木の新しい格子戸、引込んで奥深く門から敷石が敷いてある。右は黒板塀で此内に井戸、湯殿などがあらうといふ、左は竹垣で此處から押廻して庭、向うに折曲つて縁側が見えた。

一體何時も此の邸の門前には、馬車か、俥か、當世の玉の輿の着いて居ないことはない。居廻の者は誰謂ふとなく加茂川の横町を、根岸の馬車新道と稱へて、其の狭められるために、豆腐屋油屋など、荷のある輩は通行をしない位であるが、今日は日曜故か、最う晩方である爲か、内も外も人少なげに森として、土塀の屋根、樹の蔭などには、二ツ三ツ蚊の聲が聞えた。

然れば敷石を鳴す穿物に音立てて、五ツ紋の青年はつか／＼と其の格子戸の前。丁度此處へ立つた時分に、今開けた門の、から／＼と鳴る、ばねつきの鈴の音が止んで、恰も可し、玄關へ書生が取次に顯れて、敢てものを言ふまでもない。

黙つて、坐つて、手を支いて、顔を見て、澄して控へる。

青年は格子戸を半ば引いたまゝで、慇懃に小腰を屈め、

「御免下さいまし。」

「はい。」

「え、お友達、御免下さいまし、御當家」と極つて切口上で言出した。調子もをかしく、其の蝙蝠傘を脇挟んだ様子、朝夕立入る在來の男女とは、太く行方を異にする、案ずるに蓋し北海道あたりから先生の名を慕つて來た者だらうと、取次は瞶めたのである。

青年は益々鄭重、

「如何でございませうか、お友達、御當家先生様にお目通が出来ますでございませうか。」

「貴方は何方から、」

「え、手前事は、え、何でございまして、其の彼でございましてよ。」

「はい、」

人の内の取次といふものは、如何なる場合にも眞面目なもの也。

「お友達御免を蒙ります、手前は其の日本橋人形町通り、勝山と申しまして、」

「勝山さん、取次は聞き馴れないといふ顔色。」

「否、手前が其の勝山と申すんぢやあございませんで、」
「は、あ、」

「御當家先生様の、え、お弟子でございまして、其の勝山と申しますお嬢さんから一寸頼まれました、手前使の者でございませ、少々お目に懸りたうございませ、お宅で被在しやいませうか、お友達、お取次を願ひたう存じますんで、へい。」

「先生はお宅ですが、一寸お待ち下さい、」と妙な顔をして取次はくりりと入つた、青年は我を忘れた風でひよいと其の頸を縮めたが、立直つて、えへん内證の咳一咳。

七

「さあ、此方へ、私が加茂川で。はあ、」と仰向いて挨拶をする。之は敢て人を輕蔑するのでもなく、又自ら尊大にするのでもない。加茂川は鬼神の心をも和ぐるといふ歌人であるのみならず、其の氣立が優しく、其の容貌も優しいので、鼻下、頤に髻は貯へて居るが、それさへ人柄に依つて威嚴的に可恐しうはなく、却つて百人一首中なる大宮人の生した其のやうに、見る者をして古代優美の感を起さしむる、但し些と四角な顔で、唇は厚く、鼻は扁い、とばかりでは甚だ野卑に、且つ下俗に聞えるけれども、靜に聞召せ、色が白い。

これで七難を隠すといふのに、嬰兒も懐くべき目附と眉の形の物やかさ。人は皆鴨川(一)に加茂川に造る、君の詞藻は、其の眉宇の間に溢れると謂ふのである。

恠る優美な人物が、客に對するに(はあ)の調子で仰向くとなつては、聊か性格に於て矛盾するやうであるが、之をいふ前に、其の和のある優しい一雙の慈眼を(はあ)と同時に絲のやうに細うして恰も眠るが如くに裝ふことを斷つて置かねばならぬ。

其上に如何なれば然するかの理由を説明したら、益々鴨川の奥床しい用意のほどが知れるであらう。

紋床でも噂があつた、尙此の横町を馬車新道と稱へるのでも解る、弟子の数が極めて多い。殊に華族豪商、いづれも上流の人達で、歌と云へば自然十が九ツまで女流である。

其のみなならず、令夫人が音楽を教へて、後室が茶の湯生花の指南をするのであるから。

若き時は之を戒むる色にありで、師弟の間でも此の道は又格別。花の如く、玉の如き顔に對して、初戀、忍戀、互思戀などといふ、安からぬ席題を課すやうな場合に、どんな手爾遠波の間違が出来ぬとも限らぬ。人木石にあらず己も男だ、と何も下司にタンカを切つたわけではない。歌人が自分で深く慮り、すべて婦人の弟子に對する節は、いつも其の紅、白粉、簪、細い手、雪なす頸、帯、八口を溢れる紅、袴、帶揚の工合などに、うつかりとも目の留まらぬやう、仰向

いて眼を塞ぐのが、因習の久しき、終に性質となつたのである。尤も有数の秀才で、凡そ年紀二十ばかりの時から弟子を取立てた。十年一日の如く、敬すべき尊むべき感謝すべき心懸けであるから、音楽に長けたる鴨川夫人が、嘗て弟子の中の一人であつたことを以て、毫も先生の品行を怪んではならぬ。

世には夫人が、おもて向き結婚してから八月目といふのに、女兒を流産したといつて、云々する者もあるけれども、經典に言はずや、鶴は相見て乃ち孕む、それ歌人は此の濁世に處して、恰も鳶鳥の中に於ける鶴の如きものであるから、結婚の以前、既に疾く兒を宿さぬといふ數はあるまい、従つて八月で流産しないとも限らぬのである。夫人は名を才子といふ、細川氏、父君は以前南方に知事たりしもの、當時然る會社の副頭取を勤めて居らるゝ。此の名望家の令嬢で、此の先生の令閨で、其上音楽の名手と謂へば風采のほども推量られる、次の室の葎戸の彼方に薔薇の薫ほのかにして、時めく氣勢は其であらう。

五ツ紋の青年は、先刻門内から左に見えた、縁側づきの六疊に畏つて、件の葎戸を見返るなどの不作法はせず、恭しく手を支いて、
「はじめましてお目に懸ります。」

「はあ、貴方が其の勝山さんのお使？」と大人は紅革の夏蒲團の上に泰悠におはす。此方は五ツ紋の肩をすぼめるまで謹んで、

「然様でございます、へい。」

「御親類の方ですかね。」

「否、親類と申しますでもございせんが、些と懇意に致しますもので、つい此の坂下まで手前用事で参りましたに就いて、彼家から頼まれて、先生様の御邸へ伺ひますやうに、豫てお世話に相成ります御禮を申し上げますやう、又何卒何分お願い申上げまするやうにと、ことづかりましたんで、へい、めつきりお暑うございますな」といひながら、袂を探ると白地の手拭を取出して額を拭つた。

「はあ、何、其はわざ／＼。」

「實は母親が参ります筈なんでございしますが、一體此の兎角病身な上、貧乏暇なし、手もございません處から、相済みませんが失禮をいたしまして、」といひかけて又額の汗を。見る處人形町居廻りから使に頼まれたといふが堅氣の商人とも見えす、米屋町邊の手代とも見えす、中小僧と

いふ柄にあらす、書生では無論ない。年若には似ない克明な口上振、時々ものいひの澁るといひ、何でも口うつしに口上を習つて路々暗誦でもして来たものらしい。

恚る肌違のものに對しては、鴨川大人口を開いて、敢て上五文字をも吐くに當らず、

「はあ、」とばかりである。

葭戸を下の方から密と開けて、大形の茶碗の底へ、ぼつちり入つた結構らしいのを、壘の上へ迂らすやうにして客の前に推して据ゑた、高島田の面長で色の白い、品の可い、高等な中形の浴衣、帯をお太鼓に結んだ十九ばかりの美人。

五ツ紋の青年は、斜に一寸見たばかりで、はツと言つて頭を下げ、

「恐入ります奥様、え、お控へ下さいまし、手前から申上げます、日本橋區人形町通、」と俯向いたまゝ、手をついて言つた。

茶を持つて出た美人は、敷居の外へ半分ばかり出した膝を揃へて支いたまゝ、呆氣に取られたが、上目づかひで鴨川の面を窺ふと、渠は目を瞑つて俯向きながら、頤髻のむしやとある中へ苦笑を包んで、

「可し、」と頷いて見せたので、葭戸を閉ててすつと消える。

「小間使でありますよ。」と教へたが、耐りかねたか、ふゝと笑つた。青年の茫然拍子抜のした顔

を上げた時、奥の方で女の笑聲。

此方は面を赤うして、手拭を持った手を額にあて、

「之は何うも、手前不束ものでございます、へい、實は奥様にはお目に懸つて能く御禮をと申しつけられましたものでございますから。え、何でございませうか、奥様はお邸で被在しやいませうか。」

「はあ、居りますが。」

「如何でございませう、一寸お目に、」と御身分柄、お家柄、總じては日本の國風を心得ないことを言ふのである。

鴨川は眉を擧めたが、然あらぬ調子で、

「面會日は別にあるです。」

「へい？」

「彼が皆様に別に面會しますのは水曜の午後です。」

「水曜の午後でございませうか。」

鴨川は至極冷淡に、

「はあ、」

五ツ紋の青年は何か仔細ありげに、不心服の色を露はした。

九

「ですが、何も別してお手間は取らせません、一寸如何でございませう。」

「誰にも皆然ういふことになつて居るですから、」

「へい、御尤様ですが、其處ン處を其のお繰合せ下さいまして。」

「断つてお逢ひなさいたい!？」と鴨川大人きつぱりとなる。

五ツ紋は慌てた形で、

「否、断つてと申す譯ではございせん。」

「而して何の用ですな。」と改まつて尋ねられた。

「其勝山から託りましたので、奥様にもお目にかゝつて御挨拶を。」

「はあ、何、其なれば別にお會ひ下さるにも及びませんですよ、私から申聞かせよう。而して遠い處を態々おいで下さるにも及ばんでした、貴方御苦勞でしたな、宜しく何うぞ、些とこれから出懸けんければならんですから。」

歌人の住居も早や黄昏れるので、そろ／＼蚊遣で逐出を懸け給へば、圖々しいやうな、世馴れないやうな、世事に疎いやうな、又馬鹿律義でもあるやうな、腰を据ゑた青年も有繋に其と推した様子で、

「之は何うも飛んだお邪魔をいたしましたでございませう、勝山の彼の娘も不束なものでございませうから、何うぞ又先生様、何分、」と、爰で又びつたりと平蜘蛛。

「はあ、其は宜しい、」と最う片膝を立てさうにする。

青年も座を開いて一寸中腰になつたが、懐に手を入れると、長方形の奉書包、真中へ紅白の水引を懸けてきり、とした貫目のあるのを引出して、掌に据ゑ直し、載せるために差して来たか、今まで風も入れなんだ扇子を抜いて、ばら／＼と開くと、恭しく要を向うさまに疊の上に押出して、

「輕少でございませうが、何うぞお納を。」

唯見ると金子五千疋、明治の相場で拾圓若干を、故と古風に書いてある。

「あゝ、恚ういふことをなすつては可けません、其の爲に、ちやんと月謝をお入れになることにしてあります。」

「然様有仰りましてはお可愧うございませう、誠にお兪末で、何うぞ差置かれまし。」

「然うですか、皆様に最う豫てお断がしてあるんだのに、何か恚ういふ御心配をなさるから困る

よ、あゝ、兎角御婦人方は、と云ひながら、其の細い目で弗と葭戸の内を見着けた。

「お、お才、其處に……お前差支へがなくなれば一寸お逢ひなさい、此方で、と聲を懸ける。

「唯、と案外軽い返事、さや／＼と衣の音がして葭戸越に立姿が近いたが、さらりと開けて、浴

衣がけの涼しい服装、緋の菱田鹿の子の帯揚げをし、夜會結びの毛筋の通つた、色が白い上に雪に

香のする粧をして、艶麗に座に着いたのは、令夫人才子である。

「被入しやい、誰方、と可愛い目で連合の顔を一寸見る、年紀は二十七ださうだが、小造で、其

で緋の菱田鹿の子の帯揚げといふ好であるから、二十そ／＼に見える位、尤も十九の時兒鬻に結

つた媛で、見る者は十四か五とよりは思はなかつた。早朝上野の不忍の池の蓮見に歩行いて、草

の露の最と繁きに片袂を取り上げた白脛を背後から見、既に成女の肉附であるのに一驚を喫し

た書生がある、其の時分から今も相變らず、美しい、若々しい。

不意の見參といひ、特に先刻小間使を見てさへ低頭平身した青年の、何とて本尊に對して恐入

らざるべき。

黙つて額着くと、鴨川大人は御自慢の細君、然もあらむといふ顔色、ぐツと澄して、

「勝山さんの使の方です。」

十

「然う、貴方能く被入しやいましたね、勝山さん、那のお夏さん、お變りはないの、あゝ、つい
此間おいでなすつたのね。」と以ての外御懇のお言葉。

「人形町からでは随分ある。」と鴨川は打領く。

「貴方も那の邊なんですか。」

青年はやつと口が利けた。

「へい、近所でございまして、」

「遠いんですね、腕車でも随分暑かつたでせう、宅に居りましても今日あたりはまた格別なんで

す、といひながら純白な麻を細く襲ねた、浴衣でも上品な襟を抜いて背後を振向き、

「定や、團扇を持つておいで。」

小造な若い令夫人は聲を懸けて向直つたが返事をしなかつたので、

「貴方憚り様ですが呼鈴を、とお睦まじい。

即ち、傍なる一閑張の机、こゝで書見をするとも見えず、帙入の歌の集、時繪の巻頁入、銀の

吸殻落などを並べてある中の呼鈴を丁と強く、あと二ツを軽く、三ツ押すと、チン、リンリンリ

ン——と鳴る、ばたくと急いで来て、

「はい、」といつて顔を出した以前の小間使、先刻意を了したと見えて二本ばかり團扇を其へ差出す折から、縁側に登音して、奥の方から近いたが、廳て此の座敷の前の縁、庭樹を籠めて何となく、隣家のもあるか蚊遣の煙の薄りと夏の夕を染めたる中へ、紗であらう、被布を召した白髪を切下げの姫、見るから氣高い御老體。

其ともつかぬ状で座敷を見入つたが、

「御客様かい、貴方御免なさいよ。」といつて座に着いた。

「灯をね、」と顔をさし寄せて、令夫人は低聲でいふ。

夕暮の徒然、老母も期せずして此處に會したので、敢て音楽に關して弟子に對する他は、面會日が水曜と觸の出た令夫人が、次の室に居合せたり、奥深く世を避けておはす老母が縁側に來合せたりするのが、謝禮金五千疋を持參の者に對する鴨川家の家風ではない。青年は蓋し期せずして拜顔を得たのであつた。

「お初に。何方の、」と之も鴨川を一寸御覽する。

「勝山さんのお使ですつて、」と令夫人、傍から引取つて引合せる。

「お、あの何か江戸ツ子の、いつも前垂掛けでおいでなさる、活潑な、ふアふアふア、」と笑つ

て、鯉が麩を呑んだやうな口附をする。

唯一人でさへ太刀打のむづかしい段達の對手が、爰に鼎と座を組んで、三面六臂となつたので、青年は身の置場に窮した形で、汗を拭き、押拭ひ、

「へい飛んだ御厄介様で、からもうお轉婆でございまして、」

「可いさ。だがの、内などは傍のおつきあひがおつきあひぢやで、其處は又な、御婦人ぢやから直接にいつては赤い顔でもなさると悪いで申さんぢやつたが、前掛は止して袴になさるなどは、先づ第一のお心懸ぢやよ。いや、しかし貴方の前ぢやけれどお夏さんは珍しい御容色よし、ほんのこと内などはおつきあひがおつきあひぢやから、御華族様から大商人方の弟子も澤山見えるけれど、品といひ様子といひ彼のお娘が一番ぢや。能くしたもので、上つ方はまあ少々はおでこでも其處は事が濟みますが、下々の娘が出世をしようといふには、さらりと打明けた處で容色ぢや。面ぢやの、ふアふアふア、お夏さんなどは心懸次第又どんな出世でも出来るのぢや、此方へ出入つてござればおつきあひがおつきあひぢやから、ふアふアふア。」と鯉吞麩の口、燕村が所謂巨口玉を吐く鱸と相似て非なるもの也。

青年は之に答ふる術も知らぬ狀に、唯じろくと後室の顔を瞻つたが、口よりは先づ身を開いて逡巡して、

「え、からもう、」といふばかり、逡巡の上に、尙ほもぢく。

「一體何ぢや、内へござる他の方とは些と氣風が違つて居なさるから、其の邊が何となく御身分のある方とはお交際がなさり悪いのぢや、其も心懸一ツで、の、あ、何うともなります。」と念を入れて喋舌れば顔も動くし、白い切髪も動いたのである。

「然やうでございませうか、へい、」といつて此の泥に酔つたやうな、哀な、腑効ない青年は、又額を拭つた。汗は流るゝばかり、殆ど取亂した形に見えたので、夫人才子は、さすがに笑止とや思しけむ、

「貴方まあお羽織をお脱ぎなさいませよ。」と深切におつしやりながら、團扇使の片手煽に、風を操るが如くそよくと右左。

勿體ない、此の風にさへ腰も据らないほど場打のして居る者の、恚る待遇に會して何と處すべ

き。
青年はそはくしたが、何時の間にか胸紐を外して、其の五ツ紋を背後にはらりと、肩を迂らして脱いだのである。

「ぢやあ御免を被つて遣つけますぜ。」と素頂天にぞんざいな口を切つて、袂の下を潛らすと、脱いだ羽織を前へ廻して、臆面もなく、あなた方の鼎に坐つた真中で、裏返しにしてふわりと擴げた。言語道斷、腕まくりで膝を立て、

「借もんだからね、皺にしちやあ動きが取れませんか、」と、切上つた毗に筋を集めてニヤリと笑つた。

餘りの思懸けなさに、鴨川の一家、座にある三人、呆氣に取られる隙もなく、唯ばかりに目を見合せた。中にも才子は其の衝に當つたから、風が止んだやうにじつとする。

青年は身を斜めに、肩を揺つて才子に突懸け、

「煽ぎねえ、へ、奇代な風だ、心持の可い日和だい。遠慮をすることあねえぜ。恚う聞きねえ、實は其の團扇使を待つてたんだ、様あ見やがれ、」といふと、峻のある目を屹と見据る、今なほ座中に横はつて、墨色も鮮に、五千疋とある奉書包に集めた瞳を、人指指の尖で三方へ突き廻し、

「誰を煽いだつもりだよ、五千疋のお使者が御紋服の旦那だと思ふと、憚んながら違ひます。目先の見えねえ奴等ぢやあねえか、何だと思つてやあがるんだ。手前ことはね、おい、御當所日本橋は人形町通よ、赤煉瓦の學校裏、紋床に役介になつて居る下剱の愛吉てえ、しがねえものよ。串戯ぢやあねえ、紙包の上書ばかり下目遣ひで見ないで、些たあ御人體を見て物を謂ひねえ。」

「これ！」と向直つて膝に手を置いた、後室は育柄、長刀の一手も心得て居るかして氣が強い。

「何を。」

「何ぢやな、汝は一體」と大人は正面に腕を組む。令夫人はものもいはず衝と後向きになり給ふ。後室は聲鋭く、

「無法者め！」

「いよ。お婆々、聞えますく、」

羽織を脱いで本性をあらはした、紋床の愛吉は薄笑をして、

「歌の先生、何うだ歌先、一寸奥さん、は、は、今日ア。」と、けろりと天井を仰いだ、陶然として酔へる顔色、フ、ンといつて中音になり、

「——九は病五七の雨に四ツひでりサ——」

十一

襖も疊も天井も黄昏の色が籠つたのに、座はたゞ白け返つた處へ、一道の火光颯と葭戸を透いて、やがて臺附の洋燈を其へ、小間使の光は、團扇を手にしたま、背向になつて居る才子の傍へ、そつと差置いて退らうとする。

「待ちねえ。」

といふが疾いか、愛吉は手を伸して無手と其の袂を捉へた。

「あれ、」

「遁げるない、何うだ、謂ふことを肯かねえか、應といやあ夫婦になるぜ。」

「御串戯を遊ばしました、と女中は何事も知らないのであるから、つい通りの客とばかり、酒も飲まないのにと、驚いて變に思ふ。」

「何、串戯なものか眞剣だ、すつと寄んねえ、内證話は近い方が可い、と、ぐいと引くと、身體が斜に靡く處を、足を舉げて小間使の膝の上に乗せた、傍若無人の振舞。」

「何をするか、」

「光！」と堪り兼ねて大人と後室、一は無法者を、一は小間使を、殆ど同時に同音に叱咤した。

小間使こそ、膝は犯される、主人には叱られる、ばたくと身を悶え、命の瀬戸際と振放して、

「愛吉は胸を反し、脚を投出したま、哄然として、」

「は、は、おもしろい、汝！嫌はれて何がおもしろい。畜生、と自ら嘲つて、噓を仕損つたやうに眉を擡め、口をゆがめて頬をびつしやり平手でくらはし、」

「様あねえ、こんなお大名の内にも感心に話せさうなのが居ると思つたが矢張りねえ、ぐうたらのおたんちんだ。我が顔つきが氣に喰はねえさうだ、分らねえ阿魔ぢやあねえか。やい」と才子が踵をかさねた腰に近き、其の脚で疊を蹴たが、顔を突出した反身の顔を、鴨川と後室の方へ捻向けて、

「汝等一體節穴を盗んで来て鼻の兩方へ御丁寧に並べてやあがるな。きよろ／＼するな、恠う睨むない、蛙になるぜえ、黙つて目を瞑つて、耳の穴を開けて聞け。私等が畠のよ、勝山さんのお夏さんを何だと思つてるんだ、何と見損ひやあがつたい、いけ巫山戯た眞似をしやあがつて、何だ小股がしまつてりや附合がむづかしい？べらぼうめ、憚んながら大橋から此方の床屋はな、山の手の新店だつても田舎の渡職人と附合はしねえんだ、おともだち、お氣の毒だが附合は此方でお断だ。

其もよ、行儀なら行儀をしつけようてえ眞實からした事なら、何うせお前達はお夏さんにやあお師匠様だ、先生だ、私が紋床の拭掃除をするのと異りはねえ、體操でも何でもすら。然うぢやあねえか、是がな、お前か、婆か、又此の御新造様なら仔細はねえ、よしんば仔細があつた處で泣く子と地頭だ、彼是いつて来る筋ぢやあねえ。へん、何曜日とやらの午後でなくつちやあ面あ出さねえとおつしやる方が、少しばかり實のある紙包が出ると、忽ちおひきつけへ出てござつて、

何うだい、下刺の此の愛的を團扇で煽ぐだらうぢやねえか。第一、婆の空お世辭が氣にくはねえや、何ていふ口つきだ、最う一度あの、ふアふアを遣らねえか。いや、譬へやうのない異變な聲だぜ、其の饒舌る時の齒ぐきの工合な、先生様の嫌な目つきよ、奥方の此の足のうらまでちやんと探鑿が届いて、五千疋で退治に來たんだ、さあ、尋常に覺悟をしやがれ、此奴等！」
愛吉は瘦せたのを高胡坐に組んで開き直る。

十二

「震へるない／＼、何も然う、鮭の天窓を刻むやうにぶり／＼するこたあねえ、なぐり込に來たのなら、襷がけて顛巻よ、剃刀でも用意をして居らあ。生命に別條は無えんだから騒ぐにやあ當らねえ、おう、奥様一寸、おい、先刻のやうにお暑うございますとか何とか謂つて、其の團扇で私をば煽いでくんねえ、煽ぎねえよ、さあ煽げ、煽げ、煽がねえかい。」と、愛吉は目の色の變るまで對手の三人を屹と睨めて、手も足も突張返つた。

「母様」と才子は衝と身を起しざまに、愛吉を除けて起つた。

「貴郎もお立ちなさいまし、狂人ですわ。」と、然も侮り輕んじた如き調子で落しめて言ふのに和して、

「狂人だ。」

「うむ狂人ぢや、巡査に引渡すが可いぢやろ。」

「さあ、引渡せ、然うでなきやあ團扇で煽げ、」と愛吉は仰向けに寝て大の字形、挺でも動きさうな様子はない。謂ふ處に依れば才子に思ふ様煽がせさへすれば、疊に生した根も葉も無く、愛吉は退散しさうに見える。

按ずるに煽ぐといふ字は火偏に扇である、然れば益す奴の燄が盛になつても、消えて鎮まるべき道理はないが、其の恠ることをいひ、然ることを爲すは、深き仔細があつたので。

愛吉は紋床で謂つた、鴨川は其の敵で親の仇とも思ふ怨がある、其は渠が豫て愛顧を蒙る勝山の女お夏といふのに就いたことである。

今より五日ばかりの前、振袖立矢の宇、兒鬚、高島田、夜會結などいふ此家に入りの弟子達とは太く趣の異なつた、銀杏返の飾らないのが、中形の浴衣に縹子の帯、二枚裏の雪駄穿、紫の風呂敷包、清書を入れたのを小さく結んで、之をまくり手にした透通るやうに色の白い二の腕にかけて、其手に日傘をさした下町の女風、服装より容色の目立つのが一人、馬車新道へ入つて来たことがあらう、其がお夏であつた。

お夏は人形町通の裏町から出て、其の日、日本橋で鐵道馬車に乗つて上野で下りたが、山下、

坂本通は人足繁く、日蔭はなし、停車場居廻の車夫の目も煩いので、根岸へ行くのに道を黒門に取つて、公園を横切つた。

あとさき路は歩いたり、中の馬車も人の出入、半月ばかりの早續きで熱けた砂を装つたやうな東京の市街の一面に、一條足跡を印して過つたから、砂は浴びる、埃はかゝる、汗にはなる、分けて足のうらのざら／＼するのが堪難い、生來の潔癖、茂の動く涼しい風にも眉を蹙めて歩を移すと、博物館の此方、時事新報の大看板のある樹立の下に、吹上げの井戸があつて、樋の口から溢れる水が恰も水晶を手繰るやう。

お夏は翳して居た日傘の柄を横に倒して熟と見たが、右手に商品陳列所の外圍が白ずんで、窓の硝子がぼやけて見えるばかりか、蟬の聲さへ地の下に沈んで、人氣はなく、近づいて来る聲もしない。尤も此處に来る道で谷中から朝顔の鉢を配る荷車二三臺に行逢つたばかりであるから、其まゝ日傘を地の上へ投げるやうに置いて、お夏は吻といきをついた。

十四

腕にかけて居た紫の風呂敷包は、輪を外して日傘の上。お夏は袂から手巾を出して、件の水に浸しながら、手を拭ひ、襟を拭ひ、胸を拭ひ、足を冷して埃を洗つて、颯とあとを絞出したが、

懐にせむも袂にせむも、びつしより濡れて居るから、手巾を其のまゝ、日傘の柄に持ち添へて、氣輕に雪踏ちやらしくと、鴨川が根岸の家へ急いだのであつた。

鶯谷を下りて御院殿を傍に見て、彼の横町へ入ると中ほどの鴨川の門の前に、二頭立の馬車が一臺、幅一杯になつて着いて居た。

月に三度或は二度、十四から通うて二十の今まで、所謂玉の輿が此の門に在ることは、敢て珍しくはないのであつたが、愆くまで道を塞いで、縦に横附けになつて居たのは、はじめて。

固より豆腐賣、油屋など、荷のある類は豫め此の一條の横町は使はぬことになつて居るけれども、人一人、別けて肩幅の細りした女、車の齒を抜けても入られさうに見えるけれども、逞しい鼠色の馬の面が、小鼻を動かし、呼吸を吹いて正面に門の處に並んで居るので、お夏は日傘を楯にして彼方此方隙間を差覗くが如くにしたが進みかねた。

(何誰か、一寸、私、用があるんですから。)

聲を懸けると三人が三人、三體の羅漢のやうに、御者臺の上と下に佛頂面を並べたのが、じろりと見て、中にも薄髻のある一體が、

(用があるなら勝手口へ廻れ)とつツけんどんに陀羅尼音でいつたのである。

對手は馬二匹と男が三人、はじめから氣を吞まれてお夏は、

(はい)といつて、小戾をして、黒堀の板戸の角、鴨川勝手口とある處へ引返したが、何となく其の首を垂れた。

然れば誰憚るといふではないが、戸を開けるのも極めて内端ぢやあつたけれども、これが又臺所の板の間に足を踏伸ばし、口を開けて眈を垂れて居た、八ツさがりの飯炊の耳には恐しく響いたので、(騒々しいぢやあないか、誰だよ)と頓興に、驚かされた腹立紛れ。勝手口から入るものには、此位なことをいつて差支へないのであらう。

(お休みの處を、濟みません)と丁寧ていねいに小腰を屈めて挨拶をしたが、うつかり禁句とは心着かなかつた。飯炊は面を膨らして、

(へむ、ちやぶ屋の姉さんぢやあるまいし、夜更にお客は取りませんからね、晝間寝たりなんかしませんよ、はい、憚はば様でございますよ、空いたのは其處に出してあら)といひすてに伸をし、ふてくされてふいと立つた。小間使はともあれ半季がはりの下働きは、上の弟子なる勝山さへを知らずして、其の浴衣、其の帯、其の雪踏、殊に寢惚目なり、おひるに何か取つたらしい、近い邊の鳥屋の女中と間違へたのである。お夏は思はず、芙蓉の顔に紅を灌いだ。

飯炊が居なくなつては袴を穿いた例の書生が取次に出る場所ではない、勝手は分らず、啣へて振りつけられたやうな山出しのむく犬を、又呼び出さうといふ聲は持たず、お夏は人いきれに惱

んだ如くうっかりしてイんだが、我知らずうるんだ目の眦の切れたので左手を見ると、見透さる庭の模様、百合の花にも、松の木の振にも、何となく見覚えがある、確に座敷から眺めの處、師の君は彼處にこそ。

お夏は身を忍ぶが如く思ひなしつつ。

十五

鳳仙花の、草に雑つて二並ばかり紅白の咲きこぼる、土堀際を斜に切つて、小さな築山の裾を繞ると池がある。此の汀を蔽うて棚の上に蔓り重る葡萄の葉蔭に、未だ薄々と開いたまゝ、花壇の鉢に朝顔の淡きが種々。

恰もその大輪を被いだやう、絹の羅に紅の襦袢を透して、濃いお納戸地に銀泥を以て水に撫子を描いた繻珍の帯を、背に高々と、紫菱田鹿の子の帶上を派手に結んだ、高島田で品の可い、縁側を横にして風采四邊を拂ふのが、飛石にかゝると眩くお夏の瞳に映じた。

机を置いて之に對し、浴衣に縮緬の扱帯をめて、肱をつき、仰けざまの目を瞑るが如くなるは、謂ふまでもなく鴨川であつた。

二人の中に、稍座を開いて控へたのは、即ち是れ才子の御方。

お夏は蝶々鬚の頃から來馴れて居るし、殊に爾時三人が座を構へたる一室の如き、何時も入込に教を授かる、居心の知れた座敷ではあつたけれども、不斷とは勝手が違つた庭口から案内なしの推參である上に、門でも裏でも取つてつけない挨拶をされた先刻の今なり、來客の目覺しさ、それにもこれにも、氣臆れがして、思はず花壇の前に立留まると、頸から爪さきまで、木の葉も遮らず赫として日光が射した。

才子は正面に、鴨川は横目に、貴なる令嬢を振返つて、一齊に此方を見向いた時、お夏は會釋も仕後れて、疊んだ手巾を搔撮んで前髪の處に翳したのである。

應とでも言葉がかゝれば、取継る法もあるけれども、對手方は其なり口も利かなかつた咄嗟の間、お夏は船納涼の轉寢にもつひぞ覺えぬ、冷たさを身に感じて、人心地もなく小刻につかくと踵を返した。

鳳仙花の咲いた處でぬつと出て來たのは玄關番、洗晒した筒袖の浴衣に、白地棒縞の袴を穿いた、見知越の書生で、

(やあ、貴女でありますか、勝手に居た女中が女の明巢覗が入つたつていふですからな。は、は、は、何を寝惚けをつて。さあ、お通りなさいまし、馬鹿な)と氣拔けのした様子。

(はい、御門の處に馬車が居て恐うございましたから間違へて此方へ參りました、何うも失禮。)

(いや、飛んだ不都合でありました、ずつとおいでなさい。丁ど御來客で先生は其處のお座敷に在らつしやいます。)と此者だけは調子が可い。

(憚様ですが一寸然うおつしやつて下さいませ、又お客様で御邪魔だと悪うございます。)

(何、山河内様のお姫様で、同じお弟子なんでありませうから構ひませぬ、入らつしやい。)といひ棄てて、此の暑い袴を穿かせるほどな家風、一體婦人を對手の業體、歌所はしつけのいゝもので、ニヤリともせず眞面目くさり、髭のない男の手持なげに、見事な面砲を爪探りながら、勝手の方に引込んで了つた。

お夏は歸るにも歸られず、折角の取次にも向うから遠慮されて、太く便を失つたが、暑さは暑し弱い身の、日向に立つて居られる數ではないから、止むことを得ず、思ひ切つて氣の進まないのを元の處へ引返すと、我にもあらずおづ／＼して、差俯向いて、姫と、師と、其夫人とおはす縁側へ行つて、兩手をついたが、天窓から叱りつけでもされるやうに、お夏は消入る思がした。

十六

お夏はやう／＼座に着いたが、鴨川が澄して見せぬ目よりも、才子がつんとして居る胸よりも、山河内の姫様といふのが、膝に置いた手の寶玉入の指輪よりも、眞先に氣が着いたのは、大

人が机の傍に差置かれたる、水引のかゝつた進物の包であつた。

今こそ人形町の裏通に母親と自分と二人ぐらし、柳屋といふ小さな繪草紙屋をして居るけれども、父が存生の頃は、隅田川を前に控へ、洲崎の海を後に抱き、富士筑波を右左に眺め、池に土堀を繞らして、石垣高く積累ねた、五ツの屋の棟、三ツの藏、いろは四十七の納屋を構へ、番頭小僧、召使、三十有餘人を一家に籠めて、信州、飛驒、越後路、甲州筋、諸國の深山幽谷の鬼を驚かし、魔を却かして、谷川へ伐出す杉檜松柏を八方より積込ませ、漕入れさせ、納屋にも池にも貯ふること亂杭逆茂木を打つたる如く、要害堅固に礎を立てた一城の主人といつても可い、深川木場の材木問屋、勝山重助の一粒種。汗のある手は當てない祕藏で、芽の出づる頃より、ふた葉の頃より、枝を撓めず、振は直さず、我儘をさして甘やかした、千代田の巽に生拔きの氣象もの。

随分派手を盡したのであるから、以前に較べて此の頃の不如意に、仕たくても出来ない師家への義理、紫の風呂敷包の中には、唯清書と詠草の綴ぢたのが入つて居るばかりの仕誼、わけを知つてただけに、ひがみもあれば氣が怯けるのに、目の前に異彩を放つ山河内の姫が馬車に積んで來た一件物、お夏は又一倍肩身が狭くなるのであつた。

然れば氣の挫けた聲も弱く、

(お暑うございますと手をついて挨拶して、ものもいつてくれぬ師匠夫婦が氣色のほどを伺ふと、螢の祟りがあるのでないから、因縁事でもあるまいけれども、才子は爾時も手にして居た深草形の團扇を膝の真中あたりで、じつと凝視めて黙つて居たが、顔を上げると、何と思つたか、半白といふ上目づかひに、お夏の面をじろりと見て、

(あゝ、暑うございますこと、勝山さんあなたお客様を煽いで下さい、私は一寸彼方へ参りますから、)と疊へ團扇を迂らして、お夏の身近う突いて寄越し、(失禮を、)と姫にいつて、其まゝふいと座を立つた。

お夏は聞正すまでもなく、疑ふまでもない、明かに、丁ど自分が居る背後から煽ぎ参らせよ、といはれたのである。

それ、頼まるれば越後から米搗にさへ出て来る位、分けて師の内室が仰せであるのに、お夏の顔の色を變へてためらつた。

(然うだ、勝山さん煽いでお上げ、)とお夏が直に命を奉ぜぬのを、歌詠の大人は寛仁大度、柔かに教へるが如く仰せられる。

其でも黙つて俯向いて居た。

鴨川は又優しい聲して、

(分りませんか、あのね、今才が然ういつたのはね、彼方に用があつて行くから、あなた、其處にあります其の團扇で、お客様を煽いで下さいと言つたんです。)

(はい。)

(分りませんか、あのね、今才が然ういつたのはね、彼方に用があつて行くから、あなた、其處にあります其の團扇で、)

お夏は堪らず團扇を持つて、姫が羅の袂を煽いだのであつた。

十七

「先生、惜いことをしました、同一杯回生劑を頂かして下さるのなら、先方へ参りません前に、慥うやつて、」

と麥酒の硝子杯を一呼吸に引いて、威勢よく卓子の上に置いた、愛吉は汚れた浴衣の腕まくりで、遠山金之助と、廣小路の麥酒ホルの一方を領して居る。

「五六杯引掛けて置きや、半分は酒が手傳つて暴れてくれます、何しろしらふなんで、」といひかけて、迫つた眉根を寄せたのである。

金之助は腰をかけたまゝ、両手で椅子を壓へて卓子に胸を附着けて、

「大向うが喝采でない迄も謹んで演劇をする分にやあ仕損ないが少ないさ、酔つぱらつて出懸けて見なさい、他の酔つぱらひと酔つぱらひが違ふんだよ。愛吉さん、お前が酒と連立つたんぢや、向上から鴨川で對手になつてくれやしない、序幕に出した強談場だし、若干金か此方から持込といふのだから、役不足だつたらう、まあ飲むが可い」と笑つて居る。

「何ういたしましたして相済みません、私あね、先生、書生や車夫なんぞが居るてますから、摺出す位なことはするだらうと思つてね、而したら一番撲倒して置いて、其奴を機に消えようと思つたんだが、まるで足腰が立たねえんです。未だね先生、そりや可うございますが、彼奴等人を狂人にしやあがつてさ、寄付きやしませんでした、男ごかしたの、立ごかしたのは幾らもあるんだけれど、狂人ごかしは私あはじめでなんで、躍るやうな手つきで引上げて参りましたがね、え、お羽織はお返し申します。」

愛吉は胸紐を巻込んで、懐に小さく疊んで持つて来た、來歴のある彼の五ツ紋を取出して、卓子の上なる蘇鐵の鉢物の蔭に載せた、電燈の光は其の葉を透して、涼しげに麥酒の硝子杯に映るのである。

「ですが先生、下司は下司で、此の羽織を着た窮屈さつたらありませんでしたぜ、私あ思ひますが、此の上にも袴でも穿いた日にや、斷つて獄舎の苦みでさ。」

「其でもよくお前ごまかしたな。」

「先方ぢやあ思もつかなくかつたからでせう、彼のお夏さんに、こんな友達があると思つた日にや、狒々に人間の情婦が出来るとあきらめなけりやなりません、へい、希代なもんです。」と又煽る。

「澤山おあがり、何うだね。」

「濟みません、何うも五千疋御散財をかけました上に御羽織を拜借、其上御馳走でございます。眞個に先生は、金主と作者と、衣裳方と、振つけど、御見物とかねて下さるんだ、本雨の立廻りか、せめてのことに疵でもつけるんでなくつちやあ御最良効が無えんですが、山が小せえんだね、愛宕の石段を上るほどもないんですからね。」

「だつて、一寸でも煽がせて來たら可いだらう、仕返しは其だけで十分さ、私も勝山といふ其婦の様子を聞いて嘸ぞ心外だつたらうと思つたから。一體風のよくない御公家でな、しみつたれに取れたがる評判の對手だから、ついお前の話に乗つてお茶番を仕組んで上げたやうなもの、之が道理から言つて見なさい、師匠と親は無理な者と思へど、世間ぢやあいふんだよ。弟子にお客を煽がした位、手近な物を取つてくれも同然さ。癪に障つたの、口惜いのと、怪しからん心得違ひだと、却つてお前さん達の方を言ひ落さなけりやならない譯だよ。」

「へい、大きに然やうでございます。」と愛吉の神妙さ。

「は、は、眞面目になるな、眞面目になるな、ぐツと又一杯景氣をつけて、さあ、此方方樂屋内となつて考へると面白い、馬鹿に氣に入つた、痛快といふことだ。」

金之助は色氣のない噁をし、垢抜けのした目のふちに色を染め、呼吸をフツと向うへ吹いて、両手で額を支へたが、

「可い、可い、あ、溜飲の下る話だ、五千正の顔を見りや、知事公の令嬢で歌所の奥方が、床屋の役介者——まあ然うして置けよ——役介者を煽がうといふ當世に、お世辭をいつて紅白の縮緬でも拜領しようといふ氣はなしに、師匠が華族様を煽がせたといつて、やけに腹を立てた柳屋のも難有い。人事とは思はないで、其を又親の敵ほどに癪に障らしたお前も私あ嬉しい。理窟はなしにとぼけて居て飛んだ可いが、いや、大人氣もなく其の尻馬に乗つて、利のつく金を若干と痛んだ、此の遠山先生も悪くはあるまい、」と金之助は獨りで莞爾々々。

「話せらあ、話せらあ、此奴あ話せらあ。無暗に飲めます。」と愛吉はがぶり／＼、狼と熊とが親類になつたやうな有様で。

「理窟はないとおつしやいますがね、先生、時と場合と代物に因るんですよ。何も口の端を抓ら

れるばかりが口惜いといふんぢやありません、時に因りますとね、蚊が一疋留まつたのが蚊に食はれたより辛うございます。私あね、親孝行な奴が感心だといふんぢやあねえんで、へい、不孝な奴でも豪いといひます。へい、盗人だつて氣に入るのがあるし、施をする奴に撲倒してやりたいのがありますね。不動様は眞眞ですが、念佛は大嫌。水ごりを取つて其が主人のためなんだと聞いたつて、びくともしやあしねえんで、お三どんが鞍を切らしたつて其が不便といふんぢやありません、そんなのははじめツから其氣でつき合つて居るんですからね、甘いことをいふと附上りませ、癖になりますからね、養醉をぶツかけときやあ可いんです、べらぼうめ、へッ、」といつて、顔を擡め、

「無法なことをいふと吃逆を出させるぞ。へッ、不可え、へッ、いや何うしやがつた、へッ、何のこつたい、へッ驚きましたな。先生、其、其ですがお夏さんの團扇ぢやあ恐しく膽が養えました、理窟はねえんです、いえ、理窟がねえんぢやあございませんや、けれども其の理窟は分りません。へッ、おい後生だ、へッ、何のこつた。」

愛吉はぐツたりと首を低れて、ふらりとして居たが、

「お待ち下さい、待つておくんさいまし。え、と、先生、怒うです。何だつて其の、彼の毛唐人奴等、勝山のお嬢さん、今ぢやあ柳屋の姉さんだ、其でも柳橋葎町あたりで、今の田圃の源之

助だの、前の田之助に背て居るのさへ、何の不足があるか、お夏さんが通るのを見ると、大騒動をやりませぬ。柳屋のお夏さんとはいはないで、お夏さんの柳屋、お夏さんの柳屋ツて、花がらたを買ひに来ませ。何だ畜生、上野の下あたりに潜つてやあがつて、歌讀も凄まじい、絲瓜とも思ふんぢやあねえ。茄子を食つてる蟋蟀野郎の癖に、百文なみに扱ひやあがつて、お姫様を煽げ、べらぼうめ。あの、先生、此處なんですがね、理窟は私あ分つてます、お夏さんは、うまれつき團扇ツてものは人を煽ぐものだツてことはかいきし知つちやあ居ないんです。」

「うむ、先づ。」

十九

愛吉は思はず又吃逆をして、

「へッ、いや怨敵退散。眞面目な所へ吃逆は情ない。然うぢやあございませんか、深川の家に住なすつた時なんざ、團扇を持つて、自分を煽いだ事だつて滅多には無かつたでせう。私あ上りまして見ましたがね、お夏さんが行水を使つて、立膝で恚う浴衣の袖で襟を拭いてると、女中がね、背後で團扇車つて奴をくるくるとやつてました、洗髪だし、色は白し、と酔眼を睜つて苦い顔で、

「庭の植木からは雫が溢れます、袂だの、裾だの、其風でそよ／＼して、ぞつとするやうな美しさ、眞個に深川中の涼しいのを一人で引受けて居なさるやうで、見る者も悪汗が引込んだんです。幾ら相場が狂つたつて、日本橋から馬車に乗つて、上野を歩で、道端の井戸で身體を洗つて、蟋蟀の巢へ入つてさ、山出しにけんつくを喰つて、不景氣な。此の温氣に何と、薄いものにして襦袢と合して三枚も襲ねて居る、茹つた阿魔女を煽がせられようとは思いません、私はじめ夢の様でさ、胸氣ぢやアありませんか。」

「可いや、まあそんなに怒るな、傍に居る者が怯氣々々する。」

「御免なさいまし。つい」といつて愛吉は苦笑した。

金之助は稍更り、

「何しろ以前は大した榮耀をしたものらしい。」と自ら語り頷いて且つ愛吉の面を見た。

「ぢやあお前は先からの知己か、紋床に居て近所だから繪草紙屋と懇意になつたといふんぢやあないのかね。」

關係の如何を怪んで其とはなく尋ねたのが、愛吉に直ぐ讀めて、

「をかしうございませう、先生、檜舞臺の立女形と私等見たやうな涼み芝居の三下が知己ツても凄しいんですが、失禮御免で、まあ横すわりにでもなつて、口を利くには仔細がなくツちや

ありませんとも。」

「成程、ありさうな仔細だよ。先飲んで、ふむ。」

「過年、水天宮様の縁日の晩でしたつけ、大通のごつた返す處を些とばかり横町へ遠のいて明治座へ行かうといふ麵麴屋の物置の前に、常店で今でも出て居まさ、盲目の女の三味線を弾くのがあります。投銭にはちやちやらかちやんなんて古風な流行唄をやつてますが、可い聲で、ぞつとするやうな明烏をやりますんでね。私あ例のへ、れけで、素見數の子か何か、鼻唄で、錢のねえふてくされ。おう、勤する身のま、ならぬテツテチン／＼／＼リンリン／＼いつぞや主の居續に寝衣のま、に引寄せて／＼を聞かしねえ、後生だ。恚うお客にすりや御損が行く、情人にして不足のねえからつけつ會我の十郎てえお兄いさんだ、頼むぜ、と取巻いた人立を割つて怒鳴り込んだんでさ。ひよろ／＼しながら先生、といつて、愛吉は椅子に懸りながら身悶をして見せた、金之助はやけに顔を撫でて、

「悪くない、うむ、然うすると、」

「何時も交返すんだから盲目め、聲を知つてまさ、豫てお氣にやあ入らなかつたと見えて、

(あ、弾くがね、お鳥目をおくれ。)

(何を！)

(私の新内はばら錢ぢやあ聞かせないんだよ。)ツて言ひましたぜ、先生、御存ぢぢやありませんか、年増で縁日を稼ぐ癖に、好い女でさ。」

二十

こゝに愛吉が金之助に話したことは、丁ど二年前、一昨年の晩春の事だ。

愛吉は今に到つてもおとなしくない、爾時分もおとなしくなかつたが、恐らく何時までもおとなしくないであらう。

いふが如く、縁日稼の門附も利かない氣で、へ、れけの愛吉が意にさからひ、價を拂はなければ術は見せぬ、お錢がなくなつて居て、其で斷つて凄い處を聞きたいなら、前に立つて提灯は持たずとも、月夜に背後からついて来て、お花主の門でやる處を、こぼれ聞きに聞いたら可いと、愛嬌の無いことを謂つたさうな。

二振の斧と、一挺の剃刀、得物こそ違へ、氣象は同一、黒旋風紋床の愛吉。酒は過して居る、懐にはふてて居る。殊に人立の中のこと、凹まされた面は握拳へ凸になつて顯はれ、支ふる者を三方へ振飛ばして、正面から門附の胸を掴んだ。紋床の若いのが酔つたといへば、交番でも棄てて置くは、店の邪魔はせず、往來には突懸らず、ひよろついた揚句が大道へ筋違に寝て、捨鐘

を打てば起きて行くまで、當障りはないからであつたに、其夜は何と間違つたか、門附の天窓は束髪たばねがみのまゝ、碎けて取れよう、啊呀あはやと傍はたの者。

(あれ！)

(畜生ちくじやうさあ、鳴かねえ驚おどろなら絞殺しめころして附焼つけやきだ。)と愛吉あいきちはちらつく眼まなこ、二三度さんさんど撲りはづして、獨ひとりで踳よろ跟ごげざまに又揮またふり上げた。

握拳にぎりこぶしを確乎しつかり掴つかんで、力任せちからまかに後うしろへ引放ひきはなした者がある。

(顔つらを見ろ、)

(や、)

(蒼あをくなれく、奴やつこ、居酒屋いざみやのしたみを舐なめやあがつて何なんだ其そのの赤あかい顔かほは贅澤ぜいたくだ、我が注連繩しめなはを張はつた町内ちやうない、汝てめえのやうな子こは湧わかない筈はずだ、何處どこの流尻ながしりから紛まぎれ込みやあがつた。)と頭あたまこかし、前後ぜんごに同一おなじやうな、裕三尺あはせさんじや帯おびの若衆わかしゆは大勢おほぜい居たが、大將軍だいしやうぐんのやうな顔色かほつきで叱しかつたのは、鯨なまづの傳六でんろくといつて、ぬらくらの親方おやかた株かぶ、月々つきつきの三十一日さんじゅういちにちには晝間ひるまから寄席よせを仕切しきつて總温習そうじゆんじゆを催もよほす、素人義太夫しらうとぎだいふの切前きりまえを語かたらうといふ漢まことであつた。

過日いつじふ其そのの温習じゆんじゆの時とき、諸事しよじ周旋しゆせん顔かほに傳六でんろく木戸きどへ大胡坐おほあしを搔かき込んで居て、通り懸かつた紋床もんどこを、おう、と呼留よびとめ、つい忙いそしくつて身みが抜ぬけねえ、切前きりまえにやあ高座かうざへ上あるのだから、一寸ちよいと道具たうぐを持つて來きて鬘ひげだけあたつて吳いんなよ、と言種いひぐさが横柄わやうへな上うへ、豫かねて賣うれた構かまの顔色かほしよくを癩しかに障さらして居た、稻荷いなりさんの紋三もんざ、人ひとを馬鹿ばかにすんな、内うちに晝寝ひるねをしてる處ところへ、意休いきうが鬘ひげを持もち込んだつて氣きに向むかなけりやお斷ことわり申まをすんだぜ、憚はなながら此この稻荷いなりはな、寄席よせへ出開帳でかいちやうはしねえんだ、あばよ、一昨日おと、ひ來こい、とフイと通過とほりすしたことがあるから、坊主ぼうずが憎にくけりや袈裟けさまでの筆法ひつぽうで、同一おなじ内の愛吉あいきちにも含ふくんだ意味いみがあるらしかつた。

(放はなせ、やい、愛あいの手て首くびは細ほそいッてよ、女をんなの子こが加減かへんをして握にぎるぜえ、此この鯨なまづめ。)といきなり取とられた手てを振切ふりきつて、愛吉あいきちは下駄げだを脱ぬいで飛と蒐かつた、勢いきほひに恐おそれて傳六でんろくはたじくと退さがつたが、附ついて居た若わかい衆しゆがむらくと押取おつとり包つつんで、胴上どうあげにして放はなり出した。

愛吉あいきちは足あしも立たたず、腰こしも立たたず、のめつて居るのを、いや、踏ふむやら、蹴けるやら。之これを笑わらひすてに尻しりをまくつた鯨なまづの傳六でんろくを眞先まつききに、若者わかものの立去たちさつたあとで、口惜くやしい！とばかりぶるくと顫ふるへて突立つたつたが、愛吉あいきちは血ちだらけになつて居たのである。

二十一

續枚三

築地明石町つぎぢあかしやうに山やまの井光起いみつおきといつて、府下ふか第一流だいいちりうの國手こくしゆがある。年紀としは未だ壯わかいけれども、醫科いこく大學だいがくの業げふを卒すへると、直すぐ一年志願兵いちねんしげんべいに出て軍隊附ぐんたいづきになつた、其そのの經驗けいけんのある上うへに、第二病院だいにびやういんの

外科の醫員で、且つ自宅でも診察に應じて居る。

口寡で、深切で、さらりと物に拘らず、其で柔和で、品が打上り、唯見ると貴公子の風采あり、疾病に心細い患者は其だけでも懐しいのに、謂ふが如き人品。其に信州、能登、越後などから修業に出て来て、訛澤山で、お舌をなどといふ風ではない。光起の亡き父も、義庵と稱して聞えた典薬頭、今も残つて居る門内左手の方の柳の下なる、此邊に珍しい掘井戸の水は自然の神薬、大概の病は之を汲めばと謂ひ傳へて、折々は竹筒、瓶、徳利を持參で集るほどで。

先代の信用に當若先生の評判、午後からは病院に通勤する朝の内だけは、内科と外科と然るべき助手を兩名使つて、猶ほ詰め懸ける患者を引受け切れず、外神田に地を選んで、住所の町名を其のまゝ、明石病院といふのを私立で當時建築中、此處で山の手の病家を喰留めようといふ勢。山の井の家には薬局、受附など眞白な筒袖の上衣を絡つて、肅々と神の使であるが如く立働くのが七人居て、車夫が一人、女中が三人。但しまだ獨身であるから、女は居ても何となく書生が寄合つたといふ遣放しな處があつて、悪く片附かない構の、祕さず明らかさまなのが一際奥床しい。記者遠山金之助は、愛吉から此の山の井の名を聞くと、一層、聞く話に身が入つた、蓋し豫て自分は醫學士と別懇であつた所爲である。

さるほどに愛吉は鯨の傳六一輩に突轉ばされて、身體五六ヶ所に擦疵、打たれ疵など、殊に斬られも破られもしないが、背中中の疼痛が容易でない。

尤も怪我をした當夜は、足を引摺るやうにして密と紋床へ這戻り、お懶惰さんの親方が、内を明けて居ないのを勿怪の幸、お婆さんは就寢となり、姐さんは優しいから、いたはつて呉れた焼酎を塗つて、上口の火鉢の傍へ突臥して寝たが、さあ、難儀。

あくる日歸つて来た紋三郎には口惜くつても喧嘩のことは話されず、固より條理の立つた事ではない、酒の上の悪戯を懲らした方は、男が可いけれども、親方は身内のこと、邪が非でもきかない氣なり、豫て快からぬ對手が傳六と明しては唯済むまい。引被つて達引でも、もし爲た日には、荒いことに身顛ひをする姐さんに申譯のない仕誼だと、向後謹みます、相替らず酔つたため

の怪我にして、只管恐入るばかり。
轉んだ身體を引摺つて歩行いても、此ほど疵がつく砂利は界限にない筈と、紋三内々は睨んだが、愛的可いほどにして措け、お前には母親があるぜ、と言つて深くは咎めず、大目に見てくれたのが附目な位。可哀さうに染むだらうねと、あねさんが又塗つてくれる焼酎を、何うぞ口の方へとも何ともいはない弱りさ加減、黒旋風の愛吉疼むこと一方ならず。

素人療治では覺束なくなると、恰も可紋床は、豫て山の井に縁故があつた。
先の義庵先生は、市に大隠を極めて濱町に住つたので、若い奴等などと言つて紋床へ割込んで、

夕方から集る職人仕事師輩を凹ますのを面白がつて、至極の鐵拐、殊の外稻荷が最良であつたので、若先生の髪も紋床が承る。

二十二

(何うです豪傑、蝦蟇の膏ぢやあ不可ませんか。)と薬局に痛めつけられて、何時も蝦蟇の膏と酒さへありや外科も内科も譯なした、お前さん方は弱い者苛めで儲けるんだ、などと大言を發する愛吉、中指のさきで耳の上を搔きながら大惰げになつて其日も又。

明石町へ通ふこと五日六日、最う佳からうといふ日のことであつた。

打傾いたり、首垂れたり、溜息をしたり、咳いたり、堅炭を埋けた大火鉢に崩折れて凭れたり、然うかと思ふと欠伸をする、老若の患者、薬取が犇と詰懸けて居る玄關を、へい、御免ねえ、で愛吉はつかくと。

恠る馴染でお出入といつたやうな怪我人であるから、番號も遠慮もない、愛吉は四邊構はず、

(おう、柴田さん、此の、診察所、と黒塗の板に胡粉で書いてある、此の札を何かしておくんなさいな。横ツちよに曲つて懸つてるんですが、私あ過日中から氣になつてならないんで、直すか直すかと思つてると矢張り横ツちよだ。私の内は貧乏だけれど姉さんが居るから暖簾が汚れませ

んや、御新造が居なさならねえとそれだもの困つちまふ。)と高慢なことをいひながら、背伸をして、西洋造の扉の上に、鶏卵色の壁にかゝつた塗板を眞直に懸直し、其ま、閉つてる扉を開けて、小腰を屈めて診察所へ入つた。

密閉した暗室の前に椅子が五脚ばかり並んで、其へ掛けたのが一人、男が一人、向うの寢臺の上を胸を開けて仰向けになつて居る。若先生光起は、結城の袴に博多の帯、黒八丈の襟を襲ねて少し裕短に着た、上には絲織藍微塵の羽織平打の胸紐、上靴を引掛け、之に靴足袋を穿いて居るのは、蓋し宅診が濟むと直ちに洋服に變つて、手車で病院へ駆けつけようといふ早手廻。

卓子を傍に椅子に倚つて、一個の貴夫人と對向ひで居た。卓子に相對して、薬局の硝子窓を背後に、彼の白の上服を着たのと、いま一人洋服を着けた少年と、處方帳をすばと左右に繰廣げ、筆に墨汁を含ませつつ控へたり。

薬の薫は床に染み、窓を壓して、謂ふべからざる冷靜の趣。神社佛閣の堂と名醫の室は、如何なる者にも神聖に感じられて、さすがの愛吉、此處へ入ると天窓が上らず、青菜に鹽。愛吉、薬の匂に悄れ返つて醫學士に目禮したが、一體八字髯のある近眼鏡を懸けた外科の助手に毎日世話になるのであつたから、愛吉は猶豫はず、ひよこくと進むと、戸が半開になつて居たので、突然外科室へ首を突込んだが、驚いて退つた。

咄嗟の間、世にも媚かしい雪のやうな女の顔を見たのであつた、而して愛吉がお夏を見たのは、
其が最初だといふのである。

見るから心も冷ゆるばかり、冷たさうな、艶のある護謨布を蔽ひかけた、小高い、凡そ人の脊
丈ばかりな手術臺の上に、腰に絡つた紅の溢る、ばかり兩の膚を脱いだ後姿は、レスの窓掛を
透す日光に、くつきりと、然も霞の中に描かれたもののやう目に留まつた。

愛吉の間の悪さ、思はず顔を赧らめながら、もち／＼後退になり、腰をかけて待合して居る、
患者か、將た供のものか、圓鬚の婦人の次なる椅子に堅くなつたが、心こそ着かざりけれ、外科
室に寄つた椅子の上に、之も又媚かしく差置いてあるのは、羽織と、帯と、解棄てた下ぐと懐
紙。取亂した藤お納戸、緋、桃色、水色、白、紅。

二十三

愛吉はきよとんとして、ぼんやりあらぬ方を眺めながら、目玉をくる／＼と遣つて居ると、廳
て外科室の其の半開の扉をおした、洋服の手が引込む、と入違ひに、長襦袢の胴がちら／＼、薄
紫の半襟、胸白く、袷の衣紋の亂れたまゝ、前襟を取つたがしどけなく裾を引いて、白足袋の爪
先、はらりと溢る、留南木の薫。

診察室を出て来たが、深川の勝山、未だ世盛の頃で、お夏其の時は高島田の、年紀十七であつ
た。

(何某。)と彼の筆を持つた一人が聲を懸けると寢臺の上に仰向けになつて居たのは、迂り落ちる
やうに下りて踰と外科室へ入交る。

同時に醫學士に診察を受けて居た貴夫人は胸を搔合せたが、金縁の眼鏡をかけた顔で、背後へ
芍薬が咲いたやうな微妙い氣勢に振返つた。

其の時、打合せの帯を両手に取つて、床に膝をつきついてお夏の前に廻つたのは、先刻から控
へて居た彼の圓鬚の婦人であつた。

お夏は衿を取つて揃へると、腰から乳の下に下ぐを無造作にぐる／＼巻、あてがつてくれる帯
をして、袖を上へ投げて肩にかけた。附添の婦人は衝と立つて背後へ廻る。

愛吉は心なく垣間見た人に顔を見らるゝやう、思ひなしか、附添の婦人の胸にも物ありげに取
られるので、うつむいては天窓を搔いた。

續枚三

其の帯を未だ結び果てなかつたほどのこと。光起は今貴夫人を診察し了して、立身になり、
片手を卓子につきながら、低聲で何か命じて、學生に其の筆を運ばしめて居たが、一寸筆を留め
て伺つた顔に頷いて見せて、光起は衝と立直つた時、不圖、帯をして居るお夏を見て、

(濟みましたか。)

(え、)と頷く。

(痛かつたでせう。)

(はあ、)と事もなげに、淡泊に答へたのである。

光起は微笑んで、

(貴女、母様のいふことを肯かないと又できますよ。)

お夏は襟を脚へるやうにして、差俯向いて、颯と顔を赧らめたが、何にもいはないで莞爾した。

愛吉は額を撫でた。

醫學士の言葉とお夏の素振を、附添は嬉しさに、

(お夏様、あれ御挨拶をなさいましな。)

(知らない、)と素氣ないことをいつて再び莞爾。

(先生、癬の治ります薬はありませんでせうか。)と不意に言ひ出したのは件の貴夫人であつた。

(打棄つてお置きなさい、)と光起は言下に應ずる。

(でもあのこんなですから、)と然も世馴れた、人懐こいといったやうな調子で、光起に背を捻向けると、頸を伸して黒縮緬の羽織の裏、紅なるを片落しに背筋の斜に見ゆるまで、抜衣紋にさら

かした、肌の色の蒼白いのが、殊に干からびて、眉を造つた、白粉の濃い、金縁の眼鏡に瞼の皺をかくした顔こそ若けれ、あらはに見ゆる筋骨は四十であるのに、彼を抱くものあらば正に其の者の手の下なるべき、左の背を肩へかけて、亞弗利加の地圖の如き一面の癬、あな笑止や。

「汚えな！つて私あ本當にうっかり。其が何です、山河内といふ華族の奥方だつたんですつて、華族だつて汚えんですもの。」と愛吉はビイヤホールで語りながら、今も思出すほどか眉を擧めたのである。

二十四

名は知らず、西洋種の見事な草花を眞白な大鉢に植ゑて飾つた蔭から遠く其の半ばが見える、圓形の卓子を圍んで、同一黒扮装で洋刀の輝く年少な士官の一群が飲んで居た。

此方に、千筋の單衣小倉の帯、紺足袋を穿いた禿頭の異様な小男が唯一人、大硝子杯五ツ六ツ前に並べて落着拂つた姿。

時々髻のない顔が集り合つては、哄といふ笑語の聲が彼の士官の群から起る毎に、件の小男は一寸々額を上げて其方を見返るのであるが、丁度背合せになつてゐるから、金之助に之は見えないかつた。

ビヤホールは客は、今纔に三組の外には無かつたので、生麥酒の出入をする一段高い臺の上には、器械を胸の邊にして受持のボオイが恰も議長席に着いたもののやうに正面を切つて身動もせず悠然と控へて居る、其下に椅子に凭つて一人のボオイは新聞を讀む、之と並んで肩から脇の下へ金袋をぶら下げた一人、白の洋服の足を膝の處で組違へて、斜に肱で身體の中心を支へて立身で居る、屢々蹙音を立ててしつくひ叩の土間を、靴で士官の群の處へ通ふのは此のボオイで、天井は高く四邊はひつそり、電燈ばかり煌々と眞晝間の如く卓子を照して、椅子には人影もなかつたのである。

戸外は立迷ふ人の足、往來も何となく騒がしく、そよとの風も渡らぬのに、街頭に満ちた露店の灯は、をりく下さまに靡いて、すはや消えむとしては燃え出づる、其都度夜商人は愁はしげなる眉を仰向けに打見遣る、大空は雲低く、恰も漆で固めたやう。

蒼と赤と二色の鐵道馬車の灯は、流るゝ螢かとはばかり、暗夜を貫いて東西より、衝と寄つては颯と分れ、且つ消え、且つ顯れ、輻輳として近き來り、殷々として遠ざかる、響の中に車夫の懸聲、蒸氣の笛、殆ど名狀すべからざる、都門一場の光景は一重の硝子に隔てられてビヤホールの内は物色沈々、さすがに何となく穩かならぬ宇宙の氣勢の、屋を壓して刻々に迫るを覺ゆる、是が、風になるか、雨になるか、日和癖で星になるか、いづれとも極つたら、瀬を造つて客は一

齊に籠むのであらう。

とばかりにしてものの靜けさよ。此處彼處の鉢植なる熱帶地方の植物は、奇花を着け、異香を放ち、且つ綠翠を滴らせて、個々電燈の光を受け、一目眇として、人少なに、三組の客も、三人のボオイも、正に之れ沙漠の中なる月の樹蔭に憩へる風情。

此間に、愛吉がお夏の來歴を説く一場の物語は、人交もせず進んで、築地明石町の醫學士の診察所に於ける出來事にまで至つたのである。

「聲を出して言つたのか、汚えなんて、癪を嘗めさせられはしまし、肌を脱いで醫者に見せた處を背後から、汚え、なんていふ奴がありますか、然も華族だつてな、山河内……伯爵だ。」

尤も其の奥様は赤十字だの、教育會、慈善事業、音樂會などいふものに取合つて、運動をするのに辻車で押廻すといふ名代のかはりものなんだけれども、怒つたらう、皆驚いたらう、亂暴狼藉だ、何うした、それから、

「私もついつかり遣つちやつたんで、はつと思ふと、」

「うむ、」

「丁度代診さんの方へ呼ばれたから遁げ込みました。」

「しかし癩が汚えといったのが、柳屋の氣に入つたといふでもなからう。」
愛は眞面目に、

「へい、然ういふ譯でもないんですがね。」

「それぢやあ手術臺に肌腕の、俗にそれあられないといふ處を見られたのが御縁になつたか、但し些と何うもをかしいな。」

「何、然ういふわけでもないんですがね。」

「何しろ、汝の方からゆすり込んだものと私は思ふな。」

「先生御串戯を、勿論彼です、お夏さんは華族てえと大嫌です。私が心も同一だ、癩は汚えに違ひません、ですが、其が何うといふことはありませんよ。それからね、素肌を氣にして腋の下をすぼめるやうな筋のゆるんでる娘さんぢやありませんや。けれども私が入入をするやうになつたのは、此方から泣附いたんです、へい。」

「手を合せて、拜みます、と口説いたか。」

「何ういたし、……手前御慮外は申しません、泣ついたのは母様でさ。」

「は、あ、紋三郎がいつたやうに、何時も酒の方の意見の義だらう。」

「否、其時は生命にかゝります一件。」

「おや、お前それでも酒の他にかゝはることがあるだらうか。」

「大有り」といつて愛吉は硝子杯の縁を壓へながら、金之助をじつと見て、

「串戯ぢやありませんでしたよ、眞個。」

其がね、矢張其日なんです、事といふと妙なもんで、何でもない時は東京中押廻したつて、蜻

蜒一足ぶつかりこはねえんですが、暮があくと一齊でさ。」

「大層感じたな。」

「眞個ですから。」

「ぢやあ何か、華族様へ御無禮を申したとあつて、お差紙でも着いたのかい。」

「否、先刻も申しました通り、外科室の方へ呼ばれたんで、先づお座は濁りましたね。」

それからお手當が濟みました、最う通つて來ないでも大丈夫だ、あとは唯大人しくなさいよ、さ、大人しくしろが可うございませう。

無暗とお禮を謂つて匆々に山の井さんの前を抜けて、玄關へ参りますとね、入る時にやあ氣がつきませんでした、此處に其のまた珍事出來の卵が居たんです。女の子で、

「いづれ然うだらう。」と金之助は故とらしく深く頷く。

「まあ、お聞きなさいまし。上口の突尖の處、隅の方に、ばさ／＼した銀杏返、前髪が膝に押つくやうに俯向いて、疊に手をつけて慥う、横すわりになつて、折曲げて居る小さな足の踵から甲へかけて、ぎり／＼縹帶をして居ました、綿銘仙の垢じみた袴に、緋勝な唐縮緬と黒の打合せの帶、此奴を後生大事に／＼めて、」

「大分悉しいぢやないか。」

「私だつて先生、唐縮緬と縹子位は知つてますぜ。」

「幾干か出せ、こりや恐ろしい。」

「眞平御免なさい、先方は小兒なんです。極内氣さうな、半襟の新しいが目立つほど、しみツたれた哀な服装、高慢に櫛をさしてゐるのがみじめでね、何う見ても女中なんですが、」

恐ろしく疼むかして、小さく堅くなつて、しく／＼泣いてゐるんです。

姉さん何うしたんだつてね、餘り可哀相だから聲を懸けて遣りましたが、返事をしません。疵處にばかり氣を取られて、最う現なんだらうと思ひました、少いのに疼々しい。」

二十六

「じれつたいから突然肩に手を懸けると、其の女中は苦しくツてか、袴も透すやうな汗びつしよ

り、ぶる／＼震へて居るんでせう。何うしたんだつて聞きますとね、足の裏から突通るほどの踏抜をしたんださうで、其の前の日の事だつていふんです。

見りや込合つて居ましたけれど、どれも病人、人の世話を焼かうといふ元氣の好い奴は居りませんや、此奴かゝり合だ、身體を抜くわけにやいかねえやうな氣になりました。

一體何處の者だ、家は遠いかつて聞きますとね、つい五町ばかり先でございます、あの、親分の處に、と弱つた聲でいひました。親方といふのは鯨の傳——何うです騷の卵ぢやありませんか、尋常事ぢやアありますまい。

何でも傳が内の奉公人に違えねえ。野郎め、親方々々と間違でも人に謂はれる奴が、汝が使つてる者がこんな怪我をしてゐるのに、醫者に寄越すつて、ないら病の猫を開放したやうな工合は何たる處置だい、姉さんをつけて寄越さないまでも、腕車といふものがないのぢやあなからう、可哀相に丸ぼちやの色の白いのが、今の間にげつそり瘦せて、目のふちを眞蒼にして居らあ、震へてるぜ。

然う思つて堪らなかつたんですが、氣が着きますとね、待てよ、私が思つた通を口へ出して謂

やあ、突然傳を向うへまはして、づらりと並べる臺辭になる、さあ、おもしろい、素敵妙だ。

一番、此の女をかつぎ込んで、奴が平生俠客ぶるのを附目にして、ぎうと謂はさう。

蝦蟇の膏で凹まされるのも何のためだ、忘れやしねえ。」

と話をするにも凄まじい意氣込だつた、愛吉は一寸氣をかへ、

「へ、へ、へ、先の縁日の晩のは、全く此方が悪かつたんです。落度はあつたつて口惜いにや口惜いでせう、先生、子曰はよして聞いて下さい、可うございますか。」

「可いさ、可いさ。」

「オイ、姉や、私が肩へつかまりねえ、わけなしだ。お前ン處まで送つてやらうと、穿物を突懸けて置いて、躪んで背中を向けますとね、そんな中でも極のわるさうに淋しい顔をして、うじうじ。」

じれつてえ女ぢやあねえか、尻なんざ抱きやしねえや、帶を持つて脊負つてやら、さあ來い、と喧嘩づらの深切づくめ。言ぐさが荒つぼうございますから、おどくして、何と肩へ喰ひつくとやうに顔をかくして、白晝、其でも此の野郎の背中へ負をしましたぜ。あとで考へると氣の毒でさ、女の氣ぢやあ疵が痛む方がどんなにお恰好だか知れませんよ。

全く叱りつけるやうに勸めたんですからね、すゝめ人が私でせう。阿魔は的切、ぶんなぐられ

ると思つて負さつたもんです、名はお米ツていひます、可愛い女なんですがね、十七でしたよ。

さあ、歩行き出すと、怒う耳朶の處へ纏れた髪の毛が障るでせう、あいつあ一筋でもうるさうがさ、首を振ると猶亂れて絡みますから、呼吸をかけてふツツ鬢の尖を向うへ吹いちやあ、三角の處まで参りますとね、背後から腕車が來ました。

町幅が狭いんですから、すれ違つて前へ駆け抜けたと思ふと、振返つた若衆と一所に、腕車の上から見なすつたのは先刻のお嬢様、え、お夏さん。」

二十七

「藤お納戸の、彼の脱いであつた羽織を被ておいでなすつた。襦袢の袖口に搦んだ白い手で、母衣の軸に掴まつて、背中を浮かすやうにして乗つてましたつけ、振向いて私がお米を負つた形を見て莞爾笑ひなすつた。

顔を見合せますとね、此方でも何だか知己のやうな氣がしたもんですから、遠慮しねえで、(今日は)と肚の中で言つてお辭儀をしたんです。

腕車は何、休んだんぢやあございません、驅けてる中、一寸の間なんで、其ま、飛ぶやうに行つちまひましたが、縁でございませう、先生。」

世の中といふものは、何處にどんな引かゝりがあるか知れませんが、何故ツてますと、あとで分りましたが、其のお夏さんの勝山といふ家は、私の亡くなりました父爺が、船頭で、奉公人同様に久しい間御恩になつたのでございました。

「さあ、其から米坊をかつぎ込んで、丁ど縁端に大胡坐をかい毛抜をいぢくつてやあがつた、鯨の傳をふんづかまへて、思ふ状毒づいたとお思ひなさいよ。」

くだらないことをお耳に入れるでもありませんから、始末は申上げませんが、何しろ俠客だとか何とかいはれる分では、お米に届かねえ點が十分にあつたんですから、こりや力づく、腕づくぢやあ不可せんや、傳の親仁大凹み。

此方あぐツと溜飲が下つて、おさらばを極めてフイとなつて、ざつぷり朝湯を浴びた氣さ、我ながら男振を上げて、や、どんなもんだい。

人形町居廻から築地邊、居酒屋、煮染屋の出入、往復、風を拂つて伸しましたわ、すると大變。

暗がりを脚へ楊枝、月夜には懐手で、香氣に歩行していると、思ひがけねえ狂犬めが嚙附くやうな鹽梅に、突然、突當る奴がある、引摺倒す奴がある、拳固でくらはす奴がある、一度々を呼吸を引かないばかりで、はツ／＼と思ふことが、毎晩ぢやありませんか。」

「成程、」

「其の度に微傷です、一年三百六十五日、此の工合ぢやあ三百六十五日目に、三百六十五日だけ傷がついて、此の世を宜しく申させられさうで、私も、うんざり。」

様子を聞くと、傳が此事を意趣にして、子分子方の奴等が初中附け廻すんださうですから、私あ堪らなくなつて、舟賃を一錢出して、川尻を渡つて佃島へ遁げました。

佃島には先生、不孝者を持つて多いこと苦勞をする婆さんが一人ね、辨天様の傍に吝な掛茶屋を出して細々と暮して居ます、子に肖ない恐ろしい堅氣なんです。」

「何だい、其は、」

「私の母親でございます。」

「其だもの。」

「へ、へ、今更いたし方がありません、其處へ轉がり込んで、居縮まつて震へてたもんですから、愛吉何うしたんだつて、母親が尋ねます。」

これ／＼だといひますとね、其だから常日頃いつて聞かさないうことではない。蟻ぢやあなし、毛蟲ぢやあなし、水があつたつて對手は渡つて來ます。しかし……鯨の傳……其ならば死んだ父爺が御恩になつた深川の勝山さんへ出入をするから、彼家へ行つて、旦那様にお頼み申して、傳

にいひ聞かしておもらひ申して、お前の身體を無事なやう計らひませうと、父爺が亡くなつてからも暑さ寒さにやお見舞を缺かしたことがないといふ、律儀はこんな時用に立ちます、で母親が取りあへず。」

二十八

「深川へ参りましてね、母親が譯を謂つて話をしますと、堅氣の商人だ、遊人なんぞ對手にして口を利けるんぢやあないけれども、傳か、可し、鯨ならば仔細はないと、さらりと埒は明いたんです。」

私はこんなやくざもの事ですから、母親も別に話さないで居たのが其時知れまして、然うか、そんな件があるのか、床屋が家業と聞きや丁ど可い、奉公人も大勢居るこつた、遊びながら働きに寄越すが可いと、深切におつしやつて下さつたので、二度目にはお禮かたぐ、母親について伺ひますと、先生、吃驚しましたぜ。

中庭で以てきやつといふ騒ぎ、女中衆が三四人、池の周圍を驅けてるんで、鬼ごっこがはじまつてるか、深川だつて香氣なもんだと、ひよいと見ると何うです、縁側に腰をかけてたのは山の井の診察所で見た、別嬪だらうぢやありませんか。

而して女中が遁げるのを追懸けまはすのは、恐しい、犬でも蹴さうな軍鶏なんです。

今でも柳屋に飼つてあります。強いことツたら御用の小僧なんか背後からはたかれて、ぎやつといつて、打つ坐りまさ。

心持が可うございませ、とさかを立てずつと伸して、眼をくりりと遣りますとね、私とでも取組みさうでさ。一體氣の勝つた、お夏さんは癩癩持なんだけれど、婦人だけに何うすること出来ないんですから、癩なことは軍鶏と私とで引受けてるんで、え、可うござ、軍鶏と愛吉とで請合ひましたと謂ふと、蒼くなつて怒つてる時でも莞爾しまさあ。

お夏さんは飛んだ其の鶏を可愛がつてます。それから母上はいふまでもありませんが、生命がけで大事にして居るお雛様がありますよ。

十軒店で近頃出来合の品物ぢやあないんださうで、由緒のあるのを、お夏さんのに金に飽かして買つたつて申しますがね、内裏様が一對、官女が七人お囃子が五人です、其についた、箆笥、長持、挾箱、御所車一ツでも五十兩したツていひますが、皆金蒔繪で大したもんです。

此のお雛様の節句と来た日にや、演劇も花見も一所にして、お夏さんにかゝる雑用、残らず持出すといふ評判な祭をしたもんですツさ。

私が勝山に伺ふやうになりました翌年、一昨年ですな。

三月三日の晩、全焼にあひなすつた。」といひかけて、愛吉は四邊を眈したが、浮かぬ色をした。聲も低く、

「然も私が行合せて居たんです。十時頃でございましたね、お雛様を見せておくんないつて、勝手の方から。不斷、皆様で可愛がつてくれますし、お夏さんも最眞にして下すつたもんだから、直に其の何でさ、二階の座敷へ上りました。」

目の覚めるやうな六疊は、一面に櫻の造花。活花の桃と柳はいふまでもありませんや、燃立つやうな緋の毛氈を五壇にかけて、炫いばかりに飾つてあります、お雛様の様子なんざ、私にや分りません、言つたつて、聞いたつて、唯最う綺麗で澤山。

お夏さんは直ぐ其の壇の下の處に雪洞を控へて、立派に着換へて居なすつたつて。彼の内裏様のだつて、別に二個時繪の蝶足の然うですな……」

愛吉は卓子の上に四角な線を指の先で引いた。
「此の位なお膳がありません、男雛のと女雛のと一對、そら、あの、」
金之助は熱心に耳を傾けながら頷いた。

二十九

「可うございませうか、其の一對の小さなお膳を、お夏さんが自分の前に置いて、最う一個の方を向うへならべて、差向ひといふ形で居なすつたが、前には誰も見えなかつたんです。

指を丸げた様な時繪の椀、それから茶碗、小皿なんぞ、皆其のお膳に相當したのに、種々な御馳走が装つてありましたつて。

其の後病氣で亡くなりましたが、彼の診察所に附いて居た年増ね、乳母といふんぢやあ無かつたんですが、お夏さんのお氣に入で傍の處へ。最う二人、小間使が坐つて、此が白酒の瓶を持つてお酌をしてる、二ツ三ツ飲んなすつたか、目の縁をほんのりさせて、嬉しさうに、お雛様の飾りものを食べてる處で。

や、素敵なものだと、のはうづな大聲で、何か立派なのと其處らの艶麗さに押魂消ながら、男氣のない座敷だから、私だつて遠慮をしました。

いつものやうにお臺所へ下つてお末の出尻と一所に頂くべいとね、後退りに出ようとすると、愛吉さん一ツあげませうかと、お夏さんが言つたんです。

まるで夢中、私あ腰が抜けたやうに突然其處へ坐りましたぜ。

さあ、一面の櫻と、咲亂れた桃の中、雪洞の灯で見た其の時の美しさ。
然も微醉と來て居ませう。最う雛壇を退けようといふ三日の晩、此間飾つてから起きると寝る

まで附添つて、階下へも滅多にやあ降りたことのないばかり、樂み疲れに氣草臥といふ形で、片手を疊について右の方に持つてなすつた小杯を、氣前よくつゝと差して呉んなすつたい。

震へながら……眞個ですよ、震へながら其のお杯を受けようとする、愛吉さん最う些と其方へと、傍から年増の氣をつけたんです。

坐つたのは、お膳の前でせう、これは先生。毎年々々然うやつて差向ひに並べても、向うへ坐つた奴は未だ一人も無かつたんださうで。

お夏さんは朋友が嫌だつていふんです、又番頭や小僧が罷出ようといふ場ぢやありませんや。然も其年、一昨年ですな、其晩にや私より一足前に、雛の間で一人お客があつたんです。

何でも天下に聞えた立派な豪傑な爺ださうですが、旦那とは謠の方で、築地の寶生の師匠の宅ね、彼の能樂堂などで懇意になつてゐるんだつて謂ひましたよ。大層な雛だといふが、どれ〜と押上がつて、やあ一人でやつて居なさるの、私が相手をしようつて、其のお膳の前に坐りましたつよ。

お爺ちゃん、厭なこつた！とお夏さんが屹となつたので、傍の者はあツふ〜、旦那も御新造様も顔色を變へなすつたけ。は、あ、これは遣られたと、肥つた腹から大笑を揺り出して、爺さんは譯もなく座敷をかへ、階下で今、旦那、御新造様なぞと一座で飲んで居ると謂ふ、其の後で

せう。

だから年増は遠慮をしろと氣を着けたんです。

するとお夏さんがね、可いよつて、言ひながら、白酒の瓶を取つて、お酌して酔はして遣らう

や。莞爾してお前様、否さ、先生！」

金之助は啞然として、

「口の端を拭け、泡だらけだ。」

三十

愛吉は仇氣なく平手で唇を横に扱いたが、すがめて掌を打眺め、

「嘘、泡なんぞ附着いてやしねえ。」

と例の愛くるしい口を結んで眉根を寄せ、吐息をついて歎息した。

「眞個に考へて見りや夢の様ですよ。」

お夏さんは酌をしておくんなさる氣で瓶を持ちながら、ふと雛の壇を見ましたがね、何うなすつたんだか、おや！といつて恚う、瞳を据ゑて、瞬もしないで須臾。

枕についても目をぱつちり、お雛様の番をして、すやく〜と寐息に簪の花は動いても、飾つた

雛は鼠一疋がたりともさせないんでございますつてね、過年もお雛様が皆で話をするツて、眞面目に言ひなすつたことがある位、凝つてるんだから魂が入つてませう。

ト其の凝視めて居なすつたツけ、一寸お雛子の人形が笛を落した、まあ、鼓を打棄つた、まあ、まあ、まあ、太鼓の撥を、あれ緋の袴が動くんだよ。あれ、皆！とお夏さんがすつくり立つた。顔を見合せて皆呼吸を呑みましたわ。

其の様子ツたら、まるで雛がどつと惣立ちになつたやうに、私等が胸に響いたんです。語る時、十有數日の間を蒸しに蒸した、人類の汗を絞り抜いた、一昨日來の氣壓は、正に其の極所に達したと見えて、陰々たる中にももの響、柱がきしむやうである。

愛吉は肩をすぼめて、
「其の途端に私等は雛壇が滅茶に崩れるんだと思ひましたね、火事だ、火事だと、天井の邊で喚いたと思ふと、」

愛吉は穩かならぬ猿眼で、きよろ／＼と四邊を見たが、忽ち衝と立上つた。
「先生、雨です。」といふ間もなく、硝子窓に一千の礫ばら／＼と響き渡つて、此の建物の揺ぐかと、萬斛の雨は一注して、轟とばかりに降つて來た。

金之助も、話の變と、急な雨に、思はず顔の色を變へて唾を呑んだが、押出すやうに、

「お、雨だ。」

臺の上のボオイは眞先に飛び下りた、新聞を見て居たのは眞中を掴み棄てて立つ。立つて居たのは金袋の口を壓へて、此の三人須臾の間といふものは唯縦横に土間の上を駆け歩いた。白い姿の慌しく行交ふのを、見る者の目には極めて無意味であるが、彼等は各々に大雨を意識して四壁の窓を閉めようとあせるのである。大粒な雫は、又實際、斜とも謂はず、直ともいはず、矢玉のやうに飛び込むので、彼の兀頭の小男は先刻から人知れず愛吉の話に聞惚れて、只管俯向いて額をおさへて居るのであつたが、其手を放して天井を仰ぐと、怪訝な顔をして椅子を放れて、窓の下へ行つて、之は又故々閉めてあつた窓の戸を一枚上へ押し上げて腰を捻つて、戸外へ衝と其の兀頭を突出すや否や、ぱつたり閉めて引込まました、何條堪るべき、雫は其の額から、耳から、額の邊から、宛で氷柱を植ゑたやう。

怒る中にも自若として冷靜の態度を保ち、故らには耳を傾けて雨を聞かうともしないのは彼等士官の一群である。

稍あつて人々は恰も軍人の如く靜まつた。

「障子をあげると、突然火の粉でせう。」いふ聲も沈むばかり、雨は愈々盛である。

「お夏さんが一番確乎して、其のまゝ、内裏様に手をお懸けなすつたが、愛吉、鶏をつて一聲聞棄てにして私あ二階から飛び下りて、二ツ三ツ人の體に打附かつたとばかりし覺えて居ます、ええ夢中でね、驅けつけたのは裏口にある其の軍鶏の埒なんですよ。

何を悟つたのか、ケケツ、羽ばたきをしてる奴を引摺んで兩手で袖の下へ抱へ込むと、雨戸が一枚ばつたり内へ煽つたんですが、赫として顔が熱かつたのも道理、見る間に裏返しに倒れ込むとめらめらと燃えてませう。戸外は限もない狐火のやうにちらちらと炎だらけ。はつと後退りに飛ぶ拍子に慌ててつんのめつて、仰向けに倒れた奴でさ。最う天井から紅い舌を吐いてるぢやアありませんか。目が眩んだ足の處へ、箱だか、鐵瓶だか重いものが斜邊に來て乗つかるといふ騒ぎ。百年目だと思つた私あ、板戸も壁も突破る勢で横ッ飛びに表の方へ匆ね出したんで、どしばたといふのが地の底へ刻み込むやうに聞えるばかり。あつとも、きやつとも聲なんぞはしませんでした、門口へ出ると道も空も土器色にはつとなつて、處々段々に慍う其の隈取つて血が流れたやうに見えましたつけ。

其中をね、彼處此方三四人、大きな蟻の影法師が映つたやうに宛然醉ッばらひの足つきで、ひよろ／＼しながら歩行いてましたが、奇代なもんでございますね、道なら三町ばかり伸したと思ふと、洪と火の粉が浴びせて來ました。鶏は脇の處で恐しい羽ばたきをしますね、私あ其の煽で宙へ上りさうで足も地につきませんや。背後の方でも、前途の方でも、其時分に漸々ワツといふ人聲が陰に籠つて聞えました。やがて私の身は何の事はない渦いて來る人間の浪の中に卷込まれてしまひました。

右左透間のねえ混雜なんで、其奴あ皆火事場の方へ寄せるんでせう、私あ向うへ抜けようとするんでせう。

突當るやら、踉蹌けるやら、目も口も開かねえんで、何でえ！田舎ものが神田の祭にはぐれやしめえし、人ごみにまご／＼する事あねえ、火事に逃げるたあ何の事だと、おされて劍突を食ふ癩癩まぎれに、立直して引返さうとする、と氣が着きました。鶏を抱へてます、其奴は唯一言お夏さんに頼まれたから起つた事。

ホイ何のこつた、行くにも歸るにも此の騒ぎに揉まれちやあ、羽も翼も坊主にならあ、と吃驚して、背後は見えないで、抜けたり、潛つたり、呼吸ぐるしいほどの中をもぐつて出て、先づ水のある處へ行きましたがね。

水ツてのは何、深川名物の溜池で、片一方は海軍省の材木の置場なんで、廣ツ場。

一體堀割の土手續で、これから八幡前へ出る蛇の蛻つた形の一條道ですがね、洲崎へ無理情死でもしに行かうって奴より外、夜分は人通のない處で、場所柄とはいひながら、其の火事にさへ、些とも人間が歩行きません。氣の所爲か、カッ／＼と燃える中に、木竹の折れる音もするほど近間で居て、其で何と私の聲音にばら／＼蛙が遁げ込みます。水の音を聞くと一杯のんだ氣になつて、一呼吸吐いたんですが、——はてな。」

三十二

「其處でお夏さんだ、何うなすつたらう。私が此の慌て方ぢやあ二階に残つた女連は氣絶たかも分らない。お夏さんはお夏さんで、雛を大切に取出しさうな權幕だつたが、火急にも何にも内裏様一個抱く時分にやあ、火の粉を被んなすつたに違ひがないと、さあ、心配になつて堪りません。矢でも鐵砲でも火事場へ飛んで歸つて、お夏さんの様子を見ようと、引返さうとすると、抱へて居る鶏なんです。」

先刻の彼の場合にも、愛吉鶏をツてお謂ひなすつた、何う爲よう、之をまあ。

葛籠長持と違つて、人の家へ投ツ放しに預けて來られるんぢやあ無し、庇つて持つて居た日にやあ、人混の中だつてうっかり歩行かれるんぢやあねえ。火の中から助け出したばかりで、跡をお去らばにして可い位なら、お夏さんがお頼みはなさるまいし、私だつて頼まれる程の事ぢやあなし、困りましたね、何うも、何しろ活物だから始末が悪かつたらうぢやあありませんか。

人通のない土手だつて、軍鶏ばかり置いて行きや、何處へ去つちまふも知れたもんぢやあありませんね。見りや溜池の中に舟もあつたし、材木もありましたが、水死人を捜すやうに鶏を浮しとく數ぢやありません、持扱ひましたね、全く氣が氣ぢやあ無かつたんで、一羽抱へ込んで跣足で池の縁をまご／＼して風ツてのはありません、我ながら薄ぼんやり、何うしてののかと思ひました。

火事は未だ盛です。

すると灰のやうに薄赤い向うの路へ影がさして、四五人一列になつて來るのがあります。土手を横に切つて、あれから埋地にかゝつた橋の、欄干が眞中で切れて水へ折れ込んで居ようといふ、ぺんぺん草の生えてる袂へ寄つて、渡らうとする時分にやあ私が居る間近になつたから見えました。

續枚三

眞先が女で、二番目がまた女、あとの二人が矢張女、皆な顔の色が變つてまさ、島田か銀杏返か、がツくり根が抜けて、帯を引摺つてるのがありますね、八口の切れてるのがありますね、どれも／＼小刻みに、歩行くと絡むのは燃立つてせう。

一人々々に人形だの、雛の道具だのを持つてる、三人目の、内裏様を一對、両手に持つて、袖で掻合して胸に押着けて居たのがお夏さん、夜目にも確か、深川中探したつて、凡そ其の位なのは無いのですからね、……助かった。

つか／＼と駈け寄つて、背後から、丁ど橋の眞中へ其の一組のか、つたのを、やあ、と私あ嬉し紛れに頓興な聲を懸けました。

屹と立留つて、黙つて私を見なすつた、其時のやうにお夏さんの、あんな氣高い凄顔を見たことはありませんでしたよ。鬢の毛も亂れて居ます、其に、場所がそんなでせう、天を焦す明でせう。つい目の前に彼の、愛吉、鶏をツて謂ひなすつた二階の景色が見えるのに、急に變つて其なんでせう、こりや死んだ魂が直と此處へ映るのか、然うでなけりやお夏さんの守護をして、緋の袴の連中が火の中から化けて來たのだ。」

三十三

「丁ど其の時分下火になつたと見えまして、雲が颯とか、つたやうに、一面赤かつた中へ黒味がさしましたわ、女連の姿は消えたやう、お夏さんばかりが判然と、ぱつちりとした目の色も見えて、私が手の鶏を御覽なすつたが、何、あとは張詰めた氣が弛んだか、足取が亂れて、あつちへふらり、此方へひよろり、一人は危険な欄干に凭れ懸りましたし、最う一人は何の事はない、其處へ打坐つてしまつたんです。手を取つて起して見りや、松ツていふ女中なんで、怪しいも怪しくないも、場所だつて不思議はありません。

全體此の橋も、池を渡つた向うも、舊は矢張其時分の勝山さん位な御大家の庭だつたんで、橋がまた庭の景色の一ツだつたさうですが、馬、車なんぞ思ひも寄らず、人ツ子だつて通りやしません。唯ね、材木を組んで筏を拵えて流して來るのが、此の下を抜ける時、何處でも勝手次第に長鍵を打込んで、突張つて、潛る位なもので、旦那が買置なすつた。其の中綺麗にして、藤棚の池へ倒れ込んでるのなんぞ直したら、お夏さんの祈禱所見たやうのもの、勝山さんだけの辨天様の堂を建立しようなんてね、いつて居なすつた、其の埋地へ遁げて來たんでさ。考へて見ると其なんです、不意に打つかつた時は此の世のことぢやあないやうに思ひましたよ。」

「大分涼しくなつて來た。」と金之助は袖を合せて、想ひ出したやうに言ひつつも、頷き／＼聞くのである。

「へい、凄いやうな雨でございましたね、私あ何うなるんだ知らんと、お話をいたします内に氣が變になりましたつけ、可い鹽梅でございます。」

否ね、私ばかりぢやあなかつたんで、火事場では、官女が前後を取巻いて、お夏さんが東の方

に、通つたと謂ふ評判で、また勝山が焼ける些とばかり前、緋の袴を穿いた素白な姿の者が、丁ど其屋根の上あたりを走るのを、汐見橋の上で見た者がある、前兆だなんて種々なことを謂つたもんです。

やう／＼夜が夜の色になつて、濕っぽい風が吹いて来ると、御新造様、其れから旦那が、あとさきになつて、女中が三人、私とお夏さんと、お雛様と軍鶏の居る其處の埋地へお見えなさいました、何方も箸一本持つちやあいらつしやらないんで、追々集つた、番頭小僧、どれも不残着のみ着のま。

尤も私が二階を飛下りると、入違ひに旦那と御新造様がお夏さんの處へ駆け上んなすつたツけ、傍に居た女中は助けてくれといふんでせう。手を合せて唯拜む程とちつてるのに、袂のさきを口に啣へてお夏さんは悠々とお雛様を片付けて在らしつたつてね、皆来い、お夏が死ぬ、お雛様だけ出しておくれと、お二人が一生懸命。

其ですもの。

恚ういひますと、お夏さんが我儘三昧、親御は甘いばかりに聞えませう、けれども因縁事なんですよ、だつて勝山のものといつたら、池に浮してあつた材木まで焼けツちまひましたから。業の火とかいふんですな、恐ろしいぢやありませんか。

其でね、一度其の埋地で家中が寄つたが最後で、あとは最うちり／＼ばら／＼。

三十四

「雛は皆助かりましたし、飾の道具といつたやうな物も、目立つたのは大抵出たんださうですが、珠だの、珊瑚だので飾つた、天人が胸に掛けるやうなびら／＼の下つた女雛の冠ですが、無くなつて、其から房のついた御簾のかゝつてる結構な、一品で五十兩、先刻も申しましたね、格別私なんぞも覚えて居る御所車が其ツ切になつたんですつて、何時まで経つても、お夏さんが太く氣にして居ますがね、固より金目にかゝはつたことぢやありません、彼の姉さんのことですから、へい。

大方何でせう、人並はづれて雛を大事がんなさるんでも分ります、其處らの様子でも知れませんが、恚う謂つちやあ何ですけれども、お雛様を先づ戀しい方のやうにでも思つてるんぢやありませんまいか。

然うすると、對手の女雛を自分ごっこにでも極めて居るんで、其の冠が失せたのも、許嫁の印の簪でも落したやうに思つてることせう、婦人は天窓の物と謂ひますから。

實に碎けて居て、些ともみづからがない女だけれど、何處か恐しく品があつて、私なんざ時

時我ながら頭の下がることありますもの。

ねえ先生、御所車と冠がなくなつたのを、氣にして鬱く位なのが、今更ぢやアありませんけれども、上野を歩行いて、路傍で身體を洗つて、ちやぶ屋の姉やと間違へられて、癖の女を、一寸先生、お夏さんも然ういつて話しなすつたが、山河内の姫様といふと一件ものの女ですつさ。其奴を煽がされるなんて可哀相ぢやアありませんか。

否ね、龍宮の乙姫てえ素ばらしいのだつて、蜈蚣にやあ敵ひませんや、瀬多の橋へあらはれりや、尋常の女でせう、山の主が梅干になつて、木樵に嘗められたといふ昔話がありますツてね、争はれねえもんです。

全體ちやきくの深川ツ女が、根岸くんだりへ行つて、も、んぢいに歌を習ふなんて、そんな間違つたことはないんです。郷に入つたら郷に従へだと、講釋で聞いたんですが、いかな立女形でも彼の舞臺ぢやあ睨が利かねえ、それだから飛んだ目に逢ふんです。

其が先生、一體がお夏さんは、歌だの手習だのは大嫌で、鴨川なんて師匠取をするんぢやあないんですが、唯今申しました其の焼け出されが只事ぢやアありません。前世の業のやうなんだから致し方はありません、柱一本立直らないで、其だけの身上が丸で0。氣ばかりあせつて居なさる中に旦那が大病、其の御遺言でさ、夏に我儘をさせ過ぎた、行末が案じられる、盆盃なんぞ止

にして手習をしてくれと、其處で發心をなすつたんだが、何に最う叩き止めツちまふが可うごす。其の足で藤間へいらつしやりや、御自分の方が活きた手本にならうてんで、え、私の仕返しや動かねえ縁切だ。お夏さんが之から行かうたつて行かれやしません、薩張して可うございます。へい、いち／＼何うも難有うございまして先生。

あなたのやうな紋着を着た方が、私等を可愛がつて下さらうとは思はなかつたんで、柳屋のも便にするものはなし、此頃は御新造様が煩つて在らつしやるなり、彼の勝氣なのが、めつきり瘦せなすつた。

力にならうといふのが私と軍鶏だから困つちまふ。と、つく／＼腕を組んであどけない、罪のないことを眞心から言つて崩折れた。眞面目な話に酔もさめたか、愛吉は肩胛を内端にして、見ると寂しさうで哀である。雨は霽れた、人は湯さめがしたやうに暑を忘れた、敷居を越して溢れ込んだ前の大溝の雨溜で、しつくひ叩の土間は一面に水を打つたやう。

三十五

愛吉がいふ處も、大雨の後をそよ吹く風も、太く身に染みた様子であつた、金之助は改めて硝子杯を擧げ、「最う一杯景氣をつけよう、大分引込まれて私まで妙になつた、お前にも似合はない

何も鬱ぐにも當るまい」と、激ます人も何となく理に落ちて來たのである。

「え、此位にして置ませう。何年ぶりかで不思議に慍うやつて折角眞面目になつたものを、又酔つちやあ詰りません、ねえ先生、何うぞ可愛がつて下さいまし、私はくらひ酔つて其なりけりでも構ひませんが、お夏さんは眞個に誰も便にするものがないんですから、後生でございます。旦那方のやうな紋着を着た方は大嫌なんだけれど、何、實の處は私等を輕蔑して取合つて下さらないと相場が極つてるとおもひますから、じゃ、馬ですねてるんでさ、心細うございます。ほんとうにお夏さんは便りのない身でおいでなさんですからね、御不便がありや、直ぐにでも柳屋へ引張つて行つて見せてえや、而して此の先生がお前さんのことを身に染みて聞いて下さつたつて話したら、何んなにか喜ぶでせう。」と然も懐しげにいふのである。

金之助も他所事とは取らない氣色で、

「いや、私は之でなか、當世ぢやあ無いんだから、女の兒とお附合は些と困る、併しお前とは改めて朋達にならう。なあ、朋達——然うだ親類とでも何とでも思ひなさい。用に立つことがあつたら出来るだけ智慧も貸さうよ、身體も貸さうよ。込入つた話で其のお夏さんのことについてちや、こりや懸直無し私も一ツもの思ひだ、歸つてからも路々も條を辿つて考へよう、いや然しお庇でおもしろい……といつちやあ濟まないやうな氣もするね。」

「唯」といつたツ切、愛吉はしばらく差俯向いて居たが、思出したやうに天窓を上げて、

「飛んだ頂きまして、最う御免を蒙ります。」

「一所に出ようか、其處等まで同じ向だ。」

金之助は愛吉が返した、根岸の鴨川の討入の武器なる黒絲緘の五ツ紋を、疊んであるま、懐へ捻込んで、ボオイを呼んで勘定をすると、件の金袋を提げたのが其の金袋は蓋し代金を受納めるために持つて居るのではなく、剰金を出す用意をして居るものやう、規則正しく返したのに、銀一ツ添へて金之助は爰に長座を償つたが、斷るまでもなく、ボオイは之を別の衣兜に納れたのである。

「御機嫌よろしう。」

それと二人は卓子を挟んで齊しく立上つたのが、一所になり前後になつて出ようとする、横合の椅子から、

「やあ」と聲を懸けたのは、件の兀頭の小男であつた。

金之助ははじめて心着いて、はたと立留つて顔を見て、不意だといふ面色で更に見直したが、

「お、何うして」と驚いて言つた。

爰に先刻からおみこしを据ゑて、愛吉の物語に耳を傾けたり、士官の方をじろく見たり、或

は空合を伺つてびつしよりの奇觀を呈するなど、慌てたやうな、落着いたやうな、人の悪いやうな、香氣なやうな、殆ど端倪すべからざる、譬へば龍の如き否、寧ろ大雨に就いて龍を默想しつゝありしが如き、奇體なる人物は、渾名を外道と稱へて、名譽の順風耳、金之助と同一新聞社の探訪員で、竹永丹平といふのであつた。

三十六

軒の柳、出窓の瞿麥、お夏の柳屋は路地の角で、人形町通の唯ある裏町。端から端へ吹通す風は、目に見えぬ秋の音信である。

まだ宵の口だけれども、何となく人足稀に、一葉二葉ともすれば早や散りさうな、柳屋の軒の一本柳に、ほつかりと懸つて居る、一尺角くらゐな看板の賽ころは、斜に店の灯に照されて、此方へは一が出て、裏の六がまともに見られる。四五軒筋違の向う側に、眞赤な毛氈をかけた床几の端が見えて、氷屋が一軒、其には團扇が乗つてるばかり、涼しさは涼し、風はあり、月夜なり。氷屋の並びに表通から裏へ突抜けた藥屋の藏の背があつて、壁を塗かへるので足代が組んである、此の前に五六人、女まじり、月を向うの仕舞屋の屋根に眺めて、いづれも、蹲つて雨上りに出た墓といふ身で居る。

「え、もし。」

「然やうでございますね、」

「何うでせう、」

と口々に何れが何をいふのか知らず、低聲でひそく。

「ねえ、おい、」

「何うだらう、」

「然うさな。」

時々吸殻が呼吸をして、團扇が動くわ。

「構はず談じようぢやあねえか、十五番地の差配さんだと、昔氣質だから可いんだけど、町内の御差配はいけねえや。羽織袴で杖を持たうといふ柄だもの、かはつて謂つてくれねえから困るよな。」

「む、だが何しろ打棄つちやあ置かれめえ。」

「もし、確に不可ますまいね。」

些と老けた聲で、

「然れば宜しくござりません、昔から申すことで、何しろ湯屋で鐘の音を聞くのさへ忌むとして

「ござります。」

「而して詰る處、何に障るんですね。」

「否はじまりは地震かと思つてびく／＼して居たんで、暑さが酷かつたもんだからね。それといふ時の要心だ、私どもぢや、娯々にいひつけて、毎晩水瓶の蓋を取つて置きました。」

「へい、火事ならまあ、蓋を取る内も早い可いといふんでせうが、地震に水瓶の蓋を取つて置くはをかしいね。」

「理詰ぢやあねえんでさ、先づいはばお禁厭さ。安政の時に家中やられたのが、唯一人、面くらつて水瓶の中へ飛込んだ奴が、不思議に助かつたと謂ひますからね、よく／＼運だ、あやかるだけでも可うございませう。」

「お待ちなさい、して見ると鐵さん。」

「え。」

「お前さんが此頃また毎晩色ものの寄席へ行くのは矢張其處等の地震除から割出したもんだね。」

「何故、何故、え、御隠居。」

「麴町の人だがね、同一其の安政年度に、十五人の家内で唯一人寄席へ行つて居て助かつたものがありますわ。」

「様あ見やがれ、俺が寄席へ行くのを愚圖々々吐しやがつて、鐵さんだつてお所帯持だ、心なくツて欠厘でも贅な錢を使ふものかい、地震除だあ、おたふくめ。」

「おや、それぢやあ地震よけに、いつも寄席に行つて、お前一人助かる氣かい。」

「何だと。」

「いゝえさ、お前一人助かれれば女房は可いのかよ。」と其のかみさんか、女の聲。

三十七

「べらぼうめ、何を、何をいつてやあがる、と、何か言つていやあがる。」

「鐵さんぐうの音も出ささ、こりやお時さんが道理だ、は、は、は。」

齒の抜けた笑ひに威勢の可い呵々が交つて哄となると、件の仕舞屋の月影の格子戸の處に立つて居た、浴衣の上へ一寸袷織を引掛けた艶なのも吻々と遣る。實はこれなる御隠居の持物で。

鐵と謂はれたのは厄鬼となり、

「やい、ぢやあ汝あ何うだ、此の間鐵砲汗をやつつけた時一箸も食やしめえ。命取だ。恐しいといつて身震をしやあがつて、コン畜生、其癖俺にやあ三杯と啜らせやがつて、鍋底を又装りつけたらう、何うだ、やい、もう不可ねえだらう。勿體ない打棄つた處で犬だつて困るだらうと謂つ

たちやあねえか、犬だつて困るよ、命取をよ、亭主が食つてるのを見て汝一人助かりや可いのか
い、やい、七面鳥。」

「東西！」

「さあお家の亂れた。」

「さては此の前兆かッ。」

傍より、

「もし何でございます。」

「牝鶏のあしたすると言つて、牝鶏が差し出るからよ。」

「え、牝鶏があしたなら構ひませんが、恚うやつて頭を集めて居るのは、柳屋の雄鶏が宵啼を
するからでございませぬ。」

「う、成程、雄鶏だつての。」

「御串戯、」

「これはやられた。」

「皆様笑ひごとちやアありませんせ、火に障るつていふのちやアありませんか、ねえ御隠居。」
「然れば……謂つて。」

「御隠居さんなんざ齒に障りませうね、柳屋のは軍鶏だから。」

「誰だ、交ぜるない、嘉吉が處の母親さへ、水天宮様へ日參をするといふ騒だ。尋常事ぢやあね
え、第一又萬に一つ何事もないにした處が、心持が悪いぢやあねえか、宵啼なんて厭なものだ、
ほんとうに何うにかしようぢやあねえか。」

「何うするツて、殺しつちまへば可いんでせう。」

「然うだよ。」

「其は最う禍の根を斷つただから、宵啼をする鶏は殺すものとしてあるわさ。」

「其處で、」

「謂つたつて彼の女が肯くものか、何うして可愛がることといつたら、」
「恐しく聲を密めて、」

「御隠居様の前ですが、お内の猫位なものぢやアありませんせ。」

「先づの、」とあやふや。

「だから差配さんに懸合つて貰つてよ。」

「其の差配さんが今謂ふ杖だ。」

一段聲を張上げて高らかに策を獻するものあり。

「交番々々。」

「馬鹿をいへ、杖でさへ不可ねえものが、洋刀で始末にをへるかい。構ふこたあない、皆で押懸けて行つて彼の軍鶏を引奪くつて了ふとするだ。」

「大勢でか、些と變だな。」

「何さ、對手が何うといふんぢやあないが、一人や二人ではさすがに話しにくいて。」

「氣の毒なり、可哀相でもあり、」

「まあ、何にしる困つたものだ、今夜にも宵啼が留みさへすりや、あゝもかうもないんだけど、留まなきやあ、事のねえ内よ、氣の毒だが仕方がねえ。」

風はさらりと軒を渡つて、あゝ、柳屋で鶏が鳴く。

三十八

「藏人、藏人。」

涼しい聲で、たしなめるやうに呼懸けながら、店の左手に飾つた硝子戸の本箱に附着けて、正面から見えるやう、雑誌、新版、繪草紙、花骨牌などを取交せてならべた壇の蔭に、唯一人居たお夏は、小さな帳場格子の内から衝と浴衣の装で立つと齊しく、取着に簞笥のほめく次の間の

隔の葎箆を蓮葉にすらりと引開けて、すつと入ると暗くて涼しさうな中へ、姿は消えたが、やがて向直つてつかくと店へ出た、乳のあたりに其の胸を置かせて、翼に手をかけ抱いたのは、お夏が撰んで名をつけた、藏人といふ飼鶏である。

「何故今時啼くんだね、」と人にものを謂ふやうな、然れば宵の一聲にお夏が忙はしく立つたのは、恰も寐かしたつけた嬰兒が、求めて泣出すのに、嫁が其の乳房を齎らすが如き趣であつた。

「お前、寂しいのか。」

淋しいのかと謂つて、少しく抱きあげて、牙の如く鋭き嘴にお夏は頬の觸らぬばかり、

「私だつて店に獨り居るんだもの、我儘でございますよ。」

くるくると動かす藏人の目は光つて、ものに動する風情あり。

「母様は鹽梅が悪いし、寢て在らつしやるぢやありませんか、人がね、宵啼をするツて忌がります。不可いよ、厭だよ、幾度言つて聞かせるか知れないのに、何故言ふことをお聞きでない。」

と品ある目で屹と見たが、傾けて居る片頬から顔の色が和らいで、

「灯を見せてあげようね、宵ツ張たらないのなもの。」

店の真中へ二足三足、あかり前へ、お夏は釣洋燈の下に立ち寄つた。新版ものの表紙、錦繪の三枚續、二枚合せ、一枚もの、就中飼鶏がはつと色彩を放つて、金、銀、翠、紅、紫、あらゆる

る色のこゝに相應する中に、墨繪に肖たる立姿は、一際水が垂りさうである。

「お祭だわねえ、灯がついて賑かだらう。」

飼鶏は心ある如く炫い洋燈をとみかう見た。楯をも碎くべき其の蹴爪は、いたゞしげもなくお夏の襟にかゝつて居る。

「彼方を御覽、綺麗ぢやあないか、音羽屋だの、成田屋だの、片市……おや、誰かの姫君様といつたやうな方が在らつしやる、いやに澄してさ、高慢な風ぢやあないか、お前知つてるかい、何が合點さ」と言ひかけて打微笑み、

「何にも分らない癖に、おもしろいかい、然うかい。之は相撲の番附、此方が名人鑑、向うが雲閣、彼が観音様、瓢箪池だつて。喜藏が何時か浅草へ供をして來た時のやうだ。お前あの時分はおとなしかつたつけ、此頃はまるで嬰兒のやうぢやあないか、夜啼をして、良い兒だから最う些と遊んだら彼方へおいで、可いかい。夜になつて塙へ入るのは何もかはつたことはないけれど、何だか淋しさうで可哀相だねえ、母様と二人ばかりになつたつて、お前、私が居れば可いぢやあないか。」と、いつか獨言をいひながら段々軒に近づいた。

「まだ見たいのかい、さあ、何にしよう、これは軍の繪でございませう」と謂つてお夏は胸を反らし、黒目勝なのを仰向くと同時に、兩手で上へ差上げたが、翼の尖が髪にかゝつて、

「あら髪がこはれるよ。」と思はず手を放した、飼鶏はどんと身を落して、突立つて土間へ下りた。

三十九

溝石で路を劃つて、二間ばかりの間の軒下の土間に下りた、藏人は踏留まるが如くにして、勇ましく衝と立つたが、秋風は静々と町の一方から家毎の廂を渡つて來て、丁ど此の小さな散際の柳を的に、柳屋へ音信れたので、葉が一齊に靡くと思ふと、やがて軍鶏の威毛が戦き揺いで、それから鶏を手から落した咄嗟の、お夏の水髪を二筋三筋はらゝと頬に亂して、颯と吹いて其のまゝ寂寥。

此の名残であらう、枝に結へた賽ころは一ツくるりと廻つて、三が出て、柳の葉がほろりと落ちた、途端に高く脚をあげて、軍鶏は店前をとツツと歩行き出した。

お夏は片手をついて腰をかけて、土間なる駒下駄の上へ一片の雪かとはかり爪先をかけて、うっかりとなつた。フト其の飼鶏を念頭から奪ひ去られたのであらう、もの思をする人の常として、慍うは思ひ懸けず屢々心を失ふのである。

其間に軍鶏の健脚は、猫の額の如き店頭を往復することを以て満足が出来なくなつた。嘗て黒旋風愛吉をして、お夏の一諾を重ぜしめ、火事のあかりの水のほとりで、夢現の境に誘

つた希代の逸物は、制する者の無きに乗じて、何と思つたか細溝を一跨ぎに脊伸びをして高々と
跨ぎ越して、小路の真中へすつと出て、恰も西側を離れて、これから東側へ廻らうとして、狭い
町の屋根と屋根との中空へ来た、月の下にすつくとこそ。

土藏の前に集つた一團の人の驚きは推するに餘りある次第であらう。

渠等が額を集め、鼻を合せ、呼吸をはずませて、恰も魔界から最後の戦を宣告されたやうに呶
呶して居る、思むべき宵啼の本體が、十間とは間を措かず忽然として顯れたのであつたから。

剩へ這個の怪禽は、月ある町中へつツ立つと齊しく、一振りふつて首を伸して、高く蒼空を望
んで又た一聲、けい引おう！と叫んだ。

之をしも思み且つ恐れたる面々は、鳴聲があとを引いて、前町裏町すべて界限の路地の奥、
土藏の隅、井戸の底、屋根裏、階子の下、三階、額の裏、敷居、鴨居の中までも、遠く響いて押擴
がつて行くに連れて、次第に霧が起り、月がかくれて、殆ど名狀すべからざるありさまに變ずる
が如く見て取つた。

鶏鳴、曉を報する時、夜のさまが東雲にうつり行く状は、いつもこれに變らぬのであるけれど
も、月さへや、照し初めたほどの宵の内に何事ぞ。

宵啼を以て、火の神の町を焼く前驅とする者の心には、其の聲の至る處、路地の奥、土藏の隅、

井戸の底、屋根裏、階子の下、三階、額の裏、敷居、鴨居の中までも、燃えむとして火氣の蔓り
傳はる心地がして、あはれ人形町は柳屋の店を中心として眞黒な地圖に變ずるのであらうと戰慄
した。

「ワッ！」

古浴衣を蹴返して轉がるやうに驅出したのは、町内無事の日參をするといふ、嘉吉が家の婆様
ぢや。

四十

唯見れば白髪を振亂し、頤細つて瘦せさらばひ、年紀六十に餘るのが、肉の落窪んだ胸に骨の
あらはれたのを搔いはだけて、細帯ばかり、跣足で然も眼が血走り、薪雜木を引摺んで、飛出
たと思ふと突然、

「火事だ、」と叫んで、軍鶏を打たうとしたが、打外した。

藏人は咄嗟に躲して、横なぐれに退つたが、脚を揃へて、背中を掲げると礮と婆に突かけた。

「火事だ、」

又た喚いて件の薪雜棒を振廻す、形相恰も狂者の如く、否、如くでない、正に本物である。蓋

し小金も溜つて、家だけは我物にしたといふから、人一倍、寧ろ十倍、宵啼に神経を惱まして、六日七日得も寝られず、取り詰めた果が逆上をしたに違ひはないので。

白髪は飛んで、翼は亂れた。あれよと見る間に、婆と軍鶏と、とんと當り、颯と分れて、月下に唯ぐるりくと廻つた。

「汝、業畜生」と激昂の餘り三度目の聲は皸嘎れて、滅多打に振被つた、小手の下へ、恐氣もなく玉の顔、夜風に亂る、洗髪の島田を衝と入れて、敵と身體の擦合ふばかり、中を割つて引懸けにぐいと結んだ帯の背後へ、軍鶏を庇つたのはお夏である。

「お婆さん何をなさるんです。」

一寸横顔で振返つて、

「叱！」

軍鶏も窘むやうであつた。婆は恐しい目をしながら、胸に波を打たせて肩で呼吸だ、齒を喰緊めて口が利けず。

怒る處へ殺氣を籠めて、どかくと寄せて來た、お夏と藏人とを中に、婆の右左へかけて取巻いたのは土藏の前に居た連中。

「何だ、火事だ。」

「火事だ？」と口々に尋ねたが、之は事件の緒口を引出さうとするに過ぎない、皆々は云ふまでもなく、其間の消息を解して居た。

「こ、こ、こいつぢや、火事は此奴ぢや。」

人数が襲ひ來つたので思はずおさへて居た袂が弛んだ、お夏の手を振放して、婆は藏人に躍り蒐つた。

「何をするんですよ。」

遮らうとするお夏の帯を、ぐいと留めた者がある。同時に婆を突退けて、

「まあ、待ちなさい、」と一名。

發奮をくらひ、婆は尻餅をついて、熟柿の如くぐしやりとなつたが、むつくと起き、向をかへると人形町通の方へ一文字に駆け出した、且つ走り、且つ聲を絞つて、

「火事ぢや、火事ぢや。」

「あれ。」

嬰兒を懷に確乎と壓へ、片手を上げて追懸けたのは、嘉吉の家の女房である、亭主其の晩は留守さ。

「さてお夏さん、思切つておくんない、二三日前から薄々様子は知つて居なさうかね、町内

ぢやあ大抵氣にするツたらないんだから、一番ね、思切つて私等に鶏をおくんなさい。何も宵啼をすりや恠うと、政府からお觸が出たわけぢやないけれども、可うがすかい、心持だ。悪いことは謂ひませんや、お前さんのお爲に其の方が可からうと思ふからね。」
お夏は黙つて圍の中に居るのである。

四十一

「何うです、御承知だらうね、町内ぢやあお前さんの家が第一新顔だから、何か其邊にものもあるやうに思はれては迷惑、可うごすかい、分りましたらう。」

「軍鶏を寄越せつて謂ふんですか。」

「然やうさ。」

「連れてつて何うなさるの。」

「占めるんでえ、殺つちまふんでえ。」

と鐵だらう、打まけた。

慌て騒ぐと思の外、お夏は莞爾して、

「不可せんわ。」

「不可ねえと！」

「まあ、まあ、靜かに言つても分ることだ。もし、不可せんなんて然う平氣で居られぢやあ困るぢやあごわせんか。一體、母様に懸合ふ筈なだけけれど、御病人だからお前さんだ、見なすつたらう、嘉吉さん許のなんざ、あの騒。」

「御免なさいな。」と尙ほ笑ひながら平氣なもので、お夏は下に居て片袖の袂を添へて左手を膝に置いて、右手で藏人の背を撫でた。

「仕やうがないねえ。」

顔を見合せたのが二三人、談判委員も些と案外といふ語氣で、

「呑氣に何うも軍鶏と談なんかして居られぢや困りますよ、ちよこまかした事とは違ひますぜ。」

お夏は振仰いで、

「ですから御免なさいまし。」

「あやまるの、あやまらないのといふやうな岡つたるいこつちやあ無いんだといふに、困つちまふな。」

「私だつて困つて居る、」とお夏も差俯向いた。

「月夜で門へ寄合つたといふ條、大きな野郎が五人三人、恠うやつて來たんだから、よくくの

事だと思ひなさい、ね、さ、これが一番分が早い、分りましたか。」

退引かせず詰寄るに従つて、お夏は益々庇立、藏人に押被さるばかりにしつつ、

「最う屹とですよ、屹と鳴きはしませんよ、大丈夫だよ。私がよく言つて聞かせますから。」

「おや、此の上軍鶏と話なんぞされて堪るものか、氣味の悪い、何てツたつて何うせ助けては置かないんだ。へん、言つて聞かせる、人間の言ふことを背いて鶏が鳴かないやうなら、勝手

の悪い時は夜が明けねえや。」と嘲笑つた者がある。

お夏は屹と見て、

「何、」

「何、何たあ、何たあ何だい、經師屋の旦那に向つて、何たあ何だい、そんな口は軍鶏に利け。」

「唯、軍鶏の方が、お前さん方より餘程いふことが分りますよ。」

「皆様。」

一同の眼はお夏に注いだ。

「面倒だ、ヤツつけませう、可いや、手籠が悪いといふ方がありや後で又た對手になる、留めなすつたつて合點しねえ、さあ、退け。」

腕まくりをして掴みかゝらむす權幕であるのに、お夏は更に意に介しないか、眼あるものなら

ば面をも向けられないほど、品ある顔に笑を湛へて、

「其でも眞個に分らないんだもの、あやまつたら可いぢやありませんか。」

自ら疑はないことまた恁の如きはあるまい。將に突飛ばして軍鶏を奪はむとした男も、餘りのことに手が出なかつた。

其が猶豫つたので、却つて傍からいきり出した。彼方此方耳ツこすりをして、

「エ、」

「然やうさ。」

衆議一決。

四十二

兩人あり、其時、挟んでお夏の左右より、齊しく袖を引いて、

「さあ放した、退かないか。」

「餘り強情を張りなさりや仕方がない、姊さん、お前さんの身體に手を懸けますよ。」と斷つて立懸る、いづれも門札を出した、妻子もあらうといふ連中であるから、事爰に及んでも無法に拳は握らぬので。

「何をやるのよ。」

「いや、何うもしねえ、其ン畜生を渡せてえんだい。」

「これ。」

「厭ですよ。」

「厭？一人前の男に向つて、そんな我儘な挨拶があるものか。」

「分らないや分らないで、可いから町内の交際といふものを教へてやらう。」

「姉さん、蟲の薬だ、我慢しな。」

「厭」といふ時、黒髪は崩るゝ如く藏人の背に揺れかゝつて眞白な腕は逆に、半身捻れたと思ふ

と二人の者に引立てられて、風に柳の靡くやう、横さまに身悶えした、お夏は然も口惜しげに唇

を歪めたが、眦をきりゝと上げて、

「私を、……私を、……私を、……」と怒を帯びた聲強く、月に瞳を見据ゑたが、颯と耳朶に紅

を染めた。胴を反して、雪なす足を折曲げて、

「あ痛々々々。」

忽ち血の氣は頬に消えて、色は一際白すむのである。

「蟲殺しだ、些あ痛えや。」

「掴へつちまひなせえ、」とお夏を押へたのが早速の懸聲、それもこれも瞬く間で。

「危え、わッ！」

といつて、今、お夏を引立てたのを見るや否や、軍鶏の頸を捕へようとした鐵は、兩の掌で目

を蓋して背後へ反つた。

軍鶏は其の肩の邊りまで素直に宙へ飛んだのである。

其の脚の地に着くともろともに身を翻へしてどんと突くと、

「おッ」と喚いて、お夏の腕を捻つて居たのが手を放して飛退ると、袖が断れたか、とぐいと拂

つて、お夏はいま一人を振放して、衝々と月影に姿を消したが、柳の下を潛るが疾いか、溝を超

えて、店へ駆け上ると奥へ入つた。

後を追つて、奇異なる断々の聲を叫びながら駆け出した藏人を、ばらばらと追詰める連中の、

或者は右へ退き、或者は左へ避け、三人五人前後に分れて、賽の目のやうに散らばつた。

要こそあれ滅多當に拳を廻して、砂煙の渦くばかり、くるく舞して働きながら、背後から割

つて出て、柳屋の店頭に突立つた、蜘蛛眉の、猿眼の、豹の額の、熟柿の呼吸の、蛇の舌の、汚

い若衆を誰とかする、紋床の奴愛吉だ。

「待ちやあがれ此奴等、私が出入先を何うするんだ。」

奥から引返して出たのはお夏、五七人の男を對手に、いかに負けじとて何うする事ぞ、右手に長煙管を提げたり。兼て煙草は嗜まぬから、之は母親の枕邊にあつたのだらう、お夏は此の得物を取りに驅込んだのであつた。

「お嬢さん。」

「愛吉か。」

其まゝ店から下りさうなるを、びつたりと背でおさへて、愛吉は土間一杯に身構へながら、件の賽の目の如き足並の人立に向つて、かすれた聲、

「やい！何方様もよくおいで遊ばされやがつたね、へへへへ、何御用でございますか、仰せ聞けられまし、へへへへ。」

四十三

「……七錢三厘、二錢、五錢、十五錢、一錢、二十五錢、三十錢、可いかい。」

「へい、可うございます。」

愛吉は神妙に割膝で畏り、算盤を弾いて居る。間を隔てた帳場格子の内に、掛硯の上で帳面を讀むのはお夏で、釣洋燈は持つて來て臺の上、店には半蔀を下してある。

「十錢、十八錢、四十錢、五十八錢。」

「旨えもんですぜ。」

「こんな遅く讀むのを置くのぢやあないか、些とも旨いことはありやしない。」

「いゝえさ、商も恚うなりや、占めたものだといふんでさ。」

お夏は何にも謂はないで微笑みながら、

「八錢、七錢、五錢、合せて十二錢、三十二錢、十六錢。」

愛吉慌しく急込んで、

「おつと！と。」

「又かい。」

「大概可うがすがね。」

「算用が大概ぢやあ困るからね、又遣損なつたんでせう。」

「え、と、今何でさ、合せてなんて、餘計なことを言ひなすつた時、拇で引懸けて、上が下りて一ツ飛んで入りましたつけ。はてな、」

お夏は帳場格子に眩をついて、顔を出して、愛吉が手なる算盤を差覗いた。間近に照らす洋燈の明に、唯見れば喧嘩の名残である、前髪が汗ばんで居た。頬にかゝるのは愛嬌毛で、

「幾ッ入違へたの、お直しな。」

愛吉は小指で一寸々々と耳を搔き、

「珠を幾つ遣損なつたか、其が分りますと可うがすがね。」

お夏は腕を掛硯の上へ支き直して、明の後へ胸を引いた。

「最う此方へお寄越しなさい。」

愛吉は一議もなく、算盤と一所に額を突出し、お辭儀をして、

「何うぞ願ひます。」

入違ひにほんんと投出す、帳面を受取つて、愛吉は膝の上へ

「読みますぜ。」

お夏は前髪の下へ、美しい指を一本、珠を狙つて傍目も觸らず、

「さあ、」

「確乎おやんなさい。」

「あゝ、」と眞面目である。

「えゝと、恚うだに寄つて、はじまりから遣りますよ、拾錢也。」

「あゝ、」と置く。

「八錢八厘也、可うがすかい。」

「あゝ、」と置く。

「三十五錢也。」

「あゝ、」と置く。

「それから二十八錢也。」

「あゝ、」

愛吉は目を擦つた。

「お嬢さん、貴女は手習はからつぺただつていふんですが、此の字は細くつて綺麗ですね。」

「あゝ。」

「おつと、又二十四錢也。」

「あゝ、」と置く。

「違つた、二、二、二、二十二錢、然う、然う。」

と獨りで狼狽へて獨で落着く。

お夏は後生大事に、置いた處を爪紅の尖で壓へながら、

「ちらくするね、屹つと飲んでおいでだよ。」

「おつと、八錢也。」
早速珠を弾いて、

「あゝ、」
「何うも一ツ一ツ、あゝと返事をなさつちやあ、其の間にぼつく、私なんざ及びツこなし、旨いものです。」

「旨いもんです。」とお夏は珠を凝視めたまゝで莞爾する。

「お次が二十八錢也。」

四十四

「お夏や。」

折から奥で衰へた聲して呼んだのは、病の床に臥して居るといふ母様。此の聲を聞くと、愛吉は胸を折つて、肩の中へ頸を縮めて、口をむぐぐと遣る。お夏は之を見ぬやうにして一寸見ながら、

「母様の。」

「おゝ、いゝえ、来るには及びません、勘定をしておいでか。」

「唯、」と軽く言ふ。

「御苦労だの。」

「母様、今夜は愛吉が来てくれまして、種々あの交ぜかへしたり、下手な算盤を置いたり、間違つたことをいつたりしますから、おもしろくつて可うございますよ。」

「酷いことを、」と口の裡、愛吉は苦い顔をして、お夏を怨めしさうに見る目をぱちくり。

「愛吉、難有うよ。」

「これは、」と額を押へたが、隔てて居れば見えもせず、聞えもせず、目のあたりのお夏にはどんなに可笑かつたらう。

「母様、愛吉があんな風をいたします。」

愛吉はじたばたしたが、くるりと坐り直つて奥の方に手をついた。

「何ういたしましたして、えゝ、水をつて申しますと、平時のとはり裏長屋の婆さんが汲込んで行つたと仰有るんで、へい、もう根つから役に立ちません。」と膝を擦つたり、天窓を掻いたり。

「へい、何でございまして、其の、」

「何が何うおしなのさ、」とお嬢さん人の悪い。

愛吉は又た慌てて、

「其の、何でございまして、へい。」

「佃島のは達者かい。」

「え、阿母でございますか、え、ぴん／＼いたしてをります。え、毎日のやうにもお伺ひ申し上げませんければなりませんと、いつでも然う申しちやあね、濟まないツて言ひますんでござい
ますが、あ、して一人で店を行つて居りますし、其に此頃ちやあ、度々上ると、お夏様が氣を揉
んでお構ひ遊ばして、却つてお邪魔だからと、こんなに申しまして、へい。」

「然うかい、お前が一寸々々来てくれるんだもの。佃島からは大變だ、今度逢つたら宜しくと申
してくんよ。」

「難有うございます、私は何うも些とも御用にや立ちませんで、ほんのもうお嬢様の癩癩、」

途端にお夏が帳場格子をコト／＼と叩いて氣を着けた。振向くと眉を擧めて、かぶりを振つて
見せたので、

「癩、」と行詰り、

「癩……癩なんぞお起しなすつちやあ不可ません、紋床の親方なんぞも申しますが、氣永に御養
生なさいませんと、お焦れなさるのは一番毒ですつて、」といひかけて、額の汗を拭ひながら、愛

吉は這身になり、暗い蘆戸を覗入れるやうにして、

「もし御新造様え。」

「稍あつて、

「あいよ。」

「而して早くよくおなんなすつて、又お襟でもあたらして下さいまし、然うまづくはありません
や、剃刀だけは御用に立ちます。」としんみりする。

「涼しくなつたら可からうと思ふよ、今夜あたりは餘程心持が可いやうだよ。」

暫時言が途絶えたが、

「お夏や。」

「母様。」

「先刻うと／＼して居ると、戸外が大分騒がしかったやうだつて、」

愛吉はぎよつとして、又た頸を縮め、

「そうら。」

「何？あれは。」

「何でございますか、向うの嘉吉さんの所の婆さんが気が狂れて戸外へ飛び出したもんですから、皆で取押へるツて騒いだんですよ。」

とお夏は自若としていつて眞顔で居る、愛吉は苦笑、又苦笑。

「然うかい、飛んだこつたね、而して何うなりました。」

「火事だ火事だといつて表町の方へ驅出して行きましたつけ、暫時すると角の交番のお巡査さんが連れて戻りましたよ。」

自分か、り合のことは丸抜にして言ひ紛らした。お夏は母親の前を繕つたのであるが、しかし事實で。

先刻丁度來合せた愛吉が、常に口にするやう、お夏の痲癩を引受けて、町内の人々と言ひ争ひ、すはや、掴合の始りさうになつた時、恰も可し、婆を捕へて、彼の嬰兒を抱いた女房を従へて、嘉吉の宅へ届けるため、角の交番から出張したのが、見ると騒動、コヤ／＼と叱り留めて、所得税を納める者まで入交つて、腕力沙汰は、おい、何事ぢやい。

雙方聞合せて、仔細が分ると、仕手方の先見明なり、杖の差配さへ取上げさうもないことを、

如何ぞ洋刀が頷くべき。

各々自分勝手な迷信から、他人の持物を侵さうとする、其も方角が悪いといつて、掃溜の置場所を變へよとでも謂ふことか、鶏を殺さうとは沙汰の限り。

なほ人一人、其がためにと申立てるが、鶏の宵啼で氣が違ふほどの者は、犬が吠えると氣絶をしよう、理非を論ずる次第で無い。火事だ、火事だと驅け廻つて、いや火の玉のやうな奴、却つて其の方が物騒ぢや、家内の者注意怠るな、一同の者、屹と叱り置くぞ、早々引取りませい、とお揃きあり。

彼方でも此方でもぶつ／＼がら／＼、口小言やら格子の音。靴の響が遠ざかつて、此の横町は靜になつたが、嘉吉が家ではなほばた／＼するので、うるさいと謂つて、お夏が半蔀を愛吉に下さした、其内に藏人は舊の閨、煙管もそつと、母親の枕許へ、其で事濟となつたのであるが、寐つきなり殊に病の疲れ、知らぬと思つて居た母親に尋ねられて、お夏は落着いても、胸は騒いだのであるけれども、之も案ずるより産むが安かつた。

「愛吉、」

「え、」

無言で目を合せて居て、やがてのこと。

「あの、母様」

黙つて返事がないから、

「寐なすつたよ。」

眼を睜つて呼吸を凝した、愛吉は吻とばかり、

「可い鹽梅、確ですか。」とそツといふ。

「始終すやくして在らつしやる、先刻もよく寐て居なすつた様だつて。」

「其で彼の煙管などを持出して、眞個に彼を揮舞すつもりでございましたか。」

「む、」とお夏は打領く。

愛吉驚いた風で、

「途方もねえ。」

「私にだつて一人や二人は打てようぢやあないか。」

「飛んでもねえ。」

お夏は澄したもので、

「不可いか不知？」

「不可いたつて、可いたつて、そんな身體で、あの中へ揉込まれて、申戯ぢやアありませんぜ。」

髪の毛でもつかまつたら何うします。」

「まあ、」

「え、？」

「然うね。」とわけもなく合點する。

愛吉は乗出して、

「呑氣ぢやあ困りますな。」

四十六

「だから私が何時でも言ふんぢやございませんか、荒いことは軍鶏と私とで引受ますツて。ですから私におつしやるまで、我慢をして居なさらなけりや不可ません、眞個ですよ。御新造様がどんなに心配をなさるか知れません、可うがすかい。」

「其でも打棄つて置くと殺されるぢやあないか、鶏を寄越せつて謂ふんだもの。」

「そりや最う。否、濟んだ事は仕方がありませんが、之からもあることです、これからの事ですよ。だつて先刻も私が來合せましたから宜かつたやうなもの、何うして立至つた場合なら、貴女一人で叶ひつこがありますか。何うせ叶はねえので見りや、怪我なんぞなさらない方が割方で

「ございませう、威張つたつて婦人だ、何を爲得るもんですか。ねえ、」

「はい、然やうでございますよ。」

「そら、御覽なさい。」と愛吉は説破し得たりといふ顔であつた。

「愛吉、」

「へい。」

「私が来たから可いやうなものど、お言ひだがね。」

「え、然やうさ。」

「私は然うとは思ひません、」と莞爾々々する。

怪訝な顔色で、

「はてね。」

「私は巡查さんが見えたから其で助かつたと思ひますよ。」

「や、成程。」

「何うだい。」

「へ、へ、へ、一言もござなく、……」

續けさまに天窓を搔き、

「ですがね、お嬢さん。」

「あ、」

「私も深川のお宅へ泣込んで参りました時のやうに、何時も弱くばかしはございませぬ。あの頃は何でも恚う二三人とは謂ひませんや、一人でも向うへ廻して、ワツといふと、」

愛吉はぎよツとする仕方をして、

「最う目がくらみました。何、どんな目に合はうかと危険だから塞ぐんで、卑怯に生命が惜いと
思ふんぢやありませんけれども、嘔痛からうと、あらづもりをするんでさ。」

「まあ、」

「尤も、何ですか、一寸さきは分らないといつた工合で、からだらしがありませんでしたが、段
段馴れて来てお前さん、此頃ぢやあ、立身になりませうと、喧嘩の蟲が聲を懸ると、其から明る
くなりませぬ。そら拳固だ、どツこい足蹴だ、おツと其の手を食ふものか、其の内一人つんの
めるね、状あ見やがれと、一々合點が出来ますだらう。何うです、強くなつた證據ですぜ。親方
も言ひましたつけ、撲りあひに目を塞がないやうになりや、喧嘩流の折紙だつて、最う些と年紀
を取つて功を積んで来ると、極意皆傳奥許と相成ります。へ、」

「おやく、然うすると。」

「喧嘩をしませんとさ。」

「何、」

「極意皆傳奥許といふのは喧嘩をしない事ですとさ、何のこつた話らない。」
と愛吉は何か詰らなさう。

「ほんとうに詰らない、」

「否、處が私にやあ不可ません、お嬢さんなんぞ何でも分つて居なさるんだから、はじめから幾らも皆傳になられます、荒つぽい氣をお出しなすつちやあ不可ませんぜ。」

「あ、だからお前も喧嘩の話はおよし、お前の話といふと屹と喧嘩の事だよ。」

と淡泊したことを謂ひながら、物足りなさうな、濟まぬらしい、愛吉の様子を眺めて、もの優しく、

「おもしろい話をお聞かせな、私も淋いからゆつくりおし。而して、煙草がなくなれば上げようか。」

四十七

愛吉は店の箱火鉢を引張り寄せ、叩き曲げた眞鍮の煙管を構へ、膝頭で、油紙の破れた煙草入の申を搔廻しながら少し傾き、

「ト、おもしろい談？ 絵が許の彼のお米が身の上……ありや確もう御存じでございましたね。」

「あ、二三度聞いたよ、可哀相だわ、おもしろくはないよ。」

「さてと、困つたな、喧嘩が禁制となつて酔拂ひがお氣に入らずとあつては、前座種切れた。」

と吸ひつけ、

「お待ちなさい、お米が身の上は可哀相と極つて、長崎から強飯が長い話と極つた處で、これがおもしろいと形のついた話といつてはありますまい。私が一度甲州街道の府中に行つて居たことがあります。」

よくはやりましたが、新店で、親方といふのが少いので、女房も未だ出来たてだもんですから、職人は欲しい、世話はしたいが一所に居るのは些と工合が悪い、内には妹と厄介な叔母とが居て、丁ど別に一軒借りようといふ處で、家は見つかつて居る、所帯道具なんぞ、一式調ひ次第あとから繰込むとするから、私に先へ行つて夜だけ泊つて居てくれろと怗ういふ話です。

宜うございますとも。早速其晩から前餅蒲團一枚宛抱へて寝に行きました。木戸があつて玄關まであつて室敷が七ツばかり、十疊敷の座敷には袋戸棚、床の間づき、時代にてらく艶が着いて戸棚の戸なんぞは、金箔を置いて白鷺が描いてあらうといふ大したもんです。

私は日附の家へ瀬踏に使はれたんだとは氣が着きませんや。

床屋風情にやあ過ぎたものを借りやあがつた、襖の引手一個引剥しても、一廉飲代が出来るな
んと思つて、薄ら寒い時分です、深川のお邸があんなになりました、同一年の秋なんです。
其の十疊敷の真中で、昆布巻を極めて手足をのびくと遣りましたつけ。
愛吉は吸殻を拂いて、

「可うござかい、さあ寝られませんか。總鎮守の風の音が聞えますね、玉川の流は響きますね、遠
くぢやあ、ばつたんく機織の夜延でせう、淋いッたらありません。

悪くするところや狐でも鳴きさうだ、弱りましたね、然やう、一時頃でございましたらうか。
聞惚れて居たお夏は急にあどけないことをいつた。

「出たかい。」

餘り唐突に聞かれたから、愛吉まごついて、

「へい、何でございます。」

「いづれ何か。」

「最初は、庭に手水鉢があります、其の雨戸がカタリといひましたつけ、縁側を誰か歩行いて來
ます、變だと思つてる内に、廣間の前の處で蹠音が留んだんです。へい、といつて一ツ自分で領
いた。

「それだけ。」

「何ういたしましたして、これからなんですさ。しばらくすると、すつと障子を開けましたが、私が枕
を上げる時には、最う疊を三疊ばかりすらくと歩行いて來ました。

見ると婦人。

はてな、盗られる物はなし、戸締りはして置かないから、店から用があつて來たのか不知と、
ひよいと見ると、何う仕り……床屋の妹といふのは一寸娘柄は佳うございましたけれど、左の頬
邊に痣があつて第一圓顔なんです。」

四十八

「よく演劇で爲たり、晝に描いたりするのは腰から下が霧のやうになつてませう。

私が爾時見ましたのは、何うして、大した結構なものですぜ。

目鼻立のはつきりとした、面長で、整然とした高島田、品は知りませんが、よろけた豎縞の薄
いお納戸の着物で、悄乎枕許へ立つたんです。

時刻は時刻だし、場所は場所ですし、第一、其の玉が又、府中あたりに見ようたつて見られる
のぢやありません。何しろお嬢様、三階建の青樓の女郎が襟のかつた双子の半纏か何かで店を

張らうといふ處ですもの。

歌舞伎座のすつぽんから糶上りさうな美しいんだから、驚きましたの何のつて、ワツともきやつともまさかに聲を上げはしません、一番生命がけで、むつくり起上ると、フイと背後向になつて、風を切るやうにすつと引返しました。爾時は背筋のあたり、眞白な襟を艶々した鬘ね、毛筋もならべたほどに見えましたつけ、最う消えたんです。あくる朝は茫乎で何うも考へて見ると夢のやう、早い處で先づ、其の消えたあとのことを思出すと、何しろ眞暗なんでございませう。夢でなくツて顔色が何うの、着ものの色が何うの、鬘の形が恚うのと、分るわけがなからうぢやありませんか。

夢とすると話が出来ない、いかに田舎稼に出て居たつて、野郎の癖に新造の夢でもありません。之が山賊に出逢つて一貫投げ出したとでもいふ事なら、意氣地がねえたつて茶話にやなりませう。

黙つて居ました。

其の晩、又昨夜のやうに、燈火だけは枕頭へ置いて火の用心に灯は消して寝たんですが。

同一刻になりますと、兩戸がカタリ、ほんの、カタリと聞えます丈なんで、縁側に蹠音がしませう。枕を上げて見たばかりで、何故だか起返る事が出来ません。

其の女もしばらく立つて居ましたつけ、別に何といふ事は無しに、縁側の障子の際で、肩の邊が消えますとね、棧が見えて高島田もなくなりました。」

お夏は半ば聞棄てて、氣を入れるともなく返事ばかりして、帳面を彼方此方ばらばらと返して居たが、此時一點も疑ふ色のない顔を上げた。

「奇代だわねえ。」

「え、まだ、其が三晩四晩と續きましたね、段々氣味が悪くなつて来る所爲ですか、さあ、おいでなすつたと思ふと天窓から慄然として、壓を置かれるやうな鹽梅で動くこともありません。五日経つてからお約束の、叔母と、妹といふのが引移りました。けれども、そら私に瀬踏をさせた位なんですから、然うやつて日が経つても、何にもいはないについて大丈夫とは思つたでせうが、未だ安心がなりません、其處で段取は拔、所帶道具は運ばないで先づ泊りに来たもんです。」

次の室の六疊に二人抱ッこをして寝ましたつけよ。お前さん昨夜は大層うなされてねと、夜が明けてから吐します。さあ愈々だ、とぎよつとしたけれど、何時頃にと、惚けて尋ねますと、丁ど刻限が合つてるんで。

ま、よ、恚うなりや百年目だ。新造に取着かれる覺はないから、別に殺さうといふのぢやあな